八尾市文化財調査報告48
平成14年度国庫補助事業

八尾市内遺跡平成14年度発掘調査報告書

2003年3月

八尾市教育委員会

はじめに

八尾市は、大阪府のほぼ中央部に位置し、生駒山地の山麓部から西に広がる大阪平野の東部にかけての範囲を有しています。市域の平野部は、古くは河内湾、河内潟、河内湖に面し大和川をはじめとする多くの河川によって肥沃な土壌が形成されており、縄文時代から連綿と遺跡が存在しています。また、生駒山地の山麓部や羽曳野丘陵上には旧石器時代から連綿と遺跡が存在しており、当市は遺跡の宝庫と呼べる地域であります。

本書には当教育委員会が平成14年度に(財)八尾市文化財調査研究会に委託して実施した市内の個人住宅建設、民間の各種事業の工事等に伴う遺構確認調査の成果を収めております。

今後市内の貴重な埋蔵文化財が市民の方々をはじめ、多くの人々に親しまれる形で、保存・活用されていくことが、重要な課題となるでしょう。本書がその役割の一助を担うことができれば幸いに存じます。

最後になりましたが、調査にご理解、ご協力を賜りました関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成15年３月

八尾市教育委員会

教育長　森　　卓

例　　言

1．本書は、平成14年度の国庫補助事業(市内遺跡)として、八尾市内で実施した発掘調査の報告書である。平成13年度実施分についても一部掲載している。
2．これらの調査は、八尾市教育委員会が(財)八尾市文化財調査研究会に委託して実施したものである。
3．本書の作成にあたっては、八尾市教育委員会(吉田野乃)・(財)八尾市文化財調査研究会(岡田清一、高萩千秋、坪田真一、成海佳子、西村公助、樋口　薫)の各調査担当者が執筆を行い、文書は各報告の文末に記した。
4．本年度の調査で本書に概要を所収できなかった分について巻末に一覧表を掲載した。
5．本書の編集は、八尾市教育委員会生涯学習部文化財課　藤井淳弘が行った。

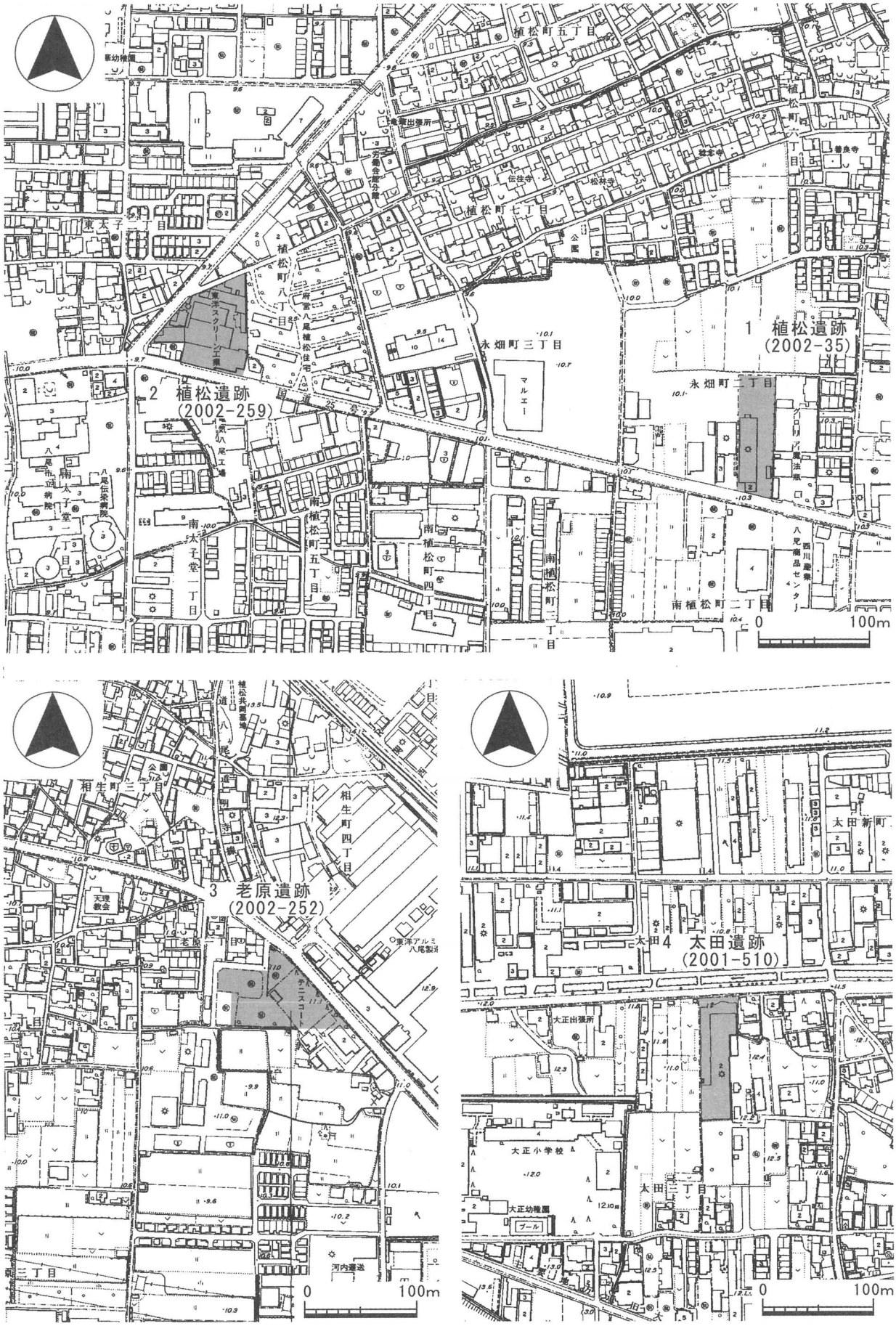
本文目次

調査地位置図Ⅰ～Ⅵ
1　植松遺跡(2002－35)の調査……1
2　植松遺跡(2002－259)の調査 ……2
3　老原遺跡(2002－252)の調査 ……3
4　太田遺跡(2001－510)の調査 ……3
5　太田川遺跡(2001－451)の調査 ……5
6　太田川遺跡(2002－281)の調査 ……5
7　恩智遺跡(2001－352)の調査 ……6
8　恩智遺跡(2002－181)の調査 ……7
9　恩智遺跡(2002－224)の調査 ……7
10　楽音寺遺跡(2002－293)の調査 ……8
11　木の本遺跡(2002－364)の調査 ……8
12　久宝寺遺跡(2002－145)の調査 ……11
13　久宝寺遺跡(2002－199)の調査 ……12
14　久宝寺遺跡(2002－285)の調査 ……13
15　郡川遺跡(2002－65)の調査……14
16　郡川東塚古墳(2002－153)の調査 ……15
17　小阪合遺跡(2002－294)の調査 ……17
18　成法寺遺跡(2002－266)の調査 ……17
19　神宮寺遺跡(2001－64)の調査……18
20　神宮寺遺跡(2002－280)の調査 ……22
21　太子堂遺跡(2002－204)の調査 ……22
22　高安古墳群(2001－213)の調査 ……23
23　高安古墳群(1999－586)の調査 ……31
24　高安古墳群(2002－236)の調査 ……31
25　東郷遺跡(2002－238)の調査 ……32
26　東郷遺跡(2002－176)の調査 ……34
27　中田遺跡(2002－67)の調査……36
28　花岡山遺跡(2002－198)の調査 ……37
29　水越遺跡(2002－79)の調査……38
30　水越遺跡(2002－82)の調査……39
31　八尾南遺跡(2001－358)の調査 ……40
32　八尾南遺跡(2001－491)の調査 ……41
33　弓削遺跡(2002－66)の調査……44
34　弓削遺跡(2002－23)の調査……45

調査一覧表　平成13年度2月・3月
　　平成14年度4月・5月(市教委実施分)

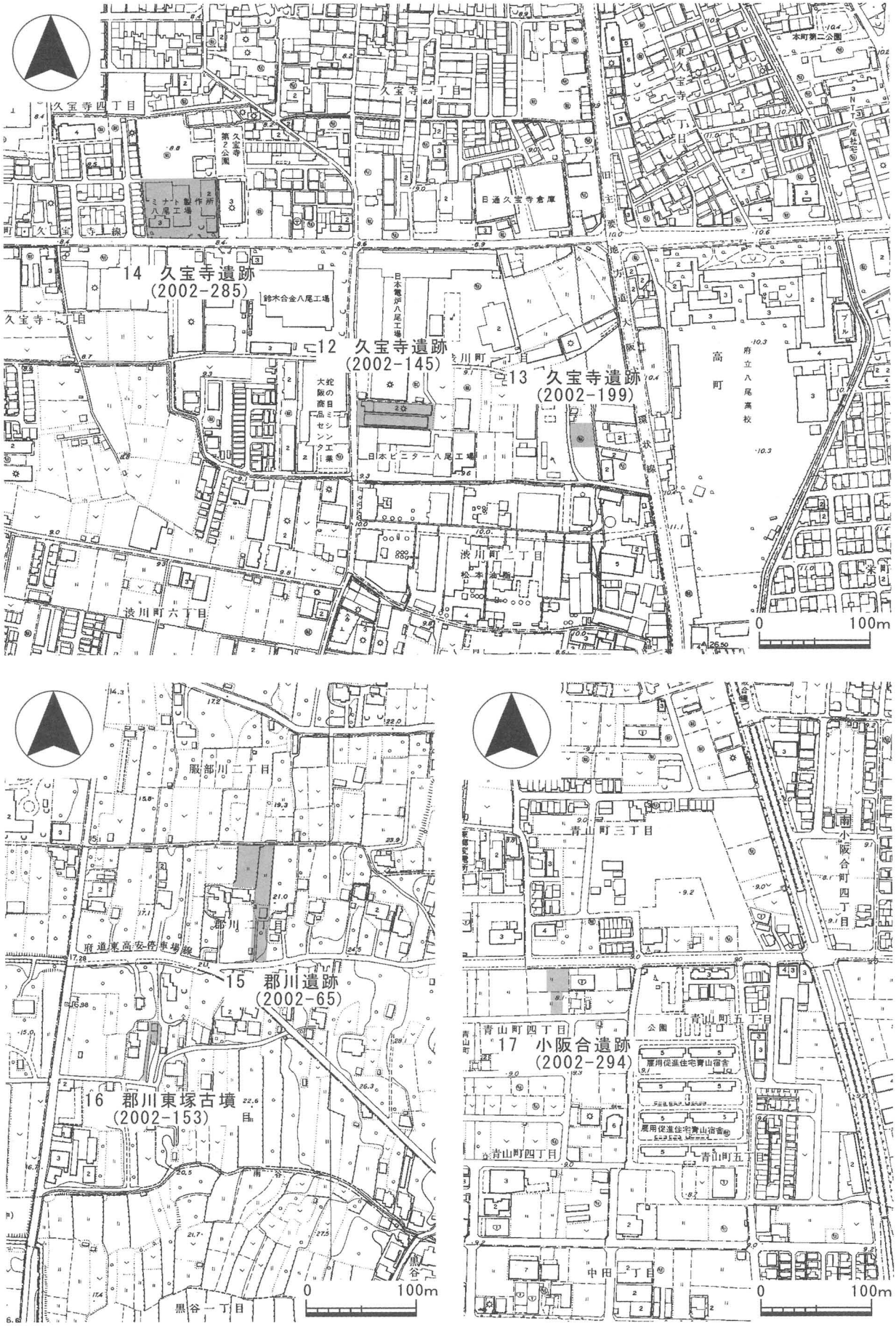
図版目次

図版1　植松遺跡(2002－35)の調査
　　植松遺跡(2002－259)の調査
　　老原遺跡(2002－252)の調査
図版2　太田遺跡(2001－510)の調査
　　太田川遺跡(2001－451)の調査
　　太田川遺跡(2002－281)の調査
　　恩智遺跡(2001－352)の調査
図版3　恩智遺跡(2001－352)の調査
　　恩智遺跡(2002－181)の調査
　　恩智遺跡(2002－224)の調査
　　楽音寺遺跡(2002－293)の調査
図版4　木の本遺跡(2002－364)の調査
図版5　久宝寺遺跡(2002－145)の調査
　　久宝寺遺跡(2002－199)の調査
　　久宝寺遺跡(2002－285)の調査
　　郡川遺跡(2002－65)の調査
図版6　郡川東塚古墳(2002－153)の調査
　　小阪合遺跡(2002－294)の調査
　　成法寺遺跡(2002－266)の調査
図版7　神宮寺遺跡(2001－64)の調査
図版8　神宮寺遺跡(2002－280)の調査
　　太子堂遺跡(2002－204)の調査
　　高安古墳群(2001－213)の調査
図版9　高安古墳群(2001－213)の調査
図版10　高安古墳群(1999－586)の調査
　　高安古墳群(2002－236)の調査
　　東郷遺跡(2002－238)の調査
図版11　東郷遺跡(2002－238)の調査
　　東郷遺跡(2002－176)の調査
　　中田遺跡(2002－67)の調査
図版12　花岡山遺跡(2002－198)の調査
　　水越遺跡(2002－79)の調査
　　水越遺跡(2002－82)の調査
　　八尾南遺跡(2001－358)の調査
図版13　八尾南遺跡(2001－358)の調査
　　八尾南遺跡(2001－491)の調査
　　弓削遺跡(2002－66)の調査
　　弓削遺跡(2002－23)の調査
図版14　八尾南遺跡(2001－491)の調査
　　弓削遺跡(2002－23)の調査

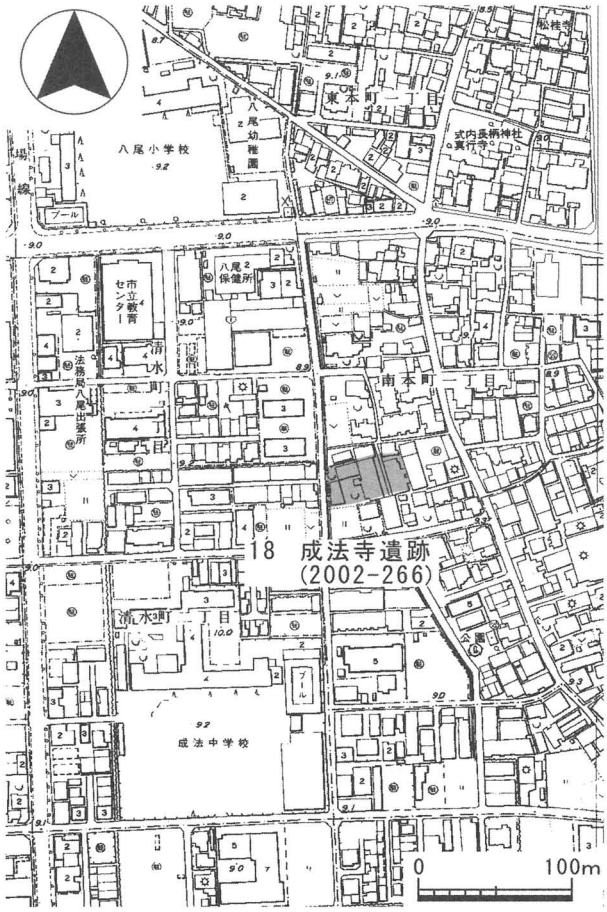


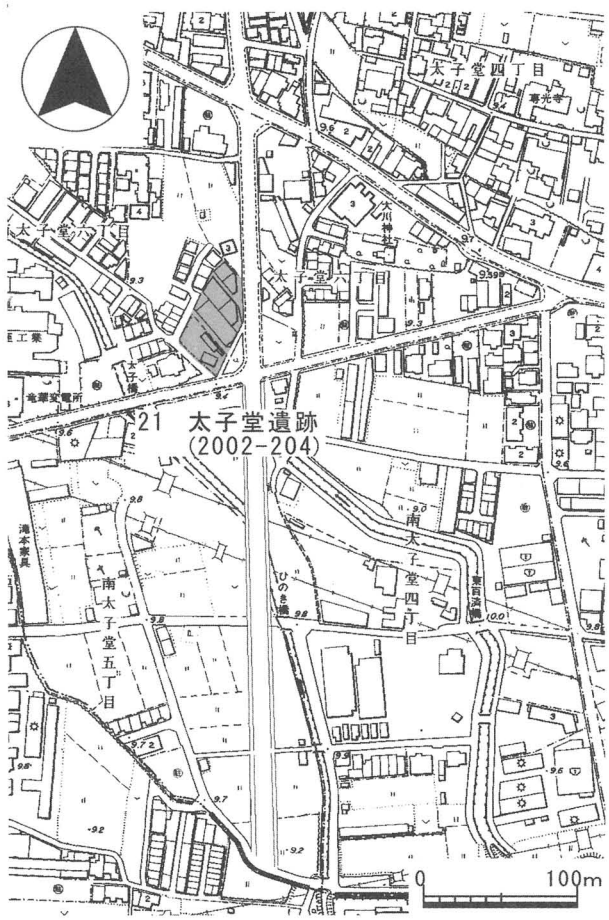
第１図　調査地位置図Ⅰ（Ｓ＝1/5000）

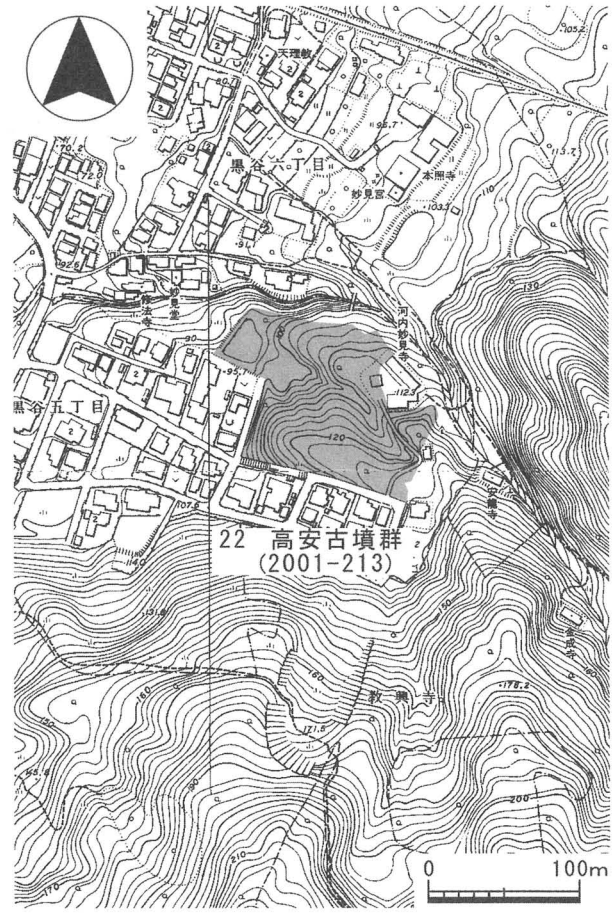
第２図　調査地位置図Ⅱ（Ｓ＝1/5000）



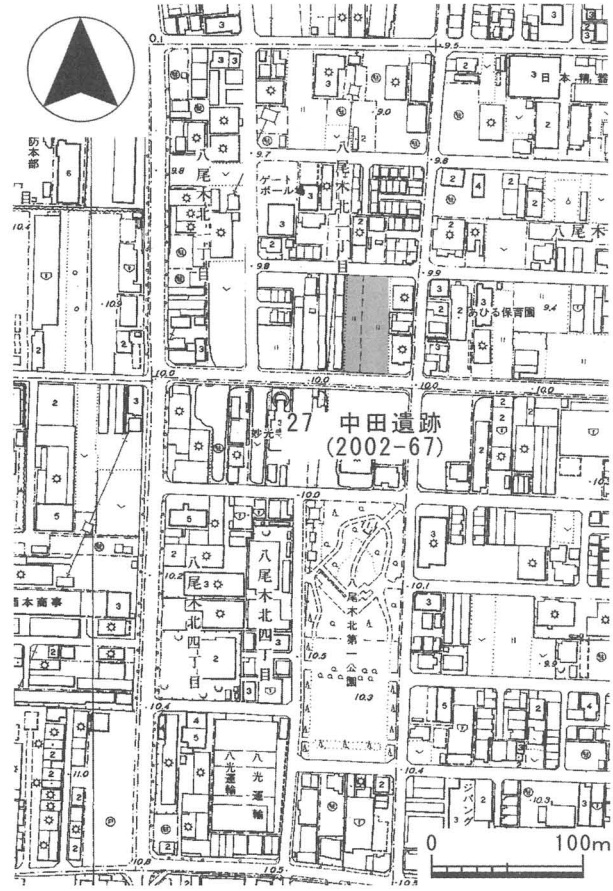
第３図　調査地位置図Ⅲ（Ｓ＝1/5000）



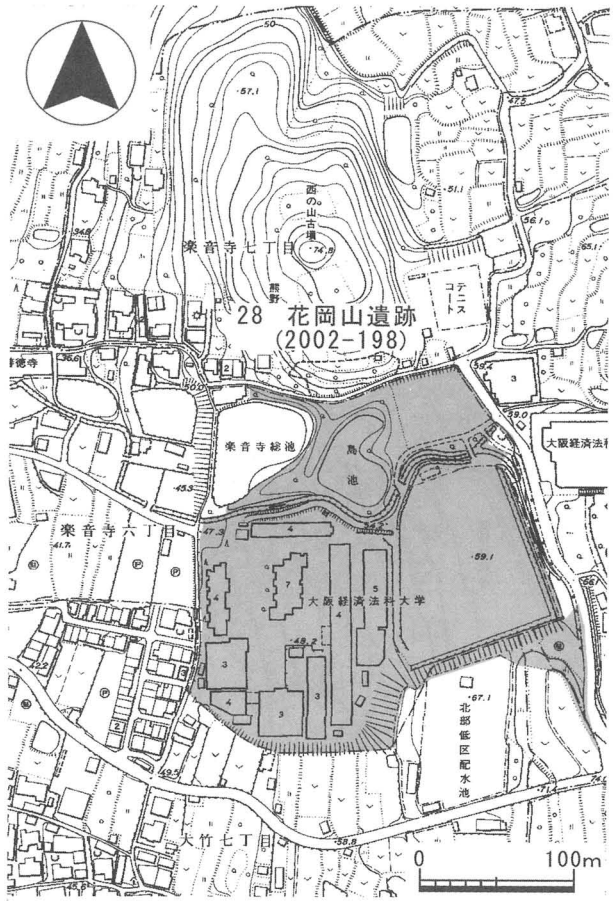


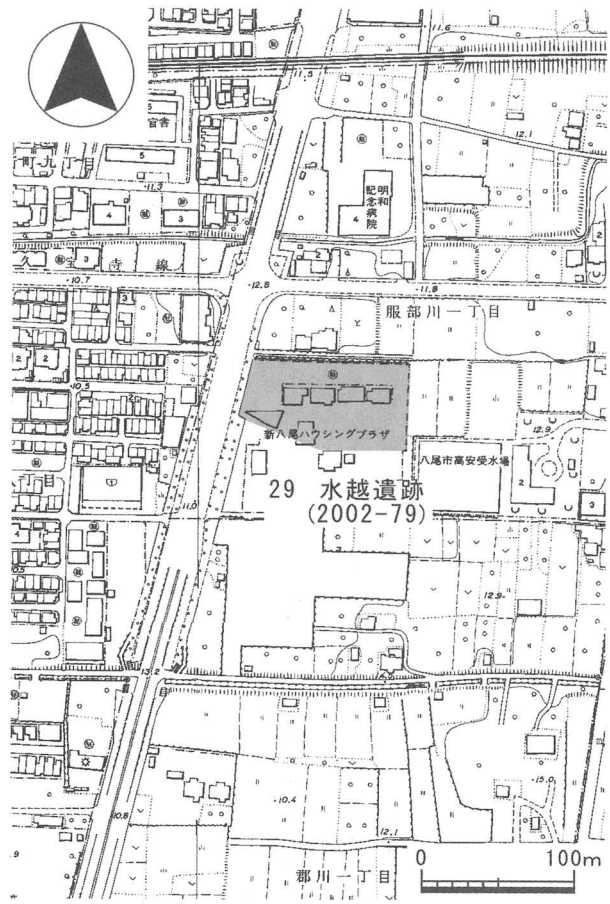


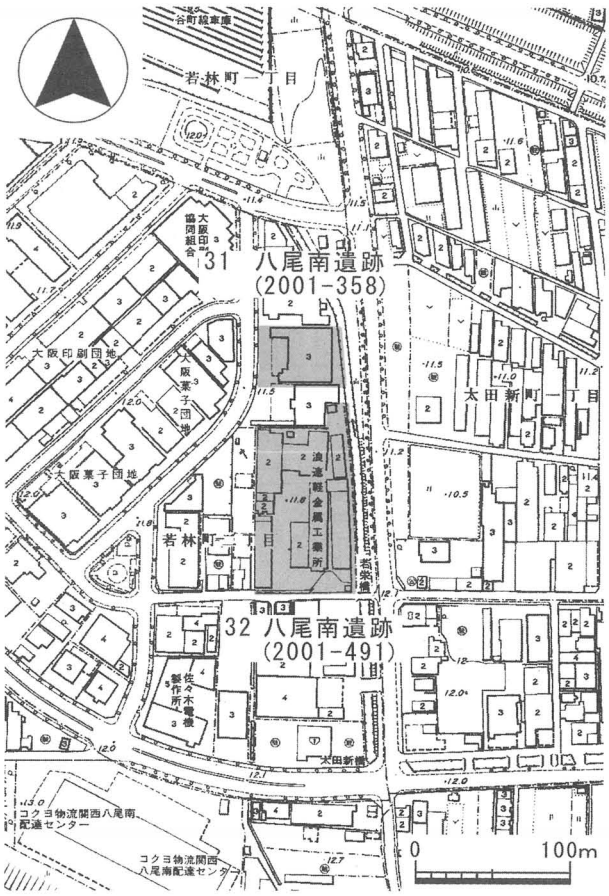
第４図　調査地位置図Ⅳ（Ｓ＝1/5000）

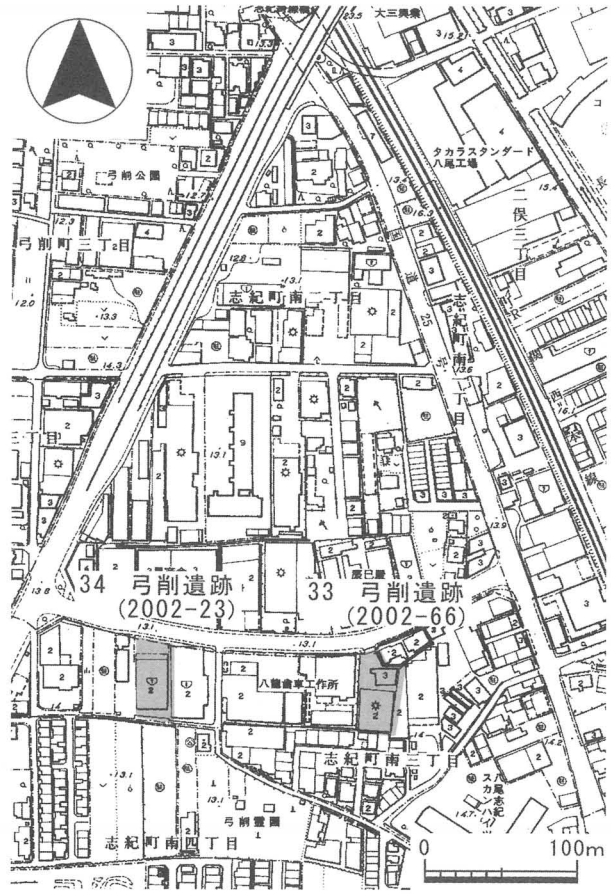


第５図　調査地位置図Ⅴ（Ｓ＝1/5000）









第６図　調査地位置図Ⅵ（Ｓ＝1/5000）

1　植松遺跡(2002－35)の調査

1．**調査名**：分譲住宅建設に伴う遺構確認調査

2．**調査地**：八尾市永畑町２丁目47番２

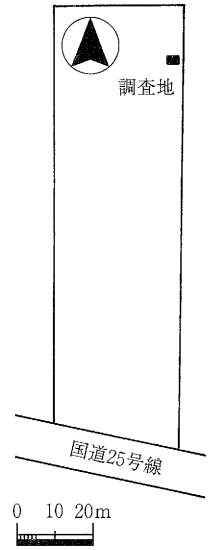
3．**調査期間**：平成14年７月18日

4．**調査面積**：21.6m²

5．**調査方法**：防火水槽部分に5.4×４ｍの調査区を設定し、現地表下約3.1ｍまで機械および人力で掘削し調査を行った。

なお、今回の調査では八尾市作成1/2500の地図に記載している標高(調査地の南側国道25号線上T.P.＋10.3m)を使用した。

6．**調査概要**：現地表面はT.P.＋10.1～10.2ｍで、以下3.1ｍ前後までに11層の地層を確認した。１層は盛土で、２層は近年まで耕されていた作土である。３層および４層は粘土で、４層からは鎌倉時代初頭頃の瓦器椀や土師器の破片が少量出土したが、上面から切り込む遺構の検出はなかった。５層は細粒シルト混粘土で、上面から切り込む溝１条(ＳＤ101)を検出した。



第８図　調査区設定図(Ｓ＝1/2000)

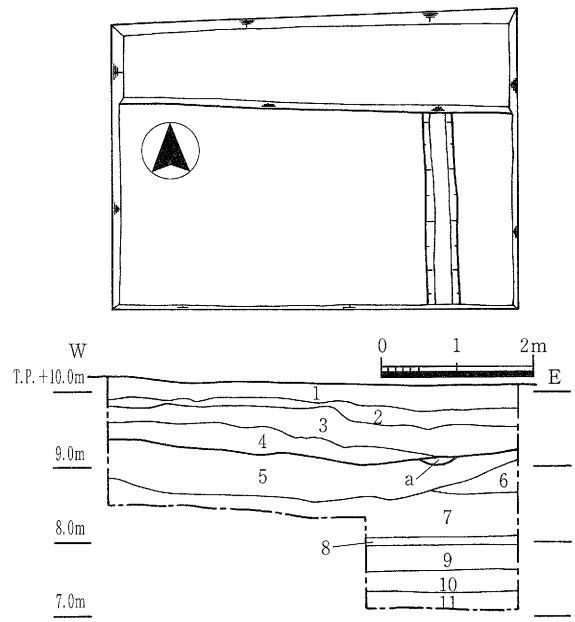
ＳＤ101は調査区東西側で検出した。検出長2.6ｍを測る。幅約0.4～0.5ｍで、南北方向に直線に伸びている。深さは0.05～0.1ｍを測る。埋土は灰色細粒砂混粘土の単一層で、瓦器の椀が少量出土した。

さらにT.P.＋7.1ｍ前後まで掘り下げたが遺構の検出および遺物の出土は認められなかった。７層以下11層まではシルトや粘土がほぼ水平に堆積した。

出土遺物

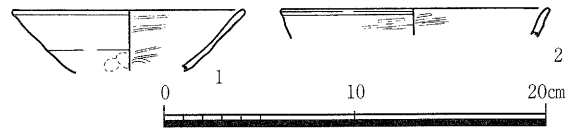
１は４層から出土した瓦器の椀である。この瓦器椀は器壁が薄く、内面ミガキを施し、外面はナデている。２はＳＤ101から出土した瓦器の椀である。この瓦器椀は器壁が厚く、内外面ともにやや密なミガキを施している。

7．**まとめ**：５層上面で検出した溝と同様の遺構は、今回の調査地の西隣で行った市教委昭和55年度調査(1983高木)で検出しており、耕作に伴う素掘り溝の可能性があるとされている。このことから本調査地付近には平安時代から鎌倉時代にかけて生産域が存在していた可能性が高いと思われる。　(西村公助)



1　盛土
2　N2/0　黒色粗粒砂混粘土
3　5B5/1　青灰色細粒砂混粘土
4　5YR4/2　灰褐色細粒砂混粘土
　鎌倉時代の瓦器･土師器の破片少量出土
5　5YR4/6　赤褐色細粒シルト混粘土　上面土壌化
6　N4/0　灰色細粒シルト混粘土
7　10BG3/1　暗青灰色細粒シルト混粘土
8　5B5/1　青灰色細粒シルト混粘土
9　5BG4/1　暗青灰色細粒シルト混粘土
10　5PB2/1　青黒色粘土　炭化物、植物遺体含む。
11　5B5/1　青灰色粘土質細粒シルト
a　N４/0　灰色細粒砂混粘土　瓦器の破片少量含む　SD101埋土

第９図　平断面図(Ｓ＝1/100)



第10図　出土遺物実測図(Ｓ＝1/4)

参考文献

・高木真光　1983「第２章　植松南遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報1980・1981年度』八尾市教育委員会

・高萩千秋　1998「Ⅰ　植松遺跡(第３次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告59』財団法人八尾市文化財調査研究

2　植松遺跡(2002－259)の調査

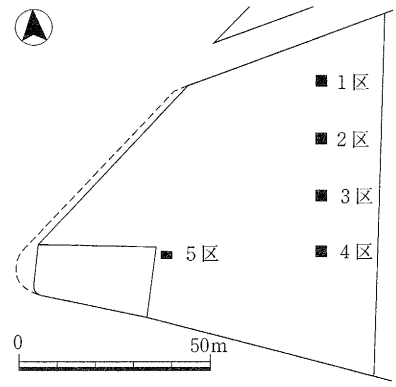
1．調査名：店舗(パチンコ店)建設に伴う遺構確認調査

2．調査地：八尾市植松町８丁目20番、24番、27番、及び35番

3．調査期間：平成14年10月４日

4．調査面積：42㎡

5．調査方法：店舗予定地に４か所(３×３ｍ)、防火水槽予定地に１か所(２×３ｍ)、計５か所を調査した。前者は北から１～４区、後者は５区と呼んだ。現地表下1.2～1.5mまでを上層調査とし、流水堆積層の深さを確認する目的で、以下１ｍ程度を掘削した。高さの基準は、調査地から西約250ｍ地点の大阪府水準点(T.P.＋9.43ｍ)から移動した。

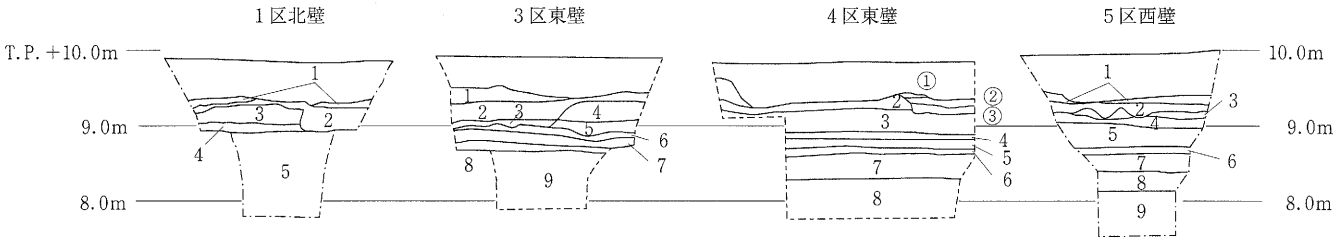


第11図　調査区設定図(Ｓ＝1/2000)

6．調査概要：現地表面の高さはT.P.＋9.9～10.0ｍ、盛土は0.2～0.4ｍの厚さがあり、旧地表面の高さはT.P.＋9.5～9.7ｍを測る。以下には作土・床土等にあたる攪拌をうけた層が２～４層堆積し、流水堆積層に至る。

１区ではT.P.＋9.0ｍ以下の５層が流水堆積層にあたり、深さ約1.2ｍまで確認した。この流水堆積層は、２区～５区では中間に粘土質シルトの堆積があり、上下２層に分かれる。２区～４区では上層がT.P.＋9.3～9.4ｍ以下(層厚0.4～0.5ｍ)、下層はT.P.＋8.3～8.7ｍ以下である。５区では上層がT.P.＋9.0～9.2ｍ以下(層厚0.8ｍ)、下層はT.P.＋8.1ｍ以下である。いずれも下層の流水堆積層は１ｍ前後の厚さまでしか確認していない。このうち、２区ではT.P.＋9.35ｍ以下に流水堆積層４・５層があり、それを切って２・３層が盛られていることを確認した。また、４区では、２層上面から切り込む東西方向の溝状の落ち込みを検出している。出土遺物は、攪拌をうけた層や流水堆積層から、磨耗した土師器・陶磁器・瓦の極細片が極少量出土している。

7．まとめ：調査区全域にわたって流水堆積層の堆積が認められた。　(成海佳子)



1区
1　10BG3/1暗青灰色中礫混砂シルト
2　5GY4/1暗オリーブ灰中礫混砂質シルト(溝？)
3　5GY4/1暗オリーブ灰～5Y4/4暗オリーブ砂質シルト
4　5GY4/1暗オリーブ灰～5Y4/4灰オリーブ砂質シルトに7.5Y5/1灰粘土のブロック
5　10Y4/1灰粗粒砂

2区
1　10YR5/6黄褐中礫混極細粒砂
2　10GY5/4にぶい黄褐粗粒砂に10YR5/2灰黄褐砂質シルトのブロック
3　10YR5/6黄褐色中粒砂に10YR5/2灰黄褐粘土質シルトのブロック
4　10YR6/6明黄褐粗粒砂
5　10YR6/6明黄褐色中粒砂
6　2.5Y4/6オリーブ褐極細粒砂混粘土質シルト
7　10YR4/1褐灰砂質シルトのブロック
8　2.5Y5/4黄褐粘土質シルト混粗粒砂～中礫
9　10GY6/6明黄褐色～10GY6/1緑灰粗粒砂～礫

4区
1　2.5Y4/2明黄灰粗粒砂混砂質シルト
2　2.5Y5/4黄褐粗粒砂に10YR4/4褐砂質シルト
3　2.5Y5/4黄褐粗粒砂
4　5Y5/4オリーブ極細粒砂混粘土質シルト
5　5GY4/1暗オリーブ灰極細粒砂混粘土質シルト(中礫少量混)
6　5GY4/1暗オリーブ灰極細粒砂混粘土質シルト(中礫多量混)
7　5GY4/1暗オリーブ灰極細粒砂～粘土質シルト混中礫
8　2.5Y7/2灰黄粗砂～礫

5区
1　2.5Y5/1黄灰砂質シルトに2.5Y7/6明黄褐粘土・2.5Y7/2灰白粘土質シルトのブロック
2　10YR3/4暗褐中礫混砂質シルト
3　2.5Y5/2暗灰黄・2.5Y3/1黒褐粘土質シルト混粗砂のブロック
4　2.5Y5/2暗灰黄・2.5Y6/1黄灰砂質シルト～粗粒砂のブロック
5　5BG5/1青灰粗粒砂
6　5G5/1緑灰粘土質シルト
7　5BG7/1明青灰・N7灰白粗粒砂
8　N3暗灰中礫量混粘土質シルト
9　10GY6/1緑灰粗粒砂～礫

第12図　断面図(Ｓ＝1/100)

3　老原遺跡(2002－252)の調査

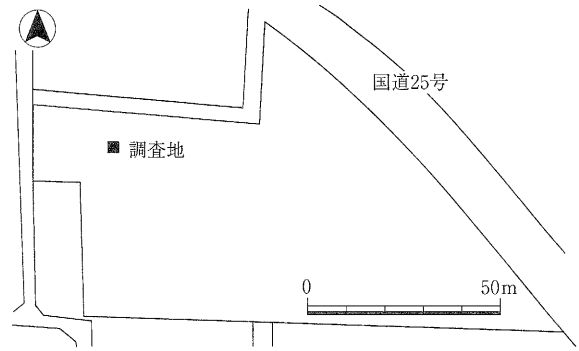
1．**調査名**：店舗建設に伴う遺構確認調査

2．**調査地**：八尾市老原１丁目13番、15番及び16番、17番、19番、20番、22番、24番１の各一部

3．**調査期間**：平成14年10月３日

4．**調査面積**：９㎡

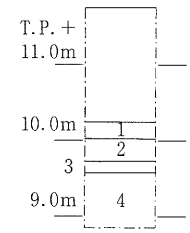
5．**調査方法**：耐震性貯水槽建設予定地に３ｍ四方の調査区を設定した。現地表下3.5ｍまでの調査予定であったが、3.0ｍ前後で重機での掘削が不可能となり、湧水も多く、危険な状態となったため、それ以下の掘削はしていない。高さの基準は、南西約100ｍ地点の老原遺跡第10次調査(ＯＨ2002－10)地の仮ベンチマーク(T.P.＋10.747ｍ)から移動した。



第13図　調査区設定図(Ｓ＝1/2000)

6．**調査概要**：現地表下2.6ｍに及ぶ撹乱があり、東端の現地表下1.5ｍ～3.0ｍ(T.P.＋10.2～8.9ｍ)間で１～４層を確認した。１・４層は流水堆積層である。４層直上では、奈良時代以降の土師器片が若干出土した。

7．**まとめ**：前述の老原遺跡第10次調査では、２枚の流水堆積層に挟まれた平安時代～江戸時代に相当する３枚の水田作土層を確認しており、当地の第１層～第４層がそれらに対応する可能性がある。　(成海)



1　10GY5/1緑灰中～粗粒砂
2　10Y5/2オリーブ灰中礫混砂質シルト
3　7.5Y5/1灰オリーブ中礫混粘土質シルト
4　10Y5/1灰極細～中粒砂

第14図　柱状図
(Ｓ＝1/100)

4　太田遺跡(2001－210)の調査

1．**調査名**：分譲住宅建設に伴う遺構確認調査

2．**調査地**：八尾市太田３丁目148－１，154，154－2

3．**調査期間**：平成14年５月22日

4．**調査面積**：21.38㎡

5．**調査方法**：防火水槽(規模3.6×3.7ｍ)１箇所と人孔(規模2.0×2.0ｍ)２箇所の調査を行なった。防火水槽を第１区、人孔を北から第２区・第３区と呼称する。現地表面から深さ約2.0～3.1ｍまで機械と人力を併用し掘削を行い、調査を実施した。今回の調査では、八尾市作成1/2500の地図に記載している標高(調査地の西側歩道上T.P.＋11.8ｍ)を使用した。

6．**調査概要**：第１区の６層上面で古墳時代中期～後期頃の遺構(土坑１基　ＳＫ101)を検出した。

ＳＫ101は調査区北西側で検出した。遺構の北西側は調査区外に広るため、全容は不明である。検出した平面形状は半楕円形で、東西幅約0.8ｍ以上、南北幅約1.4ｍ以上を測る。深さは0.3ｍで、北西側には窪みがある。埋土は上下２層に分かれ、上層からは土師器や須恵器の破片が少量出土した。

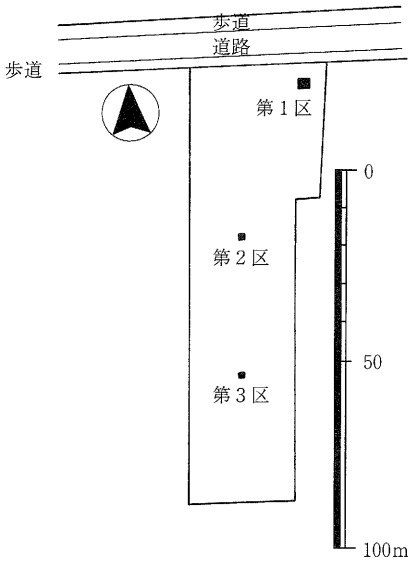
さらに掘り下げると、T.P.＋8.8ｍ前後で弥生時代後期後半頃の遺物を含む粘土層(９層)を確認した。

第２区と第３区は６層上面で調査を行なったが遺構の検出はなかった。

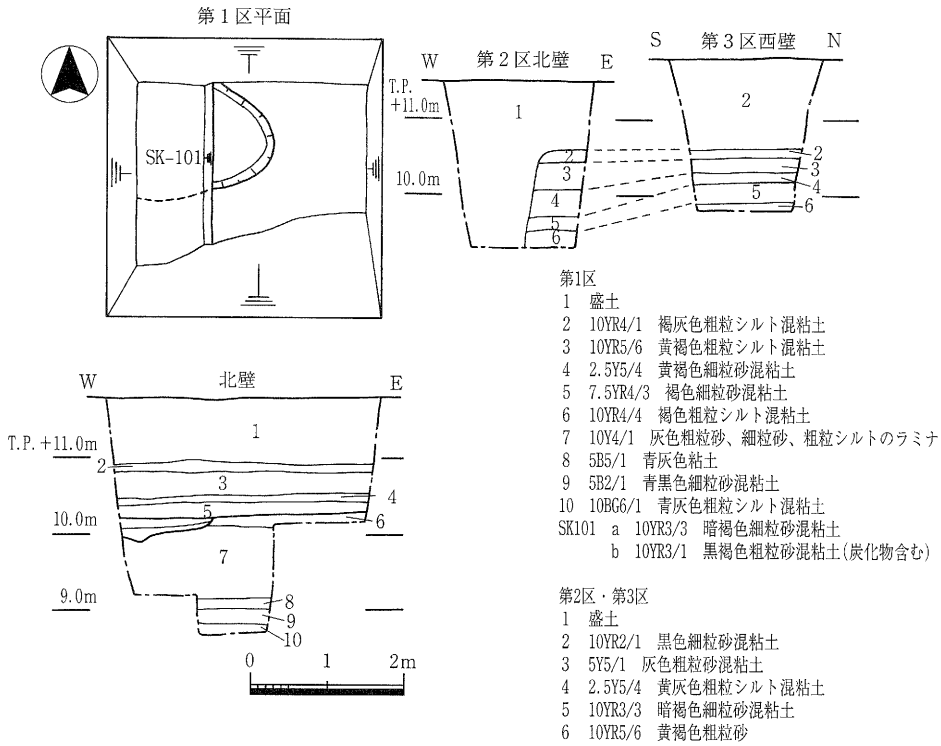
出土遺物

【第１区】５層からは土師器の破片が出土した。土師器の時期は古墳時代後期以後と思われる。

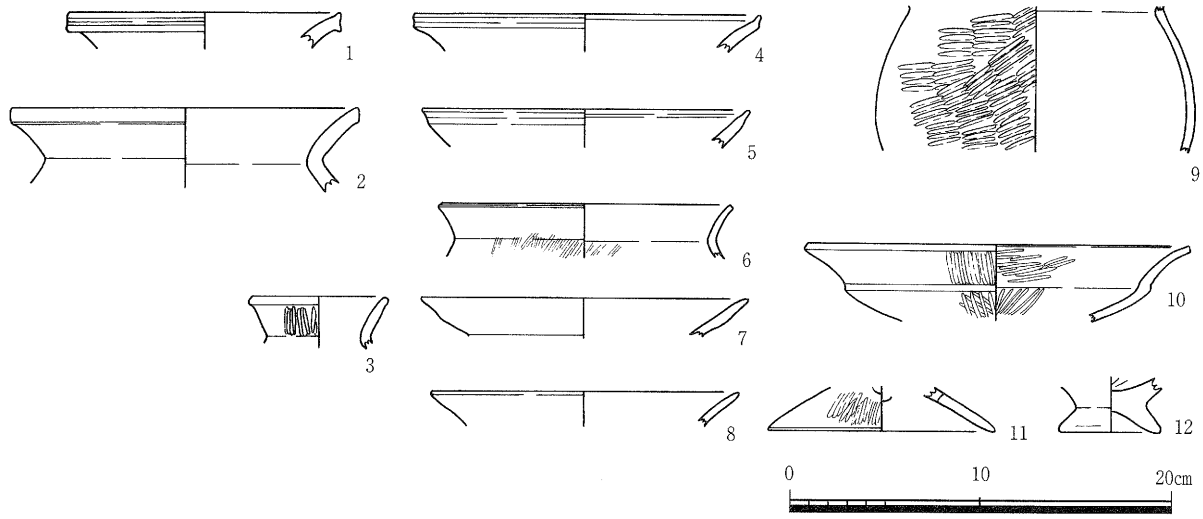
ＳＫ101からは土師器および須恵器の破片が出土した。この遺物は古墳時代中期～後期頃と思われる。９層からは弥生時代後期の土器の破片が出土した。１～３は壺である。１は端面に凹線を施す。３は外面に縦方向のミガキを施す。４～９は甕である。７の外面には煤が付着している。９は外面に右上がりのタタキを全面に施す。10・11は高杯である。10は屈曲し外反する口縁部。11は裾部に、円形のスカシ孔がある。12は鉢か壺の底部で、ハの字に開く上げ底である。内面にヘラ状工具による痕跡がある。



第15図　調査区設定図（Ｓ＝1/200）



第16図　第１区～第３区　平断面図（Ｓ＝1/100）



第17図　第１区９層　出土遺物実測図（Ｓ＝1/4）

【第２区】【第３区】５層からは土師器の破片が出土した。土師器の時期は古墳時代後期以後と思われる。

７．まとめ：第１区で検出した古墳時代中期～後期頃の遺構や第２区、第３区で確認した遺物を含む層は、八尾市教委調査(93－81)および同市教委調査(96－266)で確認していることから、同時代の集落が本調査地周辺に存在している可能性が高いと思われる。

また、第１区の９層内から出土した遺物は、同市教委調査(96－266)で検出した遺構内出土の遺物と同時期と思われ、今回の調査地にも同時期の集落が存在していた可能性が高いと思われる。　（西村）

参考文献

・吉田野乃　1994「４．太田遺跡(93－081)の調査」『八尾市内遺跡平成５年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告29　平成５年度国庫補助事業　八尾市教育委員会

・滝　斎　1997「３．太田遺跡(96－266)の調査」『八尾市内遺跡平成８年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告36　平成８年度国庫補助事業　八尾市教育委員会

5　太田川遺跡(2001－451)の調査

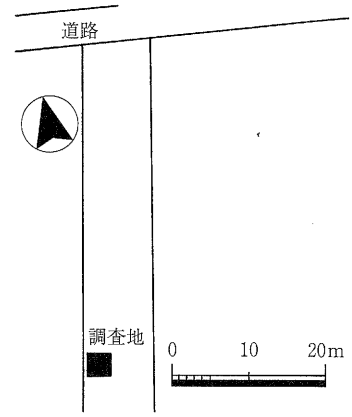
1．**調査名**：共同住宅建設に伴う遺構確認調査

2．**調査地**：八尾市水越１丁目76－２,76－３

3．**調査期間**：平成14年８月22日

4．**調査面積**：９㎡

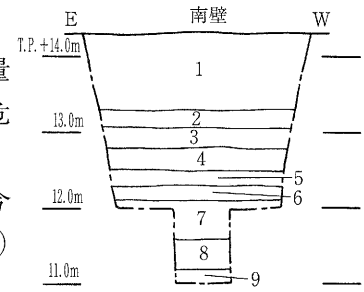
5．**調査方法**：浄化槽部分に３×３ｍの調査区を設定し、現地表下約3.0ｍまで機械と人力で掘削し、調査を行った。今回の調査では、八尾市作成1/2500の地図に記載している値(調査地の北側道路上T.P.＋14.2m)を使用した。



第18図　調査区設定図(Ｓ＝1/1000)

6．**調査概要**：現地表面はT.P.＋14.3m前後で、以下９層の地層の堆積を確認した。１層は盛土で、厚み約1.0ｍを測る。５～７層は砂層の流水堆積である。８層は植物遺体を含む地層で、遺物の破片が極少量出土した。なお５～７層内から湧水が多くあり、壁面崩壊が相次ぎ、危険と判断したため、平面的な調査は行えなかった。

7．**まとめ**：８層には弥生土器と思われる破片が出土したことから、今回の調査地周辺に集落が存在している可能性があると考える。　(西村)



1　盛土
2　10YR2/1　黒色粗粒砂混粘土
3　5B6/1　青灰色粗粒砂混粘土
4　10YR4/6　褐色細粒砂混粘土
5　10YR3/3　暗褐色粘土質シルト
6　10YR5/6　黄褐色細粒砂
7　5B6/1　青灰色粗粒シルト
8　N2/0　黒色細粒砂混粘土(植物遺体含む)
9　5BG5/1　青灰色粗粒砂混粘土

第19図　断面図(Ｓ＝1/100)

参考文献

・原田昌則　1983「第３章太田川遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要昭和56・57年度』(財)八尾市文化財調査研究会報告３　財団法人八尾市文化財調査研究会

・坪田真一　1994「Ⅲ　太田川遺跡(第１次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会42』　財団法人八尾市文化財調査研究会

6　太田川遺跡(2002－281)の調査

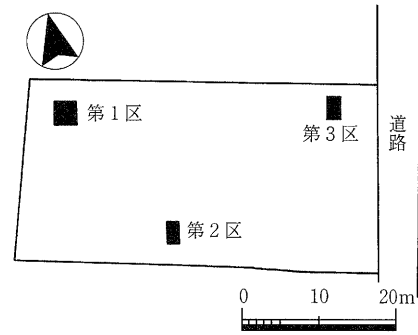
1．**調査名**：倉庫(産業廃棄物積替え作業場)建設に伴う遺構確認調査

2．**調査地**：八尾市水越１丁目89,90

3．**調査期間**：平成14年12月17日

4．**調査面積**：18㎡

5．**調査方法**：倉庫基礎部分に２箇所(西側を１区、東側を２区)と防火水槽部分に１箇所(第３区)の調査区を設定し、現地表下約3.0ｍまで機械と人力で掘削し、調査を行った。今回の調査では、八尾市作成1/2500の地図に記載している値(調査地の北側道路上T.P.＋12.5m)を使用した。

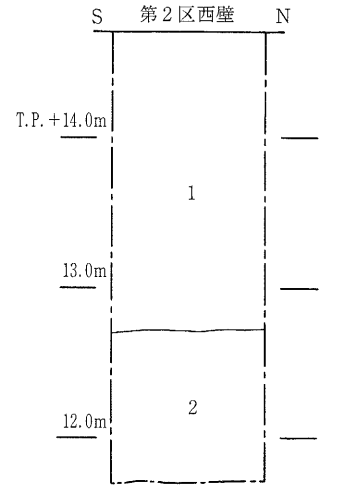


第20図　調査区設定図(Ｓ＝1/1000)

6．**調査概要**：【第１区・第３区】現地表の標高はT.P.＋14.7m前後である。以下３ｍまでは盛土で、本来の地層は確認できなかった。

【第２区】現地表の標高はT.P.＋14.7m前後である。以下２ｍまでは盛土、さらに下１ｍまでは粗粒シルト質粘土を確認したが、遺構の検出および遺物の出土はなかった。

7．**まとめ**：第２区では本来の堆積の粘土層を確認したが、遺構および遺物の出土がなかったため、堆積した時期などは不明である。　(西村)



1　盛土
2　10YR4/1　褐灰色粗粒シルト質粘土

第21図　第２区断面図
(Ｓ＝1/50)

7　恩智遺跡(2001－352)の調査

1．調査名：長屋住宅建設に伴う遺構確認調査

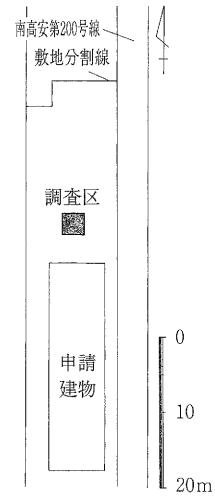
2．調査地：八尾市恩智北町2丁目6－1の一部

3．調査期間：平成14年5月23日

4．調査面積：9㎡

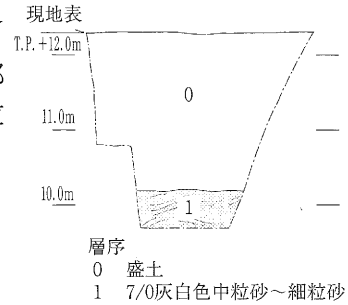
5．調査方法：長屋住宅に伴う浄化槽埋設工事部分にあたる3m四方を対象に調査を行った。なお、掘削深度について当初の予定では、工事が及ぶ現地表(T.P.＋12.3m前後)下約3m迄であったが、約2.6m掘削したところで著しい湧水となり、壁面が崩壊し始めたので、その時点で掘削を中断した。

6．調査概要：【検出遺構】現地表下約2mまでは、近年の開発造成に伴う盛土が堆積し、以下、0.6m以下は河川内埋土と考えられる厚い砂層が堆積する。本層は湧水が著しく、層内には径10～20cm程の粘土がブロック状に混在する。また、遺物では弥生時代中期末頃に比定される土器の破片が少量含まれる。

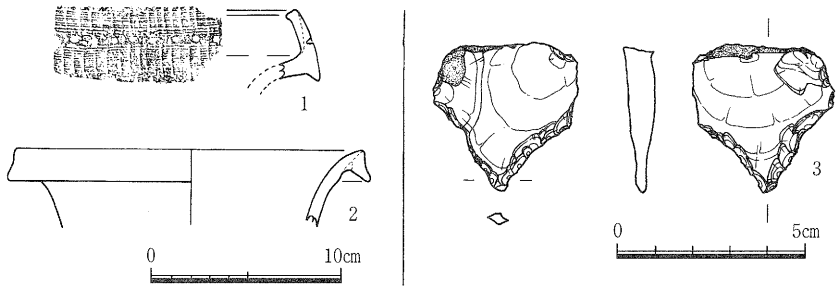


第22図　調査区設定図
(S＝1/1000)

【出土遺物】出土した遺物の中で、図化できたものは広口壺2点(1・2)とサヌカイト製の石錐1点(3)の3点である。1は口縁端部が上下に肥厚し、櫛描き簾状文の上から刺突文が施される。法量については、口縁部の小破片であり明記できない。2は口縁端部が下方に肥厚するもので、2次焼成を受け赤化している。口径は復原値で18.2cmを測る。口縁端部に文様は施されない。いずれも畿内第Ⅳ様式末に比定されるものである。3の石錐は、全体が三角形を呈し、頭部と錐部の境界が鮮明である。法量は、最大長3.9cm、最大幅3.7cm、最大厚0.9cm、重量10.4gを測る。



第23図　北壁面図(S＝1/100)



第24図　出土遺物実測図(土器S＝1/4　石器S＝1/2)

7．まとめ：当地付近では現在のところ、考古学的な調査が行われておらず、実態は不明なところが多い。しかし、当地点から西へ約300mの国道170号線(大阪外環状線)の西側では、当研究会が実施した公共下水道工事に伴う2件の調査において、層厚5m以上を測る弥生時代中期～中世にかけての河川堆積層が確認されており、今回確認した堆積層と有機的関係にあることが想定される。　(岡田清一)

8　恩智遺跡(2002－181)の調査

1．**調査名**：分譲住宅建設に伴う遺構確認調査

2．**調査地**：八尾市恩智北町４丁目631－7

3．**調査期間**：平成14年８月５日

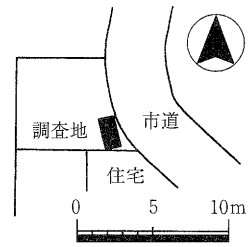
4．**調査面積**：２㎡

5．**調査方法**：浄化槽(規模2.0×1.0m)の調査を行なった。

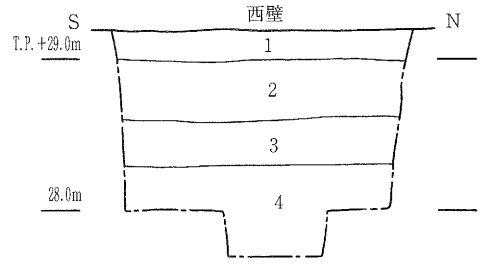
今回の調査では、八尾市作成1/2500の地図に記載している標高(調査地の北東側道路上T.P.＋30.5m)を使用した。

6．**調査概要**：調査地の現地表面の標高はT.P.＋29.2m前後である。以下約1.5mまでの地層について機械と人力を併用しながら掘削し調査を行った。１層は盛土で厚み約0.2mを測る。２層・３層は粘土で、３層の上面はやや黒ずんでいた。４層は細粒砂で、固くしまっていた。

7．**まとめ**：今回の調査地では、遺構の検出はなく、遺物の出土もなかった。しかし、近隣で実施した調査地(吉田野乃1993)では、埴輪片が出土した溝状遺構や、弥生土器片が出土した土坑を確認している。このことから、今回の調査地付近には、同時代の遺構が存在している可能性が高いと思われる。　(西村)



第25図　調査区設定図(Ｓ＝1/500)



1　盛土
2　10BG4/1　暗青灰色粗粒砂混粘土
3　7.5YR4/1　褐灰色粗粒砂混粘土
4　5Y4/1　灰色細礫混細粒砂

第26図　調査区設定図(Ｓ＝1/500)

参考文献

・吉田野乃　1993「４．恩智遺跡(91－540)」『八尾市内遺跡平成４年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市文化財調査報告28　平成４年度公共事業　八尾市教育委員会

9　恩智遺跡(2002－224)の調査

1．**調査名**：個人住宅建設に伴う発掘調査

2．**調査地**：八尾市恩智北町４丁目290番・289番の各一部

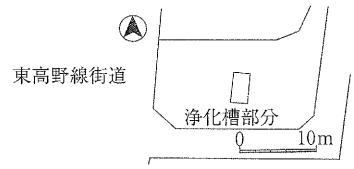
3．**調査期間**：平成14年10月10日

4．**調査面積**：５㎡

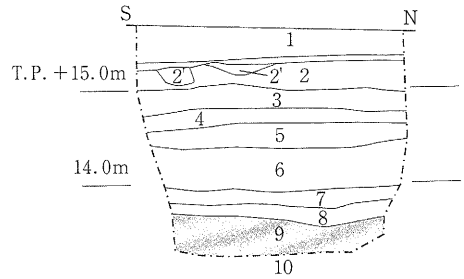
5．**調査方法**：浄化槽部分に規模1.8×2.8mを設定し、深さ約2.5m前後まで掘削した。

6．**調査概要**：調査では、現地表から下2.5m前後までに10層の地層を確認した。これら各地層はほぼ水平に堆積しており、遺物などを含む層は確認できなかった。最深部で確認した厚み約0.5m前後を測る黒灰色粘質シルト層は、近隣で確認されている弥生時代の地層に類似がみられたが、時期を決定付けるものはなく詳細は不明である。

7．**まとめ**：調査地は南東から北西に緩やかな傾斜があり、南東が約40cm前後高い。北西側では約0.8m前後の盛り土がされていた。浄化槽部分の調査は盛り土が0.3～0.5m前後で北東に比べ浅いことから、旧地盤は段差があったようである。　(高萩千秋)



第27図　調査区位置図(Ｓ＝1/1000)



1　客土・盛土
1'　旧表土
2　灰茶色微砂混じりシルト
2'　青灰色微砂混じりシルト(変色)
3　灰茶色微砂混じりシルト(砂礫を少量含む)
4　茶灰色粘土混じりシルト
5　淡褐色微砂
6　乳灰褐色微砂混じりシルト(軟らかい)
7　灰褐色細砂混じりシルト(褐色の斑点)
8　乳灰色微砂混じりシルト(軟らかい)
9　黒灰色粘質シルト(しまる)
10　灰色粘質シルト(しまる)

第28図　浄化槽部分断面図(Ｓ＝1/80)

10　楽音寺遺跡(2002－293)の調査

1．調査名：病院建設に伴う遺構確認調査

2．調査地：八尾市楽音寺三丁目33

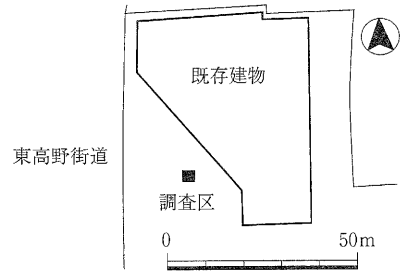
3．調査期間：平成14年10月31日

4．調査面積：９㎡

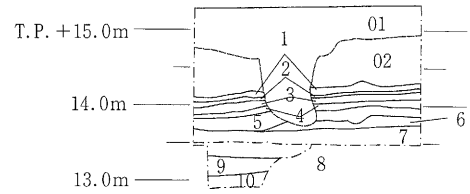
5．調査方法：建設予定地に３ｍ四方の調査区を設定した。現地表から2.4ｍ前後までを機械･人力併用で掘削し、調査を実施した。高さの基準は調査区から北約80ｍ地点の水準点(T.P.＋15.22ｍ)から移動した。

6．調査概要：現地表面の高さはT.P.＋15.3ｍ前後で、１ｍ前後の盛土がある。盛土02は病院開設当時の整地層で、内部に弥生～平安時代の遺物を少量含む。１層旧耕土以下0.2ｍで黒色土器を含む４層に至り､その直下の５層は須恵器を含んでいる。４層上面では、遺構の可能性のある落ち込みを検出したが、遺物は出土していない。７層は有機物を多量に含み、その下の８層は礫層で、遺構面となる可能性があるが、遺構・遺物は無かった。以下の９・10層は無遺物層である。

7．まとめ：これまでの調査結果から、４層は平安時代以降、８層は縄文時代の遺構面の可能性がある。　(成海)



第29図　調査区設定図(Ｓ＝1/2000)



01　近年の盛土
02　近年の整地層
　(弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・瓦等含む)
1　5BG3/1暗青灰色中礫混砂質シルト(旧耕土)
2　5BG7/1明青灰色粘土質シルト混細粒砂
3　5BG5/1青灰色中礫混粘土質シルト
4　10YR6/1褐灰色中礫混粘土質シルト
　(土師器・黒色土器含む)
5　10Y6/1灰色中粒砂(須恵器片含む)
6　10GY5/1緑灰色粘土質シルト混細粒砂
7　7.5Y2/2オリーブ黒中礫混粘土質シルト
8　7.5Y3/2オリーブ黒中～大礫(硬くしまる)
9　2.5Y6/6明褐色中粒砂
10　10YR6/2灰黄褐色極細粒砂混粘土質シルト(粘性強)

第30図　北壁断面図(Ｓ＝1/100)

11　木の本遺跡(2002－364)の調査

1．調査名：遺跡範囲確認(土地区画整理)に伴う遺構確認調査

2．調査地：八尾市木の本２丁目20，43，45

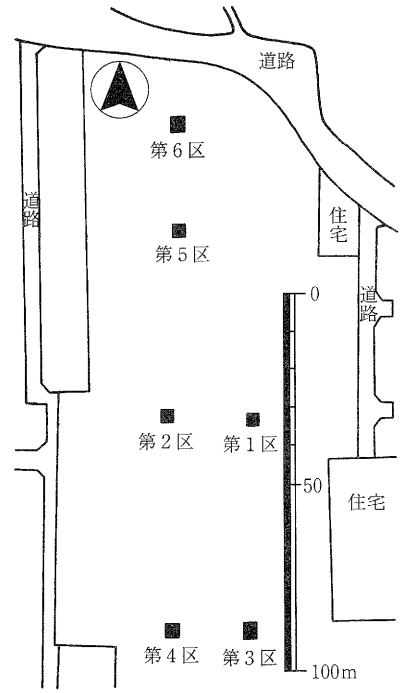
3．調査期間：平成14年12月５日～平成14年12月13日

4．調査面積：54㎡

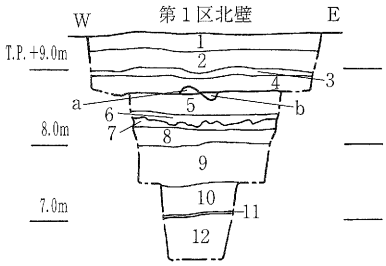
5．調査方法：調査地に３×３ｍの調査区を６箇所設定し、現地表下3.0ｍ前後まで機械と人力で掘削し、調査を行った。今回の調査では、八尾市作成1/2500の地図に記載している標高値(調査地の東側道路上T.P.＋10.0ｍ)を使用した。調査地の現況は水田である。

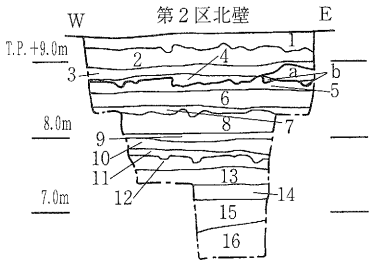
6．調査概要：【第１区】現地表面はT.P.＋9.5ｍ前後で、以下12層の地層を確認した。１層は耕作土。４層は須恵器や土師器の破片が極少量出土している。５層の上面は攪拌を受け、踏み込みを多く検出した。また、畦畔状の高まりを検出していることから、上面には水田が存在していたと思われる。７層の上面では踏み込みを多く検出したが、攪拌を受けた痕跡はなかった。５層上面は水田で、７層上面は踏み込みがあるので水田の可能性が高い。

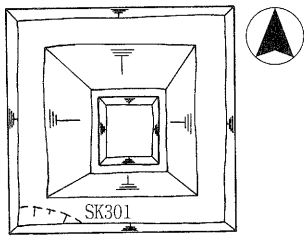
【第２区】現地表面はT.P.＋9.4ｍ前後で、以下16層の地層を確認した。１層は耕作土。５層上面は攪拌を受け、踏み込みを多く検出した。また、畦畔状の高まりを検出した。８層上面では、踏み込みを確認した。10層には炭化物を含んでいた。11層からは遺物が極少量出土した。12層上面では踏み込みを確認した。５層上面は水田、８層上面や12層上面では踏み込みがあるので水田の可能性が高い。また、掘削残土の中からは凹面に布目、凸面に縄目を施す瓦(１)が出土していることから、建物が近隣に存在



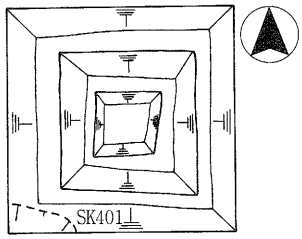
第31図　調査区設定図
(Ｓ＝1/2000)



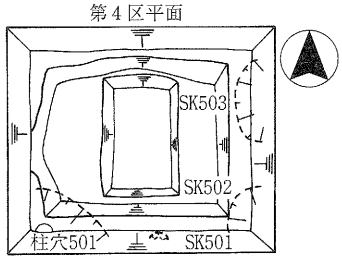




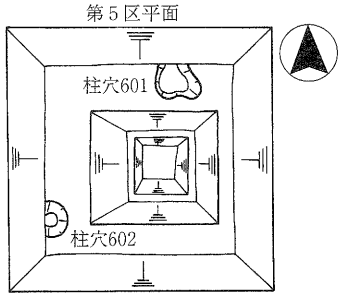
第３区平面



第４区平面



第５区平面

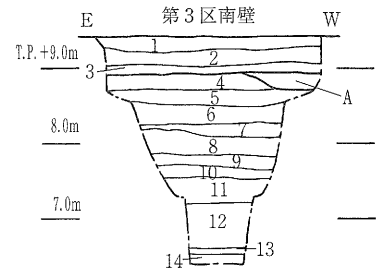


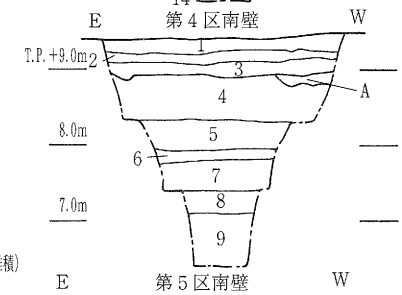
第６区平面

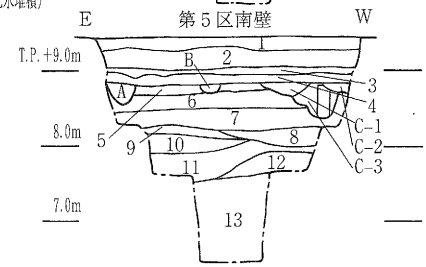
検出遺構の線

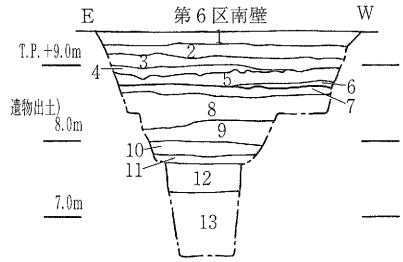
点線＝推定

第1区
1　10YR3/1黒褐色細粒砂混粘土(耕作土)
2　10YR4/6褐色粗粒砂混粘土(鉄分あり)
3　5B5/1青灰色粗粒砂混細粒砂
4　7.5YR5/8明褐色粗粒砂混粘土(遺物出土)
5　N4/0灰色細粒砂混粘土
6　N3/0暗灰色粗粒砂混粘土
7　10GY4/1暗緑灰色粗粒シルト混粘土
8　N4R/0灰色粘土
9　7.5Y4/1灰色細粒砂(粘性強い)
10　5B4/1暗青灰色粘土
11　5PB3/1暗青灰色粘土(植物遺体含む)
12　N3/0暗灰色粘土
a　10YR5/8黄褐色粗粒砂混粘土
b　10YR7/1灰白色細粒砂混粗粒砂
第2区
1　10YR3/1黒褐色細粒砂混粘土(耕作土)
2　10BG5/1青灰色粗粒砂混粘土
3　10Y5/1灰色粗粒砂混粘土
4　7.5Y6/1灰色細粒砂と粗粒砂のラミナ(流水堆積)
5　10YR4/6褐色細粒砂混粘土(マンガン斑あり　上面カクハン　水田耕土)
6　5YR4/1灰色粘土
7　10Y5/1灰色粗粒砂(流水堆積)
8　N4/0灰色粘土
9　10BG4/1暗青灰色粘質シルト
10　7.5Y3/1オリーブ黒色粘土(酸化鉄含む)
11　10Y4/1灰色細粒砂混粗粒砂(流水堆積　遺物出土)
12　5B4/1暗青灰色粘土
13　N3/0暗灰色粘土(植物遺体多く含む)
14　10Y5/1灰色細粒砂混粗粒砂(流水堆積)
15　5B4/1暗青灰色粘土
16　N4/0灰色粘土
a　10YR5/6黄褐色細粒砂混粘土(畦畔盛土)
b　5Y7/1灰白色シルト
第3区
1　5Y2/1黒色細粒砂混粘土(耕作土)
2　10YR5/6黄褐色粗粒砂混粘土(鉄分マンガン含む)
3　5B5/1青灰色粘土(マンガン含む)
4　10YR6/1褐灰色粗粒砂混粘土(上面土壌化　遺構検出)
5　5Y6/1灰色粗粒シルト混粘土
6　N5/0灰色粘土
7　10Y6/1灰色細粒シルトと粗粒シルトのラミナ
8　10YR6/1褐灰色粗粒砂と粗粒シルトのラミナ
9　N4/0灰色粘土
10　5B5/1青灰色粗粒砂
11　5B4/1暗青灰色粘土
12　N4/0灰色粘土
13　5B3/1暗青灰色粘土(植物遺体多く含む)
14　5B2/1青黒色粘土
A　5Y4/1灰色粗粒砂混粘土(西側へ下がる　遺構内埋土)
第4区
1　5Y2/1黒色細粒砂混粘土(耕作土)
2　10Y4/1灰色粗粒砂混粘土(鉄分含む)
3　5B5/1青灰色細粒砂混粘土
4　7.5Y6/1灰色粗粒砂と細粒砂のラミナ(土師器の破片が極少量出土　流水堆積)
5　N4/0灰色粗粒シルト混粘土
6　5PB3/1暗青灰色粘土(植物遺体含む)
7　5PB4/1暗青灰色粘土
8　N5/0灰色細粒砂と粗粒砂のラミナ(流水堆積)
9　N3/0暗灰色粘土(植物遺体含む)
A　N3/0暗灰色粗粒砂混粘土(4層上面検出遺構　遺物なし)
第5区
1　10YR3/1黒褐色細粒砂混粘土(耕作土)
2　2.5y5/4黄褐色粗粒砂混粘土
3　10YR5/2灰黄褐色細粒砂混粘土
4　10YR6/1褐灰色粗粒砂混粘土(鉄分含む　遺物出土)
5　10YR6/6明黄褐色粘質細粒シルト(鉄分含む　上面土壌化　遺構検出)
6　5B7/1明青灰色粘質粗粒シルト
7　5B5/1青灰色粘土
8　10Y4/1灰色粗粒砂混粘土
9　7.5Y5/1灰色粗粒砂混粘土
10　10Y6/1灰色粗粒砂と細粒砂のラミナ(流水堆積)
11　N4/0灰色粗粒砂混粘質粗粒シルト
12　5B5/1青灰色粗粒砂(流水堆積)
13　N3/0暗灰色粘土
A　7.5YR3/4暗褐色粗粒シルト混粘土(10YR6/1褐灰色粘土のブロック混入　遺物出土)
B　10YR4/6褐色細粒砂混粘土(遺物出土)
C−1　10YR6/1褐灰色細粒砂混粘土(遺物出土)
C−2　10YR4/6褐色粗粒砂混粘土(遺物出土)
C−3　N4/0灰色細粒シルト混粘土(遺物出土　柱根検出)
第6区
1　10YR3/1黒褐色細粒砂混粘土(耕作土)
2　2.5Y5/4黄褐色粗粒砂混粘土
3　10YR5/2灰黄褐色細粒砂混粘土
4　7.5YR4/3褐色細粒砂(流水堆積)
5　10YR5/6黄褐色粗粒砂混粘土
6　2.5Y6/1黄灰色細粒砂(流水堆積)
7　10YR5/1褐灰色粘質細粒シルト(上面土壌化　遺構検出)
8　5B6/1青灰色粘質細粒シルト
9　5B5/1青灰色粗粒砂と細粒砂のラミナ(流水堆積)
10　N4/0灰色粘土
A　2.5Y6/2灰黄色細砂混粘土(炭まばらに含む)
柱穴101 a　10YR6/1褐灰色細粒砂混粘土(炭化物含む　遺構検出)
柱穴101 b　10YR4/1灰色シルト混粘土(炭化物含む　シルトはブロック状　遺構検出)
柱穴102ア　10YR6/1褐灰色細粒砂混粘土
柱穴102イ　N7/0灰白色粘質粗粒シルト

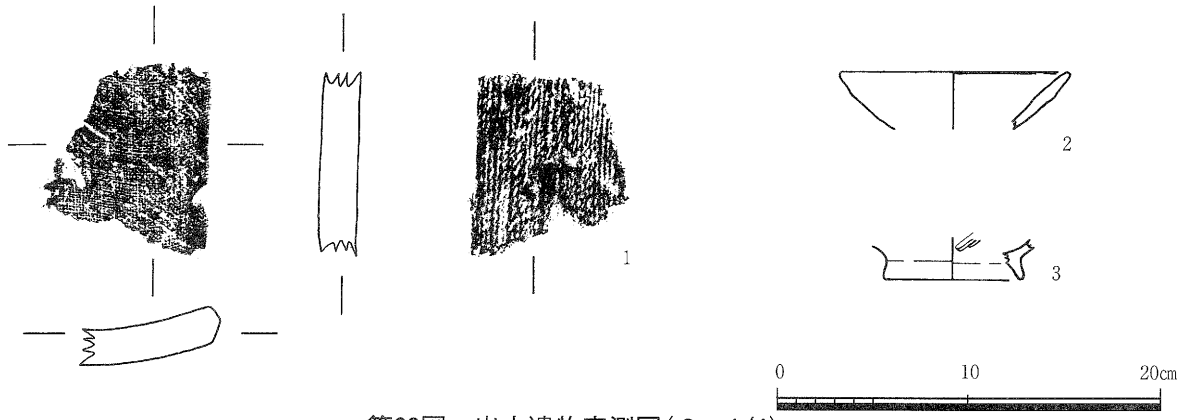








第32図　第１区～第６区平断面図（Ｓ＝1/100）



第33図　出土遺物実測図（S＝1/4）

していた可能性が高いと考えられる。

【第３区】現地表面はT.P.＋9.4m前後で、以下14層の地層を確認した。１層は耕作土。４層上面からは西側へ落ちる遺構（ＳＫ301）を検出した。遺構の南西部は調査区外に至るため規模や形状は不明で、遺構内からの遺物の出土はなかった。

【第４区】現地表面はT.P.＋9.4m前後で、以下９層の地層を確認した。１層は耕作土。４層上面では西側へ落ちる遺構（ＳＫ401）を検出した。遺構の南西部は調査区外に至るため規模および形状は不明で、遺構内からの遺物の出土はなかった。４層内からは土師器の破片が出土した。

【第５区】現地表面はT.P.＋9.4m前後で、以下13層の地層を確認した。１層は耕作土。４層は土師器の破片が出土している。５層上面では遺構を４箇所（柱穴501・ＳＫ501～503）検出した。特に南西壁際で検出した柱穴501には柱根が残存しており、黒色土器の破片が出土したことから、この遺構は平安時代頃と思われる。ＳＫ501～503は調査区外に至るため規模や形状は不明である。

【第６区】現地表面はT.P.＋9.4m前後で、以下13層の地層を確認した。１層は耕作土。５層からは黒色土器の破片が出土した。７層上面では、遺構を２箇所（柱穴601・602）検出した。北東で検出した柱穴601からは土師器の椀（２）や黒色土器の椀（３）が出土し、南西壁際で検出した柱穴602には柱根が残存していた。柱穴601・602の時期は平安時代頃と思われる。

７．まとめ：第３区と第４区では土坑（ＳＫ301・ＳＫ401）を検出した。各土坑は、調査区外にいたる為、規模や形状は不明で、遺物が出土していないため、時期の特定はできなかった。しかし、第１区と第２区の地層との対比から、これらの遺構は平安時代以降と思われる。第５区と第６区では、平安時代頃の柱穴を検出したことからこの地に当時の建物が存在していた可能性が高いと思われる。今回の調査地の北東150m地点での財団法人八尾市文化財調査研究会（以下同研究会と記す）第２次調査では平安時代中期から後期の遺物が出土した遺構を検出しているこのことから、今回の調査地の第５区から北東側には同時代の集落が存在していたと思われる。

また、今回の調査地の東約75m地点での調査（研究会第７次調査）ではT.P.＋7.0～7.2mで古墳時代前期（布留式期）の遺物が出土した地層を確認した。この地層に対応するのは第１区10層、第２区15層、第３区12層、第４区９層、第５区13層、第６区13層と考えられる。しかし、今回の調査地では遺構の検出および遺物の出土はなかった。（西村）

参考文献

・米田敏幸　1983「１木の本遺跡」『昭和57年度における埋蔵文化財発掘調査－その成果と概要－』財団法人八尾市文化財調査研究会

・近江俊秀・岡田清一　1989「１．河内中南部における古代末期から中世の土器の諸問題－木の本遺跡ＳＷ－02出土遺物を中心として－」『八尾市文化財紀要４』八尾市教育委員会文化財室

・岡田清一　1998「Ⅶ　木の本遺跡（第７次調査）」『財団法人　八尾市文化財調査研究会報告60』　財団法人八尾市文化財調査研究会

12　久宝寺遺跡(2002－145)の調査

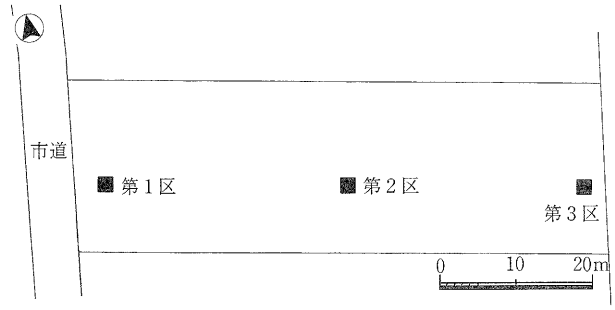
1．調査名：分譲住宅建設に伴う遺構確認調査

2．調査地：八尾市渋川町１丁目53－1、35－2、53－5

3．調査期間：平成14年９月５日

4．調査面積：12㎡

5．調査方法：人坑部分(規模約2.0×2.0m、面積約4.0㎡)３箇所について、工事により破壊される現地表下1.6～1.9m前後までを調査した。なお、調査では西から順に第１～３区と呼称した。レベル高については、八尾市作成1/2500地図に記載されているレベル高値(調査地の北西方向に位置する十字路のセンター：T.P.＋9.0m)を使用した。



第34図　調査区位置図(Ｓ＝1/1000)

6．調査概要：第１区　現地表(T.P.＋9.275m)下1.2m前後までは、客土・盛土(100層)である。以下現地表下1.9mまでの0.7m間で５層(101～105層)もの地層を確認した。101層は黒褐色を呈した細礫混シルト～極細粒砂である。攪拌を受けた地層である。水田耕作土の可能性が考えられる。102層は暗灰黄色の細礫混シルト～極細粒砂。瓦器または瓦質土器と思えわれる細片が極少量混在する。103層は灰オリーブ色シルト～極細粒砂。102・103層ともに攪拌を受けた地層のようである。104層は灰オリーブ色を呈したシルト。若干グライ化が認められる。105層は暗灰黄色の粘土質シルト～シルトで、確認した地層の中でもっとも粘性に富む。雲状の酸化Ｍｎを極めて多く含む点が特徴的な地層である。遺構の検出はなし。

第２区　現地表(T.P.＋9.280m前後)下1.1m前後までは、客土・盛土(200層)である。以下現地表下1.7mまでの0.6m間で５層(201～205層)もの地層を確認した。201層は、暗オリーブ灰色～黒色を呈した土壌化の顕著な細粒砂～粗粒砂である。水田耕作土の可能性が高い。202層・203層は、暗青灰色～青灰色のシルト～細粒砂である。グライ化が著しい。両層ともに攪拌を受けているようだ。204層はオリーブ灰色シルト。205層は、灰オリーブ色を呈した粘土質シルト～シルト。雲状の酸化Ｍｎを極めて多く含む地層である。粘性が富む。遺構の検出はなし。

第３区　現地表(T.P.＋9.280m前後)下1.6m前後までを調査したが、客土・盛土(300)であった。

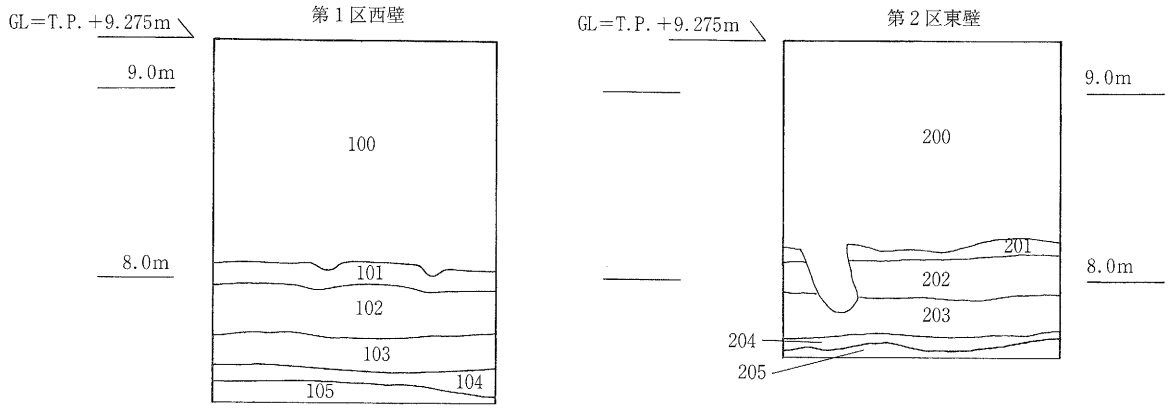
7．まとめ：本調査地の東部に位置する第３区の調査では、客土・盛土が調査深度まで及んでいたため、有効な情報を得ることができなかった。一方、第１区から第２区にかけては、客土・盛土以下現地表下1.9m前後までの地層が、良好に遺存していた。その結果、第１区の101～105層が、第２区の201～205層にそれぞれ対応することが明らかになったほか、各地層が東から西に向かって若干レベル値を下げていることが判明した。

(樋口　薫)

参考文献

・岡田清一　1997「Ⅱ　久宝寺遺跡第17次調査(ＫＨ93－17)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告55』(財)八尾市文化財調査研究会

・藤井淳弘　1998「１．久宝寺遺跡(97－186)の調査－南久宝寺地区埋蔵文化財試掘調査概要報告－」『八尾市内遺跡平成９年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市文化財調査報告39平成９年度公共事業　八尾市教育委員会



100層　客土・盛土
101層　2.5Y3/1黒褐色細礫混シルト～極細粒砂
102層　2.5Y4/2暗灰黄色細礫混シルト～極細粒砂
103層　5Y5/2灰オリーブ色シルト～極細粒砂
104層　5Y5/3灰オリーブ色シルト
105層　2.5Y5/2暗灰黄色粘土質シルト～シルト
（雲状の酸化Ｍｎを極めて多く含む）

200層　客土・盛土
201層　2.5Y3/1暗オリーブ灰色～2.5GY2/1黒色細粒砂
202層　5BG4/1暗青灰色極細粒砂～細粒砂
203層　5BG6/1青灰色シルト～極細粒砂
204層　2.5GY5/1オリーブ灰色シルト
205層　5Y5/2灰オリーブ色粘土質シルト
（雲状の酸化Ｍｎを極めて多く含む）

第35図　第１区・第２区地層断面図（Ｓ＝1/40）

13　久宝寺遺跡（2002－199）の調査

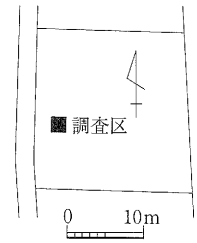
１．**調査名**：分譲住宅建設に伴う遺構確認調査

２．**調査地**：八尾市渋川町１丁目37番の一部、38番の一部

３．**調査期間**：平成14年９月25日

４．**調査面積**：４㎡

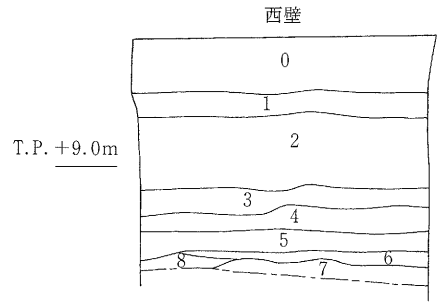
５．**調査方法**：人孔部分に約２×２ｍ（４㎡）の調査区を１箇所設定し、工事掘削深度（約GL－1.6ｍ）までの断面を観察した。



第36図　調査区設定図（Ｓ＝1/1000）

６．**調査概要**：旧耕土（第１層）直下の層厚約0.5ｍを測る第２層は、層相からみて近世段階の洪水砂と考えられる。第３・５層は撹拌された層相で管鉄・斑鉄を多く含み作土の可能性が高い。第５層下面で見られる遺構状の第６層は、第５層での耕作に伴う鋤溝と考えられる。第７層以下は水成層で、河川堆積層である。

７．**まとめ**：調査地は東部を北流する長瀬川の流域にあたり、全体の層相は砂粒が優勢である。断面の観察では生活面を形成するような安定した土層は認められなかった。また遺物の出土は無かった。　（坪田真一）



0　盛土
1　N3/0暗灰色細粒砂～粗粒砂多混シルト　旧耕土
2　10G5/1緑灰色小礫（～２㎝）混シルト～粗粒砂（上方細粒化）一部ラミナ　グライ化
3　2.5Y6/2灰黄色細粒砂～粗粒砂混シルト　撹拌層　管鉄極多
4　2.5Y6/3にぶい黄色細粒砂少混シルト　管鉄　水成層
5　2.5Y5/2暗灰黄色シルト～粗粒砂　撹拌顕著　斑鉄
6　2.5Y5/1黄灰色細粒砂～中粒砂混粘土質シルト　遺構？
7　5Y6/3オリーブ黄色細粒砂～中粒砂　鉄分　水成層
8　5Y5/1灰色シルト　グライ化　水成層

第37図　断面図（Ｓ＝1/50）

14　久宝寺遺跡(2002－285)の調査

1．調査名：分譲住宅建設に伴う遺構確認調査

2．調査地：八尾市久宝寺４丁目111番，112番，113番の各一部

3．調査期間：平成14年11月５日

4．調査面積：24㎡

5．調査方法：人孔部分に３×２ｍの調査区を4箇所(南東側を１区、南西側を２区、北側を３区、北西側を４区とする)設定し、現地表下1.8m前後まで機械と人力で掘削し、調査を行った。今回の調査では、八尾市作成1/2500の地図に記載している標高値(調査地の南東側道路上T.P.＋8.4m)を使用した。

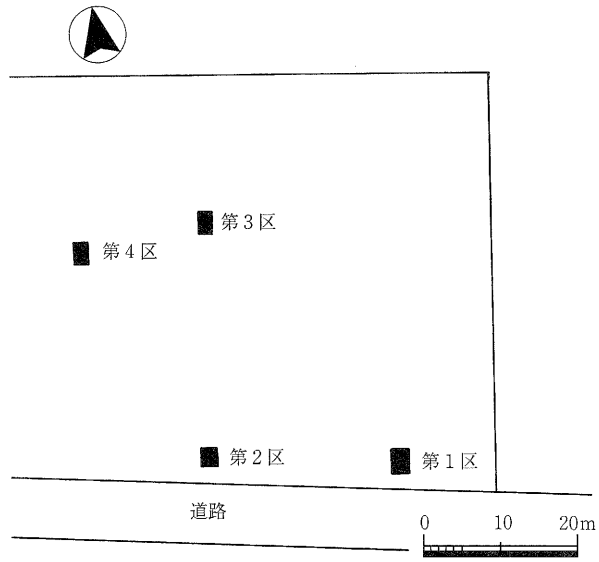
6．調査概要：【第１区】現地表面はT.P.＋8.5m前後で、以下５層の地層の堆積を確認した。１層は盛土、２層は旧耕作土である。４層は細粒砂混粘土で、上面では土坑を１基(ＳＫ101)検出した。ＳＫ101は調査区外にいたるため規模などの詳細は不明である。遺構内からは土師器の破片が極少量出土した。５層は細粒砂混粘土で、土師器の破片が極少量出土した。

【第２区】現地表面はT.P.＋8.4m前後で、以下７層の地層の堆積を確認した。１層は盛土、２層は旧耕作土である。５層は粘土で、上面では土坑を１基(ＳＫ201)検出した。ＳＫ201は調査区外にいたるため規模などの詳細は不明である。遺構内からは須恵器や土師器の破片が極少量出土した。6層は粘土で、７層はシルトである。

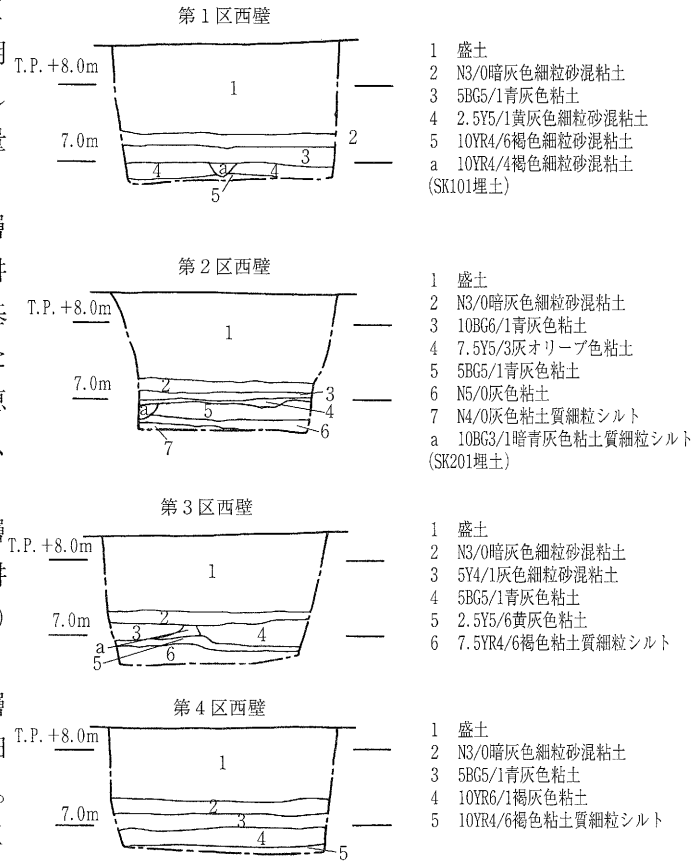
【第３区】現地表面はT.P.＋8.3m前後で、以下６層の地層の堆積を確認した。１層は盛土。２層は旧耕作土である。６層は粘質シルトで、弥生土器(後期)の破片が極少量出土した。

【第４区】現地表面はT.P.＋8.3m前後で、以下５層の地層の堆積を確認した。１層は盛土で、２層は旧耕作土である。5層はシルトで流水堆積と思われる。

7．まとめ：第１区と第２区で検出した土坑(ＳＫ101・ＳＫ201)は、出土した遺物から古墳時代以降のものに比定できる。また、第３区の６層には、弥生時代後期の遺物を含んでいるため同時期の遺構が調査地周辺にある可能性が高いと思われる。(西村)



第38図　調査区設定図(Ｓ＝1/1000)



第39図　第１区～第４区壁面図(Ｓ＝1/100)

参考文献

・西村公助　1989「6　久宝寺遺跡(第３次調査)」『八尾市文化財調査研究会年報　昭和63年度』　財団法人八尾市文化財調査研究会報告25　財団法人八尾市文化財調査研究会

・岡田清一　1997「Ⅱ　久宝寺遺跡(第17次調査)」『久宝寺遺跡』財団法人　八尾市文化財調査研究会報告55　財団法人八尾市文化財調査研究会

15　郡川遺跡(2002―65)の調査

1．調査名：特別養護老人ホーム建設に伴う遺構確認調査

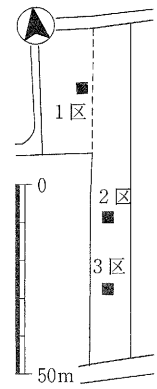
2．調査地：八尾市郡川２丁目33番１

3．調査期間：平成14年11月27日

4．調査面積：27m²

5．調査方法：建築予定地の２ヶ所(北西を１区・南東を２区)、合併処理槽(３区)に３m四方の調査区を設定した。掘削深度は、１区が現地表下1.5m(T.P.＋19.8m)まで、２区が現地表下1.8m(T.P.＋20.0m)まで、３区が現地表下3.0m(T.P.＋17.9m)までである。高さの基準は、調査地の西150m地点の水準(T.P.＋16.871m)から移動した。

6．調査概要：１区　現地表面の高さはT.P.＋21.2～21.3m、調査直前までの耕作土(１～３層)が厚さ0.3～0.5mあり、以下４層・５層は細～中粒砂を主とするもので、撹拌をうけ、マンガンを含んでいる。６層はブロック層である。７～９層は中～粗粒砂を主とし、下層ほど粗い。最下の９層からは湧水があった。

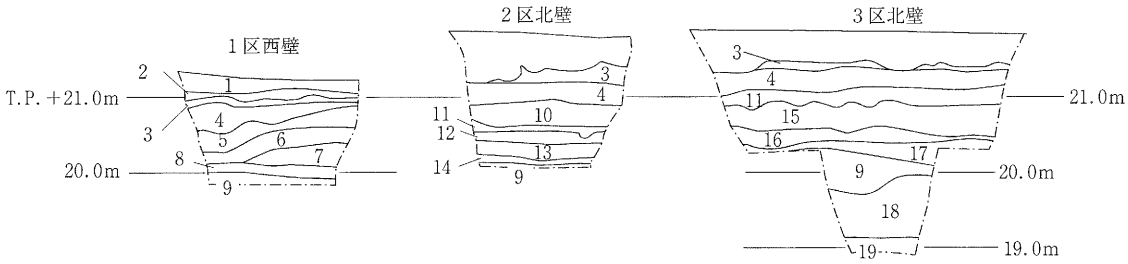


第40図
調査区設定図
(S＝1/2000)

２区　現地表面の高さはT.P.＋21.8m前後、盛土は0.4～0.6mあり、１区－１・２層が含まれている。３・４層は１区と同じである。12・13層からは多量の湧水があった。９層は２～３cmの礫層からなり、１区とは異なり硬く締まっている。

３区　現地表面の高さはT.P.＋21.9m前後、盛土は0.4～0.6mあり、１・２層が含まれている。３・４層は１区・２区に対応する。11～17層は粘土質シルト～粗粒砂からなる互層で、含水量は多大であった。18層は植物遺体等の有機物を含んでいる。19層は硬く締まる礫層で粘土質シルトが若干含まれる。

7．まとめ：調査の結果、各調査区でT.P.＋19～20mで含水量の多い砂層を検出した。堆積状況から、南東－北西方向に伸びる谷状地形にあたるものと推定される。調査地の南西約100mには郡川東塚古墳が尾根上に位置しており、それに対応する谷が調査地付近の微地形であると考えられる。　(成海)



1　10YR3/2黒褐　中粒砂～中礫混粘土質シルト
2　10YR4/4～10YR3/1黒褐　中粒砂混砂質シルトのブロック
3　10YR3/1黒褐　中粒砂～中礫(少)混砂質シルト
4　10YR2/3黒褐　中礫混細～中粒砂(マンガン斑)
5　10YR4/2灰黄褐　大礫(少)混細～中粒砂
6　10YR4/2灰黄褐　細～中粒砂と10YR3/1黒褐　砂質シルトのブロック
7　2.5Y4/3にぶい黄褐細～中粒砂10YR3/1黒褐　砂質シルト少量含む
8　10YR4/1褐灰　小礫混中粒砂
9　2.5Y3/3暗オリーブ褐　中～粗粒砂～中礫
10　10YR4/3にぶい黄褐　粗粒砂～巨礫混砂質シルト
11　10YR4/4褐　粗粒砂
12　10YR4/6褐　粗粒砂
13　10YR3/1黒褐　粘土質シルトと粗粒砂のブロック
14　2.5Y3/3暗オリーブ褐色中～粗粒砂
15　2.5Y5/6黄褐　中粒砂のラミナ
16　2.5Y4/3オリーブ褐～2.5Y5/6黄褐　粗粒砂のラミナ
17　2.5Y4/3オリーブ褐　極細～細粒砂と10YR3/1黒褐　粘土質シルトのラミナ
18　10YR1.7/1黒　粗粒砂混粘土質シルト　有機物含む
19　10YR1.7/1黒　粘土質シルト混中礫

第41図　断面図(S＝1/100)

16　郡川東塚古墳(2002－153)の調査

1．調査名：個人住宅建設に伴う発掘調査

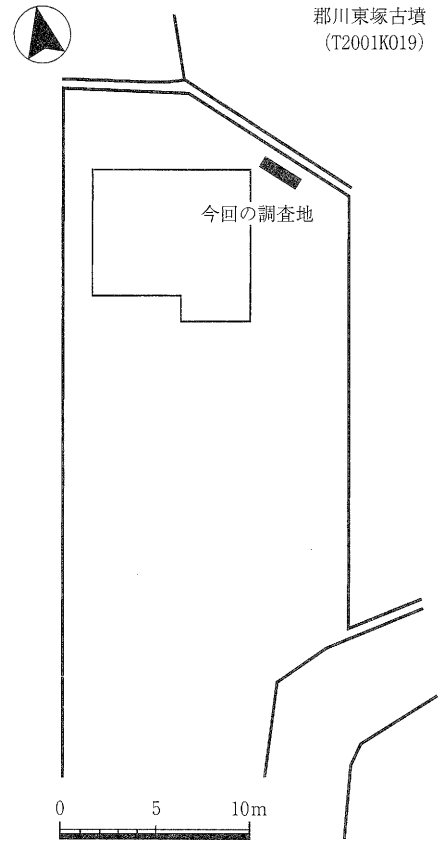
2．調査地：八尾市郡川３丁目56－２

3．調査期間：平成14年８月１日

4．調査面積：1.1m²

5．調査方法：擁壁部分(規模約0.5×2.2m　面積約1.1m²)について、現地表(T.P.＋18.65m前後)下1.0m前後までを人力で掘削し、調査を行った。レベル高については、調査地付近に存在する水準点(Ⅱ2858　平成11年度測定値T.P.＋16.871m)を使用した。

6．調査概要：地層　現地表下0.2m前後までは客土・盛土(０層)である。以下現地表下1.0m前後までの0.8m間で３層(１層～３層)の地層を確認した。１層は限りなく現代に近い土壌化層である。基本的には水田耕作土であるが、水田内の水量を調整するための排水パイプと、それを設置した時に生じた撹乱も認められる。したがって、かなり乱れた層相を呈する。本層はさらに４層に細分が可能であった。２層は、5GY4/1暗オリーブ灰色細礫混シルト～中粒砂。砂質優勢の地層で締まりは悪い。円筒埴輪片や弥生土器片が混在していた。３層は調査区の東部で確認した地層である。10YR3/1黒褐色細粒砂～中粒砂混シルトのブロックで形成された地層である。硬く締まっている。本層上面において、人為的に置いたと思われる人頭大の礫を検出した。

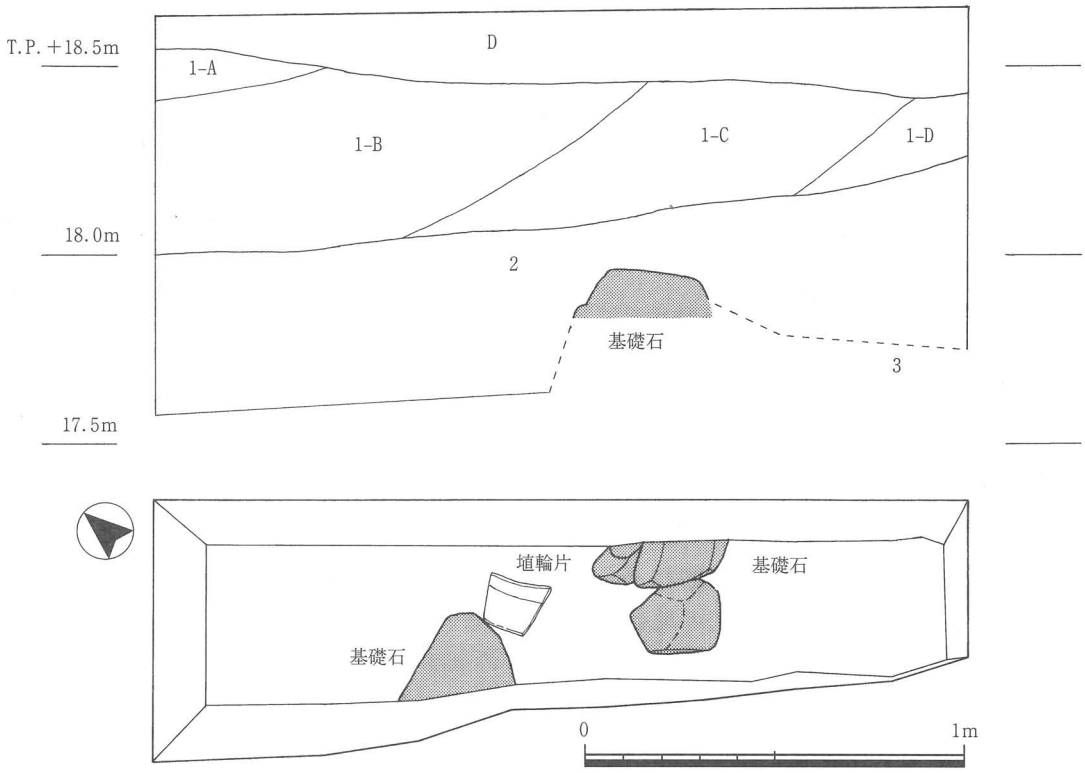


第42図　調査区位置図(Ｓ＝1/400)

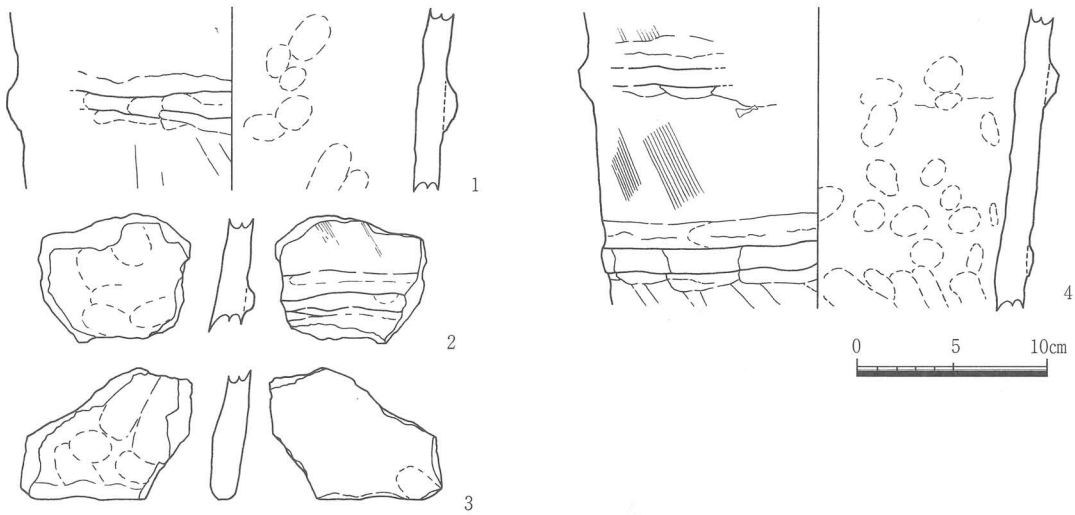
検出遺構　現地表下0.7～0.8mの３層上面において、遺構面を検出した。遺構は、人為的に形成されたブロック土の上面に、人頭大の礫をほぼ南北方向に並べたもので、昨年末に実施された郡川東塚古墳の調査で検出された、後円部横穴式石室の基礎石と同様のものである。

出土遺物　図化できたものは、２層内出土遺物(１～３)、および基礎石面検出時出土遺物(４)である。いずれも円筒埴輪の細片である。１・２は突帯を１条確認することができる。突帯は、突出度が低い。調整を見ると、突帯上辺は比較的ストロークの長い横ナデを施すが、下辺は雑でストロークの短いナデを行う。突帯上面はストロークの短い横ナデを行う。一方円筒部の調整は、外面が左上がりのハケナデを行うのみである。内面には、指ナデおよび指押えが認められる。３は、基底部である。端面は丸く終わる。内面には指ナデが残る。４は２条のタガが確認できる。突帯形状や調整などは、１・２と変わらない。１・２・４に言えることは、突帯の貼り付け方法に特徴があるということである。つまり、粘土紐を円筒部面に貼り付ける際に、上辺は比較的丁寧に行うのに対し、下辺は非常に粗雑であることが言える。いずれの埴輪も、川西編年のⅤ期(６世紀初頭～前半)に属するものと推測される。

7．まとめ：今回の調査地は、昨年末に実施された郡川東塚古墳に南接するところに位置する。昨年の調査では、埴輪列から復元した場合、本古墳がさらに南側に広がることが可能性として指摘したに留まったわけであるが、今回の調査によって、南側への広がりが考古学的に確認できたことは有意義であった。また検出した遺構は、後円部横穴式石室に伴う基礎石の一部と思われるが、この成果は、基礎石の範囲が南側と西側に広がることを示しており、石室の規模を考える上で重要な成果といえる。今回の調査では、古墳構築当時の地表面を確認することができなかったことは残念であったが、２層内において弥生土器が混在していたことを考えると、本古墳が形成される以前に弥生時代の遺構が構築された可能性も充分考えられる。今後の調査では、下層についても注意する必要があるであろう。　(樋口)



第43図　平・断面図（S＝1/20）



第44図　出土遺物実測図（S＝1/4）

17　小阪合遺跡(2002－294)の調査

1．**調査名**：社会福祉施設建設に伴う遺構確認調査

2．**調査地**：八尾市青山町４丁目163，165－２，166

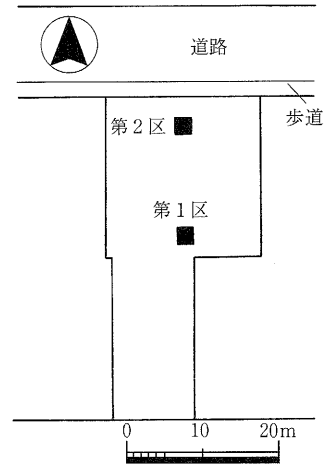
3．**調査期間**：平成14年10月29日

4．**調査面積**：14.09m²

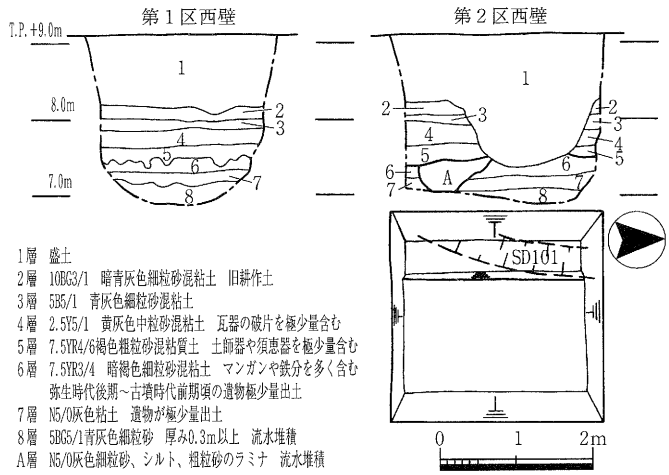
5．**調査方法**：建物基礎部分に２ヶ所の調査区を設定し、現地表下2.2m前後まで機械と人力で掘削し、調査を行った。今回の調査では、八尾市作成1/2500の地図に記載している標高値(調査地の北東側道路上T.P.＋9.0m)を使用した。

6．**調査概要**：【第１区・第２区】現地表面はT.P.＋9.1m前後で、以下８層の堆積を確認した。４層からは瓦器、５層からは土師器や須恵器、６層からは土師器が少量出土した。第１区の６層上面では人または動物が踏み込んだと思われるくぼみを検出した。また第２区では南北方向に伸びる溝(ＳＤ101)を検出した。幅0.4m、深さ0.4mを測り、埋土は細粒砂、シルト、粗粒砂で遺物の出土はなかった。７層からは土師器が少量出土したが、時期は不明である。

7．**まとめ**：第２区では溝を検出したが、遺物の出土がなかった為、時期は不明である。しかし、周辺の調査結果から、おそらく古墳時代前期ころと推定される。　(西村)



第45図　調査区設定図(Ｓ＝1/1000)



第46図　１区・２区平断面図(Ｓ＝1/1000)

18　成法寺遺跡(2002－266)の調査

1．**調査名**：分譲住宅建設に伴う遺構確認調査

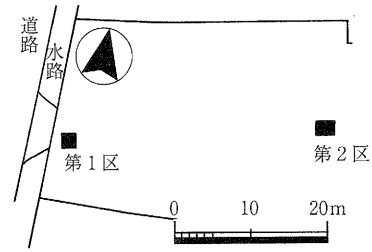
2．**調査地**：八尾市南本町１丁目108番１･108番３・109番・110番・111番・114番・115番

3．**調査期間**：平成14年10月８日

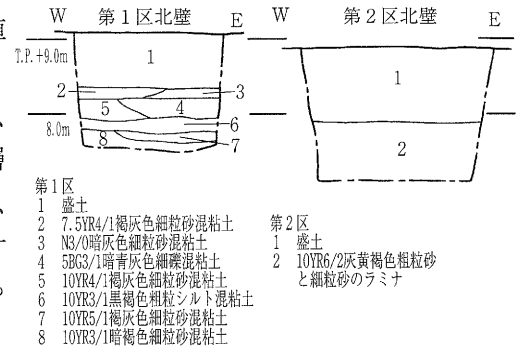
4．**調査面積**：９m²

5．**調査方法**：人孔部分の２箇所(第１区・第２区)を現地表下1.6m前後まで機械と人力で掘削し、調査を行った。今回の調査では、八尾市作成1/2500の地図に記載している値(調査地の南西側道路上T.P.＋9.1m)を使用した。

6．**調査概要**：【第１区】現地表面はT.P.＋9.1m前後で、以下８層の地層を確認した。４層は近世の瓦を含む。５層は中世の瓦器の破片を含む。６層は土師器の羽釜の破片を、７層は黒色土器を、８層は弥生土器(後期)や土師器の破片を多く含む層である。遺物の出土は上記した地層からあったが、遺構の検出はなかった。



第47図　調査区設定図(Ｓ＝1/1000)



第48図　第１区・第２区断面図(Ｓ＝1/100)

【第２区】現地表面はT.P.＋8.9m前後で、以下２層の地層を確認した。２層は粗粒砂と細粒砂のラミナで、厚さ0.7m以上を測る。

7．**まとめ**：第１区の４層・６層・７層・８層からは遺物が出土していることから、近隣に遺構が存在していた可能性が高いと考えられられる。また、第２区の２層は流水堆積であり、今回の調査地の第２区には河川があったと思われる。しかし河川からは遺物の出土がなかった為、時期は不明である。(西村)

19　神宮寺遺跡(2001－64)の調査

1．調査名：共同住宅建設に伴う小規模発掘調査

2．調査地：八尾市神宮寺５丁目171、172

3．調査期間：平成14年10月９日・平成14年11月18日～平成14年11月19日

4．調査面積：46㎡

5．調査方法：調査対象となるのは、浄化槽部分２箇所と防火水槽部分１箇所の３箇所である。調査の便宜上、浄化槽北部を第１区、南部を第3区、そして位置的にその中間にあたる防火水槽部分を第２区と呼称した。規模は第１区―南北２ｍ×東西４ｍの面積８㎡、第２区―南北３ｍ×東西10ｍの30㎡、第３区―南北４ｍ×東西２ｍの８㎡をそれぞれ測る。掘削は各調査区とも現況地盤から0.5～1.0ｍまでの盛土部分を重機で排除した後、以下約0.3ｍの地層を重機と人力を併用して掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

6．調査概要：【第１区】現況地盤はT.P.＋20ｍ前後を測る。0.7ｍ前後を測る第１層盛土を含め９層の地層を確認した。第２・３層は褐色系のシルトで主に調査区西部に見られ、両層内からは近世に比定される陶磁器片や瓦が出土した。調査区東部については盛土以下約0.5ｍを測る第４層暗褐色シルトが堆積し、層内から古墳時代前期(布留式期)に比定される小型丸底壺をはじめとする古式土師器の破片が出土した。本層の西部は第２・３層に削平されるようである。第６層黒褐色シルトからは、弥生時代の壺・甕等の土器片やサヌカイト製石器が出土した。第７層暗灰色粘土質シルトは第６層にぶい黄橙色シルトの上面から切り込まれるもので、炭化物が多量に含まれる。遺構の可能性が高いものと判断されるが、面的に捉えることはできなかった。第８層暗褐色砂礫混じりシルトは堅くよく締まっており、第９層にぶい黄橙色砂質シルトは水成層と見られる。

【第２区】本調査区については、連絡の行き違いからか、既に掘削が終了し工事が進められていた状況で、地層の断面観察しか行なえなかった。現況地盤はT.P.＋19.3～19.7ｍを測る。約0.1ｍ前後を測る盛土を含め10層の地層を確認した。第３～５層は砂混じりの粘土で、第３層内からは古墳時代の古式土師器が出土した。第６層は細砂とシルトで、ラミナが見られ流水堆積を示す層である。第７層は粗砂混じり粘土層で、上面は土壌化しており、東壁において上面から切り込む遺構(土坑？)らしき堆積層を確認したが、全容は不明である。第８層は粗砂や礫が混じる粘質土で、上面は土壌化している。北壁においては本層上面から切り込む砂を確認し、砂の中からは弥生時代前期と思われる土器片が出土した。本砂層はおそらく河川の堆積と思われる。第９層は粘質土、第10層は粘土である。

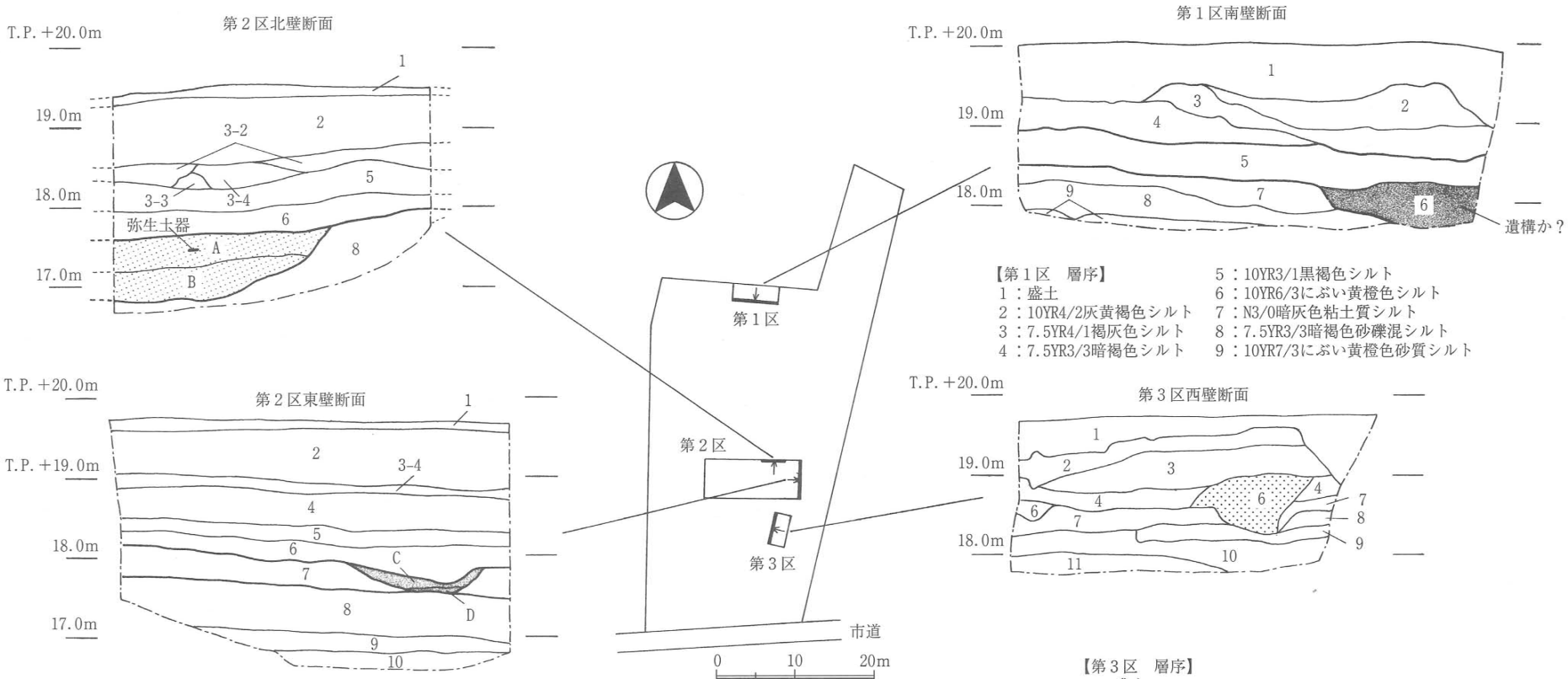
【第３区】現況地盤はT.P.＋19.7ｍ前後を測る。0.2～0.8ｍを測る第１層盛土を含め11層の地層を確認した。第1層灰褐色シルトには近世に比定される陶磁器片や瓦が出土した。第２・３層は酸化鉄分を含む褐色系のシルトで、両層内からは埴輪片のほか、飛鳥～奈良時代に比定される土師器杯、須恵器製の杯・壺、そして瓦が出土した。第４層は中粒砂～粗粒砂が堆積する河川内埋土、第５～７層は各層厚0.2ｍ前後を測るシルト、第８層はシルト～極細粒砂で構成される水成層となる。第９層黒褐色シルトからは、弥生時代の壺底部をはじめサヌカイト剥片が出土した。本層は第１区の第６層に対応するものと思われる。第10層は暗青灰色砂質シルトの水成層で、第１区の第６層に対応するものと思われる。

出土遺物

全体でコンテナ１箱分が出土した。そのうち図化できたものは21点を数える。以下、各調査区毎に記述する。

【第１区】１は第３層から出土した杯部が椀形を呈した高杯である。２・３は第４層から出土したもので、２は甕の底部、３は１と同形態の高杯である。これらの遺物は弥生時代後期末～古墳時代前期(布留式期)に比定される。

【第２区】４・５は北壁Ａ層内で見つかったもので、いずれも弥生時代前期に比定される壺と推定される。４は外面に多条の沈線を有し、５は外面ハケ調整が施される。６は東壁第３－１層から出土した脚台部である。器種は不明であるが、古墳時代初頭(庄内式期)～前期に比定される東海地域からの搬入品



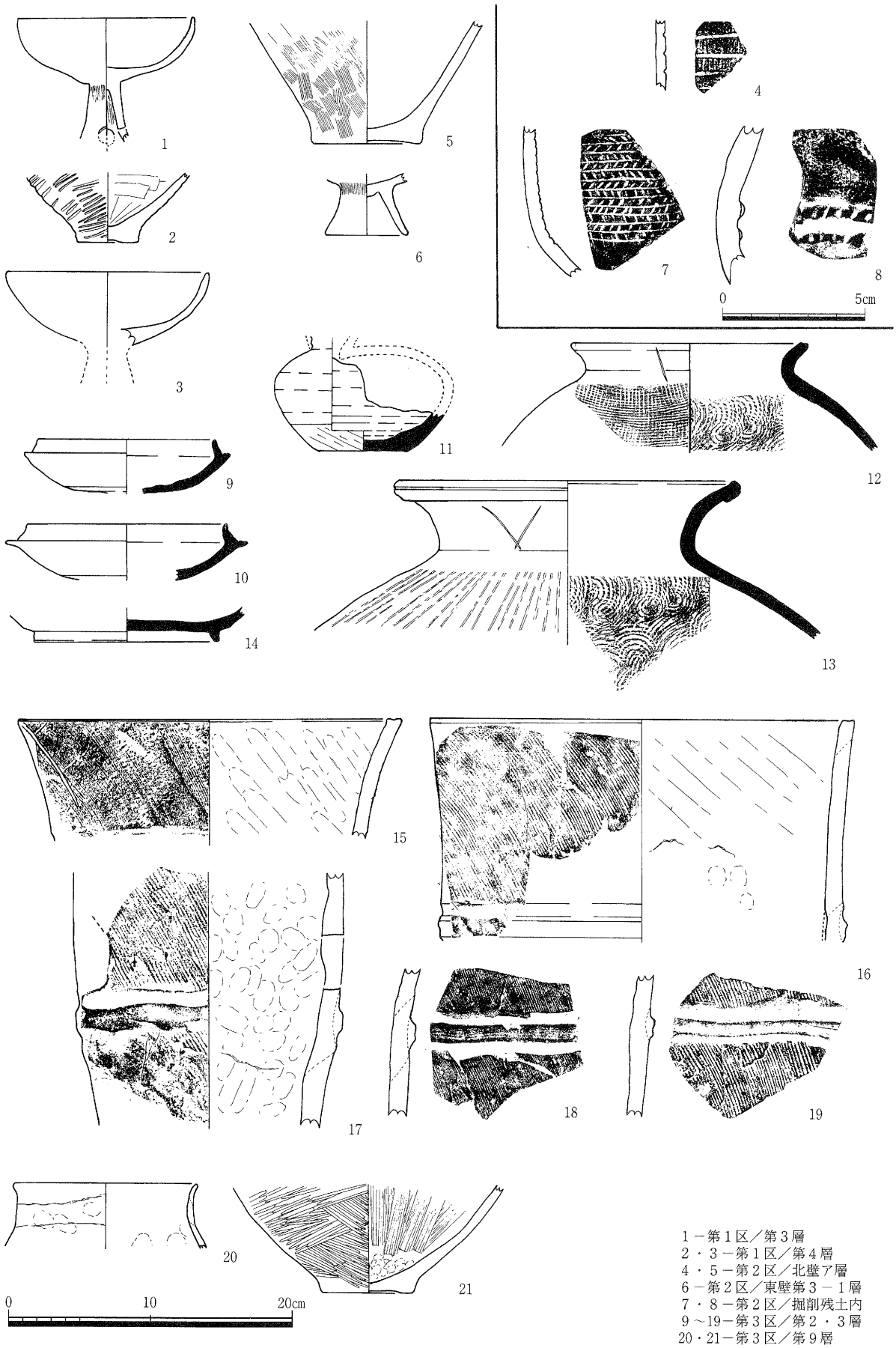
【第１区　層序】
1：盛土
2：10YR4/2灰黄褐色シルト
3：7.5YR4/1褐灰色シルト
4：7.5YR3/3暗褐色シルト
5：10YR3/1黒褐色シルト
6：10YR6/3にぶい黄橙色シルト
7：N3/0暗灰色粘土質シルト
8：7.5YR3/3暗褐色砂礫混シルト
9：10YR7/3にぶい黄橙色砂質シルト

【第２区　層序】
1：盛土
2：7.5YR4/2灰褐色細粒砂混粘土
3－1：2.5Y4/1黄灰色細粒砂混粘土
3－2：2.5Y6/2灰黄色微粒砂とシルトのラミナ
3－3：10BG5/1青灰色微粒砂混粘土
3－4：5B3/1暗灰色微粒砂混粘土
4：10BG4/1暗青灰色細粒砂混粘土
5：10YR4/6褐色細粒砂混粘土
6：5Y5/1灰色細粒砂とシルトのラミナ
7：5B3/1暗青灰色粗粒砂混粘土
8：2.5Y3/2黒褐色粗粒砂～礫混粘質土
9：10YR5/6黄褐色粗粒砂混粘質土
10：5B3/1暗青灰色細粒砂～粗粒砂混粘土

【遺構と推定される埋土】
A：10BG3/1暗青灰色細粒砂と粗粒砂のラミナ
B：5B4/1暗青灰色礫混細粒砂と微粒砂のラミナ
C：5B2/1青黒色粗粒砂混粘土
D：5B6/1青灰色粘土

【第３区　層序】
1：盛土
2：10YR4/2灰黄褐色シルト
3：7.5YR4/1褐灰色シルト
4：10YR6/2灰黄褐色シルト
5：10YR8/3浅黄橙色中粒砂～粗粒砂
6：10YR8/8黄橙色シルト
7：5BG4/1暗青灰色粘土質シルト
8：2.5Y7/3浅黄色砂質シルト
9：5G5/1緑灰色シルト～極細粒砂
10：10YR3/1黒褐色シルト
11：5B3/1暗青灰色砂質シルト

第49図　調査区位置図（S＝1/800）および壁断面図（S＝1/80）



1－第1区／第3層
2・3－第1区／第4層
4・5－第2区／北壁ア層
6－第2区／東壁第3－1層
7・8－第2区／掘削残土内
9～19－第3区／第2・3層
20・21－第3区／第9層

第50図　出土遺物実測図（4・7・8はS＝1/2、他は全てS＝1/4）

と思われる。7・8については掘削残土内から見つかったもので、層位的には不明である。器種はいずれも弥生時代前期に比定される壺で、7は多条の沈線間に列点文、8は刻目付きの貼付突帯文がそれぞれの器面に巡らされる。

【第3区】9～19は第2・3層から出土した。9・10は須恵器蓋杯の杯身で、いずれもＴＫ43型式に属するものである。11は須恵器平瓶で、口縁部および体部1/3は欠損している。外面下半部には「火襷」の痕跡が認められる。12・13は須恵器甕で、いずれも頸部外面には「ヘラ記号」を有する。以上は6世紀後葉に比定されると考えられる。14は須恵器杯で、奈良時代の所産と考えられる。15～19は円筒埴輪で、15・16は口縁部、17～19は体部の破片である。全て土師質の無黒斑で、明るい褐色を呈する。調整は、外面が1次調整のタテハケ、内面はユビナデである。また、15の口縁部外面付近にはヘラ記号を有し、17には透かし孔の痕跡が確認できる。タガの上面の形状について見ると、16・18・19の3点はユビナデを施した「M」字形、17は板状工具を用いたような平坦面を呈する。すべて川西編年Ｖ期に属するものである。

20・21は第9層から出土した弥生時代前期に比定される壺である。20は口縁部の破片で器壁が薄く、外面に接合痕が顕著に見られる。21は底部のみ残存で、外面は密にヘラミガキが施される。

7．まとめ：今回の調査では、狭小な調査区および緒事情の問題から面的に遺構を捉えるまでには至らなかった。しかし、地層の断面観察と遺物の検出から、当地において弥生時代～奈良時代にかけての人の営みが存在したことが検証できた。当地の西側においては、平成5年度に共同住宅建設工事に伴う調査が実施されており、その結果、弥生時代中期の墓域、古墳時代初頭(庄内式期)の河川跡、中世の生産域が確認されている。今回の調査で出土した遺物からもこれらの遺構との有機的な関連が示唆される。また、第3区で見つかった埴輪については、奈良時代の整地あるいは集落形成の際に削平・攪拌された古墳あるいは埴輪窯の存在を示唆する。（岡田）

参考文献

・岡田清一　1997「Ⅲ　神宮寺遺跡第1次調査(ＺＧ93－1)」『財団法人　八尾市文化財調査研究会報告57』財団法人八尾市文化財調査研究会

・寺沢　薫・森井貞雄　1989『弥生土器の様式と編年』木耳社

・川西宏幸　1978『円筒埴輪総論』考古学雑誌

・田辺昭三　1966『陶邑古窯址群Ｉ』平安学園考古学クラブ

20　神宮寺遺跡(2002－280)の調査

1．調査名：個人住宅建設に伴う発掘調査

2．調査地：八尾市神宮寺５丁目130番，131番

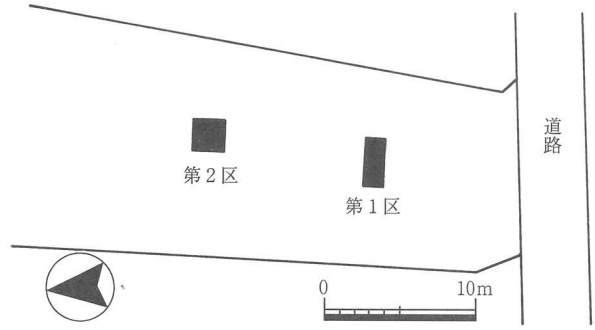
3．調査期間：平成14年11月11日

4．調査面積：7.9㎡

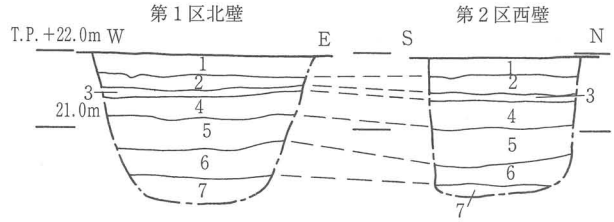
5．調査方法：浄化槽部分と建物基礎部分の調査を行った。浄化槽を第１区(1.3×３ｍ)、基礎部分を第２区(２×２ｍ)とする。今回の調査では、八尾市作成1/2500の地図に記載している標高値(調査地の西側道路上T.P.＋16.2m)を使用した。

6．調査概要：【第１区・第２区】現地表面はT.P.＋22.0m前後で、以下２ｍまでに７層の地層を確認した。１層は盛土。２～４層は粘質土や粘土で、３層には植物遺体を多く含んでいた。５層は粗粒砂混細砂(中礫多く含む)、６層は極粗粒砂(大礫含む)、７層は極粗粒砂(中礫含む)である。

7．まとめ：第１区・第２区では、遺構の検出及び遺物の出土はなかった。５～７層の砂礫は扇状地を形成する堆積と思われる。　(西村)



第51図　調査区設定図(Ｓ＝1/500)



1　2.5Y6/1黄灰色粗粒砂混粘土
2　7.5YR5/8明褐色粗粒砂混粘土
3　7.5YR3/1黒褐色粗粒砂混粘土(植物遺体含む)
4　2.5Y5/2暗灰黄色粗粒砂混粘土
5　2.5Y5/4黄褐色粗粒砂混細粒砂(中礫含む)
6　7.5Y5/1灰色極粗粒砂(大礫含む)
7　5Y5/2灰オリーブ色極粗粒砂(中礫含む)

第52図　１区・２区断面図(Ｓ＝1/100)

21　太子堂遺跡(2002－204)の調査

1．調査名：分譲住宅建設に伴う遺構確認調査

2．調査地：八尾市南太子堂６丁目87－39～44

3．調査期間：平成14年11月27日

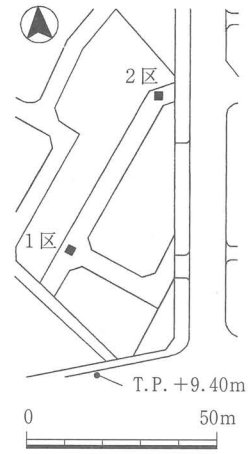
4．調査面積：８㎡

5．調査方法：人孔設置部分の２か所に２ｍ四方の調査区を設定し、現地表下２ｍ前後までの調査を行った。南西の調査区を１区、北東の調査区を２区と呼んだ。高さの基準は、八尾市発行の1/2500の地図に記載の値(調査地南側道路面＝T.P.＋9.4m)を用いた。

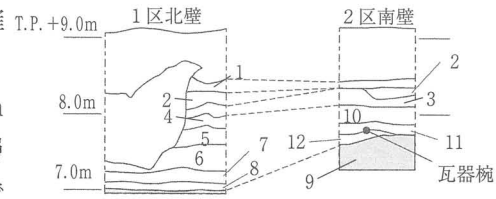
6．調査概要：１区　現地表面の高さはT.P.＋9.1m、盛土は0.5～0.8mあり、１層旧耕土に至る。２・３層はグライ化している。４層にはマンガン斑が見られる。５～８層は非常に粘性が高く、そのうち７層は植物遺体を多量に含んでいる。最下の９層は流水堆積層で、厚さは0.1m程度までしか確認していない。

２区　現地表面の高さはT.P.＋9.2m前後、盛土は0.7mで、１層旧耕土に至る。１～４層は１区に対応する。11層には鉄分の沈着が顕著である。12層上面(T.P.＋8.8m)では12世紀代の瓦器椀片・土師器片が極少量出土した。９層の流水堆積層は１区に対応するが、２区の方が砂粒は粗く、湧水量は多大であった。厚さは約0.5mまでを確認した。

7．まとめ：２か所の調査区で流水堆積層を検出した。北東側の方が砂粒も粗く、流心に近いものと考えられ、12世紀代には埋没したことがわかる。　(成海)



第53図　調査区設定図(Ｓ＝1/2000)



1　2.5GY2/1黒～2.5GY4/1暗緑灰礫混砂質シルトのブロック
2　10GY4/1暗緑灰　礫(多)混砂質シルト
3　10GY4/1暗緑灰　礫(少)混砂質シルト
4　10Y5/2オリーブ灰　粘質シルト(植物遺体含む)
5　N3暗灰　粗粒砂混粘土質シルト
6　N3暗灰　粘土質シルト混粗粒砂
7　N2黒　シルト質粘土(植物遺体多量に含む)
8　N4暗灰　粗粒砂シルト質粘土
9　N7灰白～10YR5/1褐灰　中～粗粒砂(湧水層)
10　10YR5/6黄褐　礫混粘土質シルト(マンガン斑)
11　10YR5/4にぶい黄褐　礫混粘土質シルト(鉄)
12　10YR5/2灰黄褐　シルト質粘土混礫

第54図　壁面図(Ｓ＝1/100)

22　高安古墳群(2001－213)の調査

1．調査名：墓地造成に伴う遺構確認調査

2．調査地：八尾市黒谷５丁目地内

3．調査期間：平成14年１月９日～平成14年２月26日

4．調査面積：約50㎡

5．調査方法：事前の踏査により古墳状隆起の認められた３箇所について、Ａ～Ｃ区の調査区を設定した。調査はすべて人力にて行い、埋め戻しは斜面部分に土嚢を積み上げて現状復帰した。なお、今回の墓地造成予定地には、平成４年度に遺構確認調査を行い、墳丘範囲を確認した妙見寺境内１号墳・同２号墳が存在する。

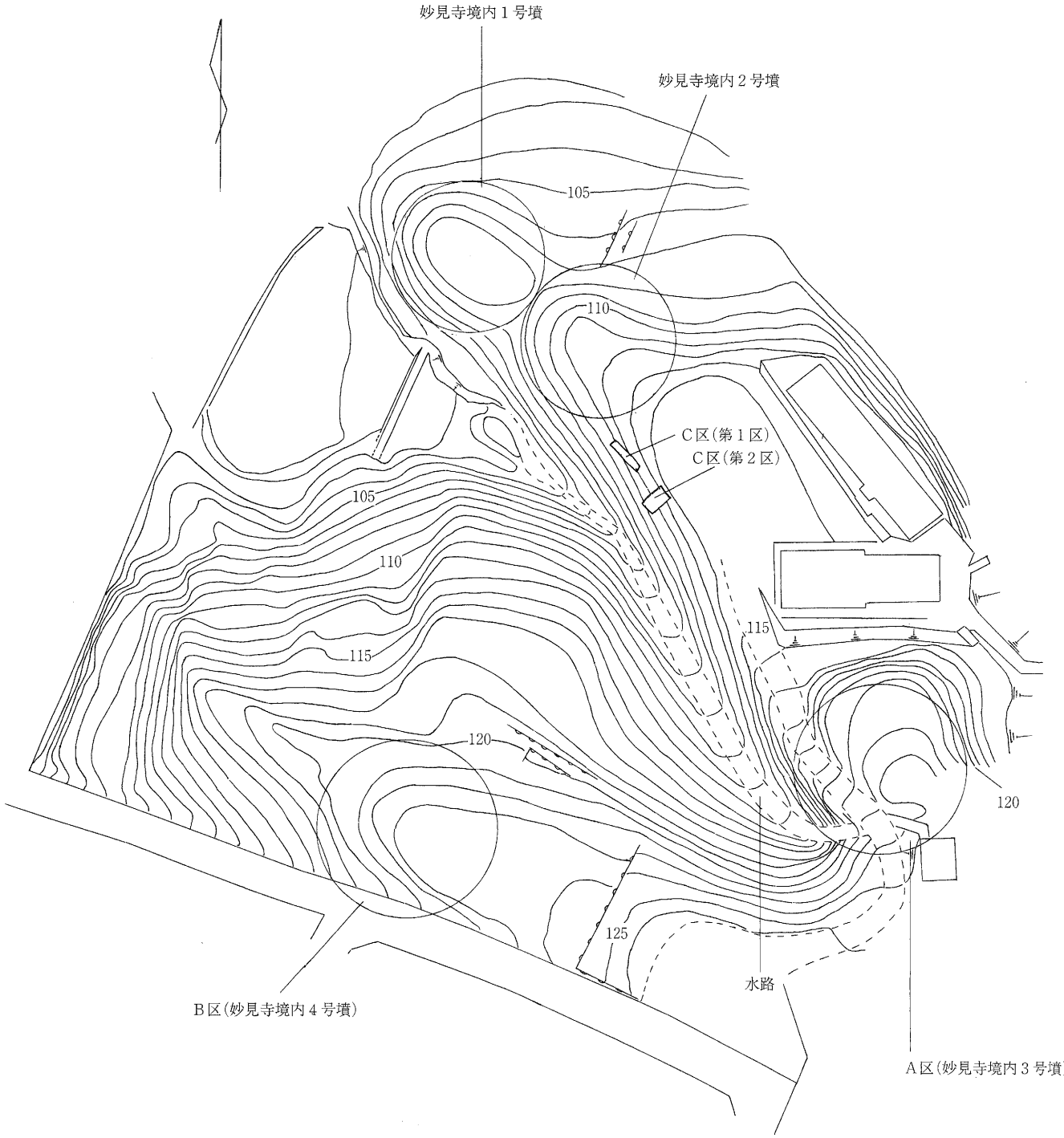
6．調査概要：〔**Ａ区　妙見寺境内３号墳**〕本調査地は北西方向に延びる二つの尾根があり、尾根の間には深い谷が形成されている。北側の尾根には、妙見寺境内１号墳・同２号墳が存在する。両墳から妙見寺本堂を経て南側に古墳状隆起が認められ、Ａ区として２箇所の調査区を設定した。この結果、第１区で石室羨道部分の石を確認した。以下、本墳を妙見寺境内３号墳と呼称する。

１区　本墳は西側を中心に現況道路により削平を受けており、道路に沿って西側に崖面が形成されていた。この崖面を精査したところ、一部で石の露出がみられたため、この部分を中心に幅2.5～３ｍ、長さ５ｍの調査区を設定した(１区)。この結果、横穴式石室の袖部から羨道部にかけての約１ｍ分の石材を確認した。石材は奥壁から見て羨道部右側壁の基底石が２つと第一段目の石材が１つ、袖石とみられる石材が１つ遺存していた。また羨道部左側壁は３つの石材が遺存していた。また石材遺存部及びその北東側には一部、側壁の裏込めかとみられる石が存在していた。また、羨道部床面直上には、長径20㎝までの石が４つ確認できたが、敷石となるかどうかは判然としない。

トレンチ壁面の土層の状況から、石室の形状と大きさは以下のように推定される。まず羨道部右側壁西側の壁面Ⓐ、Ⓑでは、地山である②、④、⑤層とこれより切り込む側壁裏込め土である10層がみられる。このことから石室の袖部の幅はトレンチ内に収まる位置にあったとみられ、幅0.8m前後の幅と推定される。また羨道部左側壁東側の壁面Ⓕでは、地山である①～③層がみられ、羨道部左側壁の北延長部分のすぐ東側で、地山の立ち上がりが平面的にも確認できる。このことから、羨道部左側壁は袖部を持たずに、そのまま玄室部分の左側壁につながっていたものと推定される。このことから、妙見寺３号墳は右片袖式の横穴式石室と考えられる。また玄室部分については、石室破壊時の掘り込みの南西側の立ち上がりが、西側の壁Ⓑと東側の壁Ⓕで確認できた。しかしながら北東側では掘り方の立ち上がりは確認できず、さらに北東側に続くものとみられる。このことから、玄室の長さは４ｍ以上になると推定される。以上から妙見寺３号墳の石室の大きさは羨道部幅0.9m、同遺存長1.1m、推定玄室幅1.8m前後、推定玄室長４ｍとなる。なお、遺存した石材の並びから、石室の開口方向は南西方向(Ｓ－43°－Ｗ)となる。

２区　１区に直交して北西側斜面に幅１ｍ、長さ９ｍのトレンチを設定した。この結果、地表下0.2～0.8mで地山層かとみられる①、②層を確認した。また地山層の上の一部には墳丘盛土層かともみられる３層がみられた。ここでは調査区の北西端付近の標高120m前後で、地山層の傾斜の終わりを確認しており、墳丘裾はこの付近になるとみられる。

墳丘の築成方法　本墳は削平により西側が崖面をなしていたため、この部分を精査することにより墳丘の築成方法をある程度知ることができた。西崖面においても北西側は標高120m前後で地山層④－２層の傾斜の終わりを確認しており、この付近が墳丘裾と考えられる。本墳は北西に延びる尾根の地形を利用して地山を削りだすことにより、墳丘を築成しているものとみられるが、西崖面部分では墳丘裾から2.9mの高さ、標高122.9m付近で地山層を水平にカットしている状況が認められる。地山層の上には、黄灰色礫混粘砂(３層)による盛土がなされている。盛土は厚さ0.7m認められるが、これより上は石室破壊時に削平されたと考えられる。



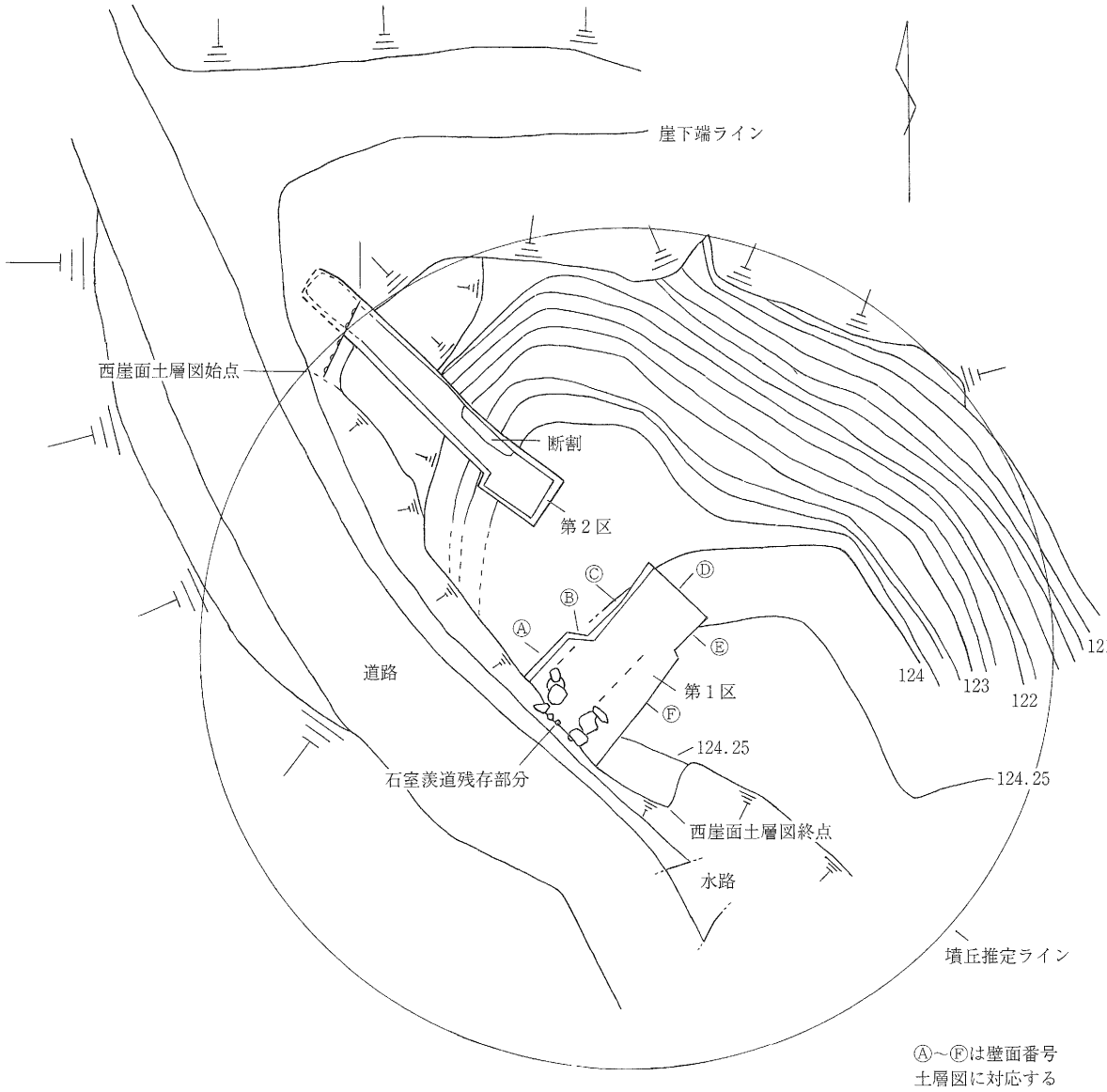
第55図　調査地地形測量図(Ｓ＝1/800)

石室構築のための基礎地業　西側崖面の土層観察により石室構築のための基礎地業のあり方を、推定することができた。以下、西崖面の土層のあり方から推定した基礎地業の工程である。

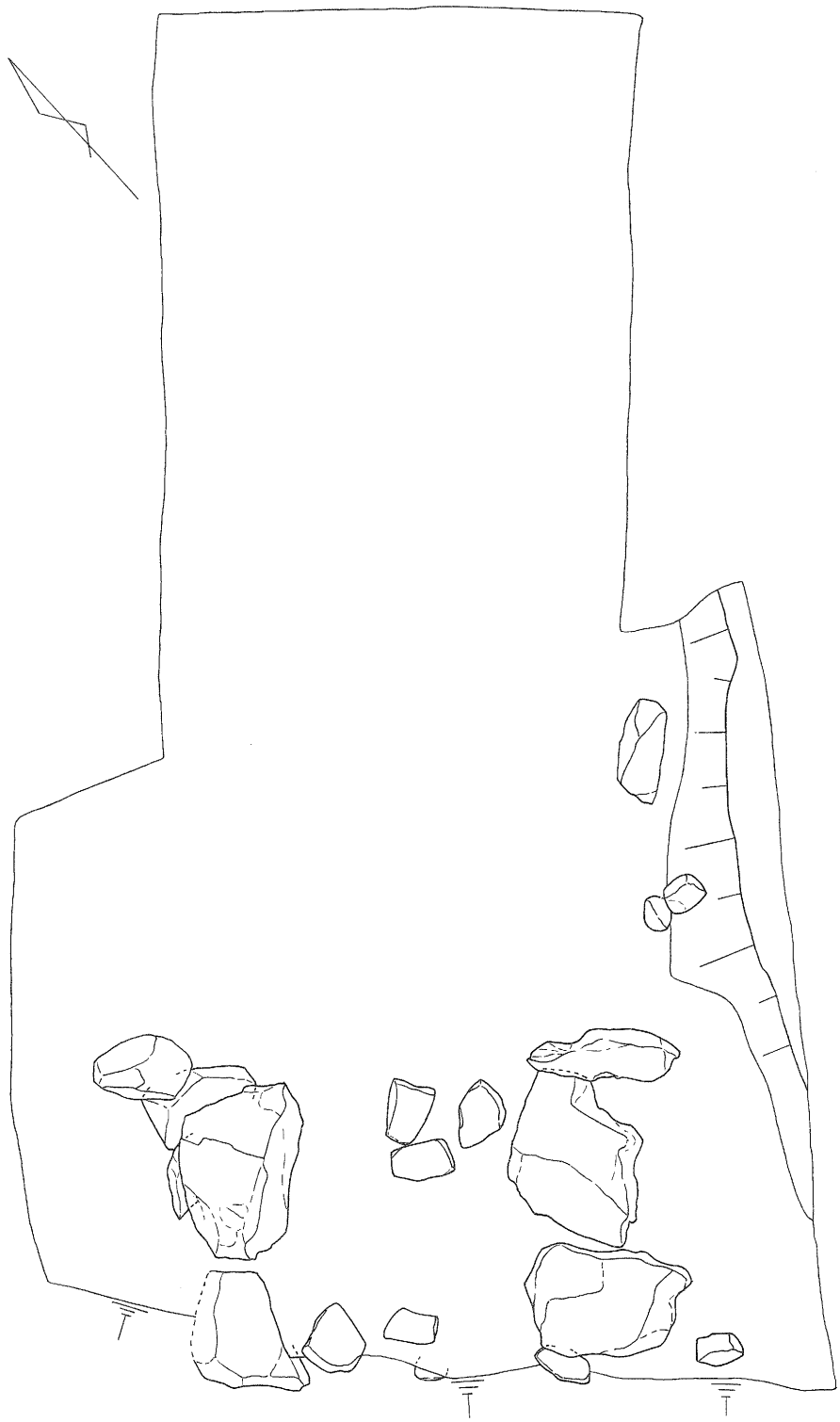
① 基礎地業の掘り方の掘削　地山層の高くなる南東側、石室に向かって右側では、地山層④－１層の上に黄灰色礫混粘質土層(14層)による墳丘盛土がなされる。こののち石室に向かって左側では地山層①層上面から、左側では盛土層14層から、基礎事業のための掘り込みがなされる。掘り方の上面幅は4.8m前後、深さは１m前後である。掘り方内には厚さ0.1～0.3mの粘土層・粘砂層が敷かれる。この敷土の大半は粘土ブロックを含む粘性の高い土である。

② 羨道の基礎石及び側壁を設定。敷土の上に側壁石材を設定するが、敷土は石室に向かって右側の南東側が高い。このため左側には基礎石が置かれているが、右側には径20cmの小石が挟まれているのみで、基礎石がみられない。左側側壁の基礎石及び右側側壁の石材の裏側には、砂質土と粘砂による裏込めがなされる(６・７層)。

③ 床面の形成　左側側壁基礎石と右側壁第一段石との間にはさらに掘り込みが行われ、石室基礎地作業の敷土とは異なる土である黄灰白色礫混粘性砂質土層(４層)が0.3mの厚さで敷かれる。この土層には径20cm前後の礫が含まれていた。



第56図　Ａ区(妙見寺境内３号墳)墳丘測量図(Ｓ＝1/200)



第57図　妙見寺境内３号墳石室平面図（Ｓ＝1/30）

出土遺物　石室破壊時の掘り込み埋土の最下層である５層と廃土から、須恵器の坏蓋の破片(図版９左下写真１．２は５層出土　３は廃土出土)が出土した。また床面構成層である４－２層から須恵器の甕片が出土した。出土した須恵器の坏蓋はＴＫ10型式頃のものとみられる。このことから妙見寺境内３号墳の時期は６世紀中葉前後と推定される。

小結　妙見寺３号墳の墳丘裾は標高120m前後とみられ、推定される玄室の中心付近を墳丘の中心と推定すれば、直径23m前後の円墳になるとみられる。また埋葬主体は右片袖式の横穴式石室であり、築造時期は６世紀中葉前後と考えられる。

〔Ｂ区　妙見寺境内４号墳〕調査地の二つの尾根のうち、南側の尾根の先端付近に古墳状隆起が認められた。このためこの部分をＢ区として、第１区～第３区の調査区を設定して調査を行った。この結果、埋葬主体は明らかにならなかったものの、古墳であることを確認することができた。以下、本墳を妙見寺境内４号墳と呼称する。なお、第１区については間に里道が通るため、里道部を調査範囲から外し、南側を第１区南トレンチ、北側を第１区北トレンチとした。

第１区南トレンチ　南西斜面部分に幅0.5m、長さ３ｍのトレンチを二本設定したが、地表下　0.1m前後で地山層を確認するに留まった。さらに調査区周辺の幅７ｍ前後の範囲の腐食土を除去し、石室の石材の検出に努めたが、地山層を確認するに留まり、石室は確認できなかった。

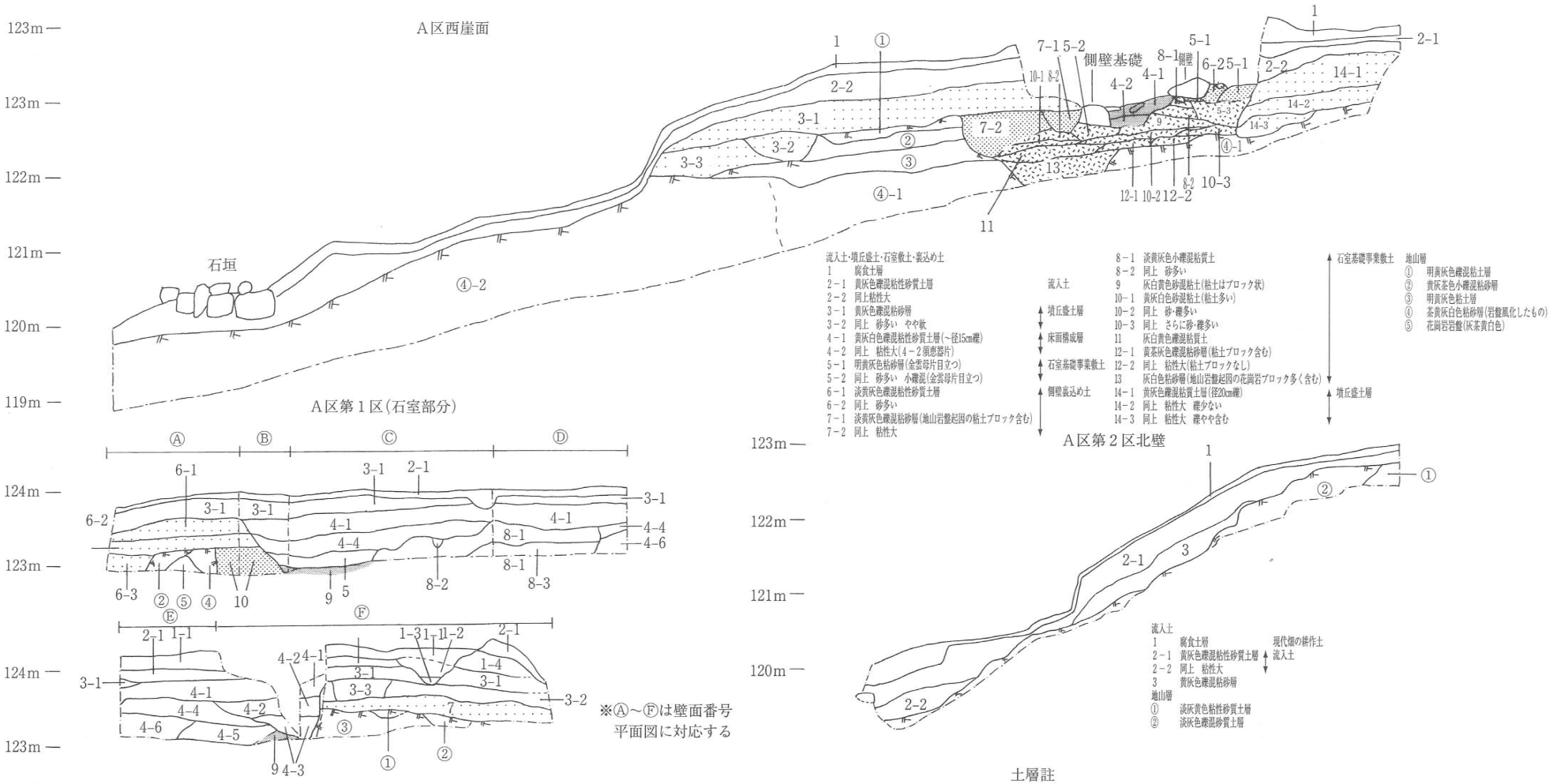
第１区北トレンチ　地表下 0.7～0.8mで地山層かとみられる暗黄灰茶色粘質土層(６層)を確認した。６層の上の流入土層である２～３層には、土師器片、須恵器片が含まれていた。特に２層から出土した土師器甑片(図版９左下写真４)と須恵器甕片(図版９左下写真６)は、古墳時代後期頃の所産とみられ、妙見寺４号墳に伴う遺物とみられる。また６層を切り込む土坑もしくは落ち込み状の遺構の一部を検出した。深さ0.5mを測り、埋土は灰黄茶色小礫粘性砂質土層(５層)である。埋土から土器小片一点とサヌカイト製の石器の剥片が数点(図版９右下写真１．２．４)が出土した。土器小片は生駒西麓産の胎土ではあるが細片であり、石器も剥片のみであり、時期決定は難しい。このことからこの遺構については、弥生時代頃の時期のものかと思われるが、時期の確定にはいまだ資料不足である。

第２区　北東側斜面部分に幅１ｍ、長さ５ｍの調査区を設定した。深さ0.7～1.1mで墳丘構成層とみられる暗黄灰茶色小礫混粘性砂質土層(７層)を確認した。この土層中にはサヌカイトの石器剥片(図版９右下写真３)が含まれており、先に確認した弥生時代頃の時期の包含層等になるとみられる。この土層を削りだして墳丘が築造されているようである。ここでは墳丘構成層である７層を切り込む周濠状の痕跡を確認した。周濠状痕跡の上面幅は2.4m、深さは0.25m以上を測る。埋土は、淡暗黄灰色小礫混砂質土層(６層)であり、遺物は確認できなかった。また流入土層である２－４層から土師器小片が出土している。

第３区　北西側斜面部分に幅１ｍ、長さ５ｍの調査区を設定した。深さ1.0～1.4mで、墳丘構成層とみられる暗黄灰茶色小礫混粘性砂質土層(６層)を確認した。この土層は第２区で確認した墳丘構成層の７層と近似する。ここでは標高119m付近で、墳丘構成層の傾斜が緩やかになる部分を確認した。ここでは周濠状痕跡は確認できなかったが、この付近が墳丘裾になるものとみられる。また流入土である２～５層から須恵器片・土師器片が出土した。この中にはやや時期の下るものもみられるが、墳丘裾直上付近の５－１層から出土した土師器甕片(図版９左下写真５)は、古墳時代後期頃の所産であり、妙見寺４号墳に伴う遺物とみられる。

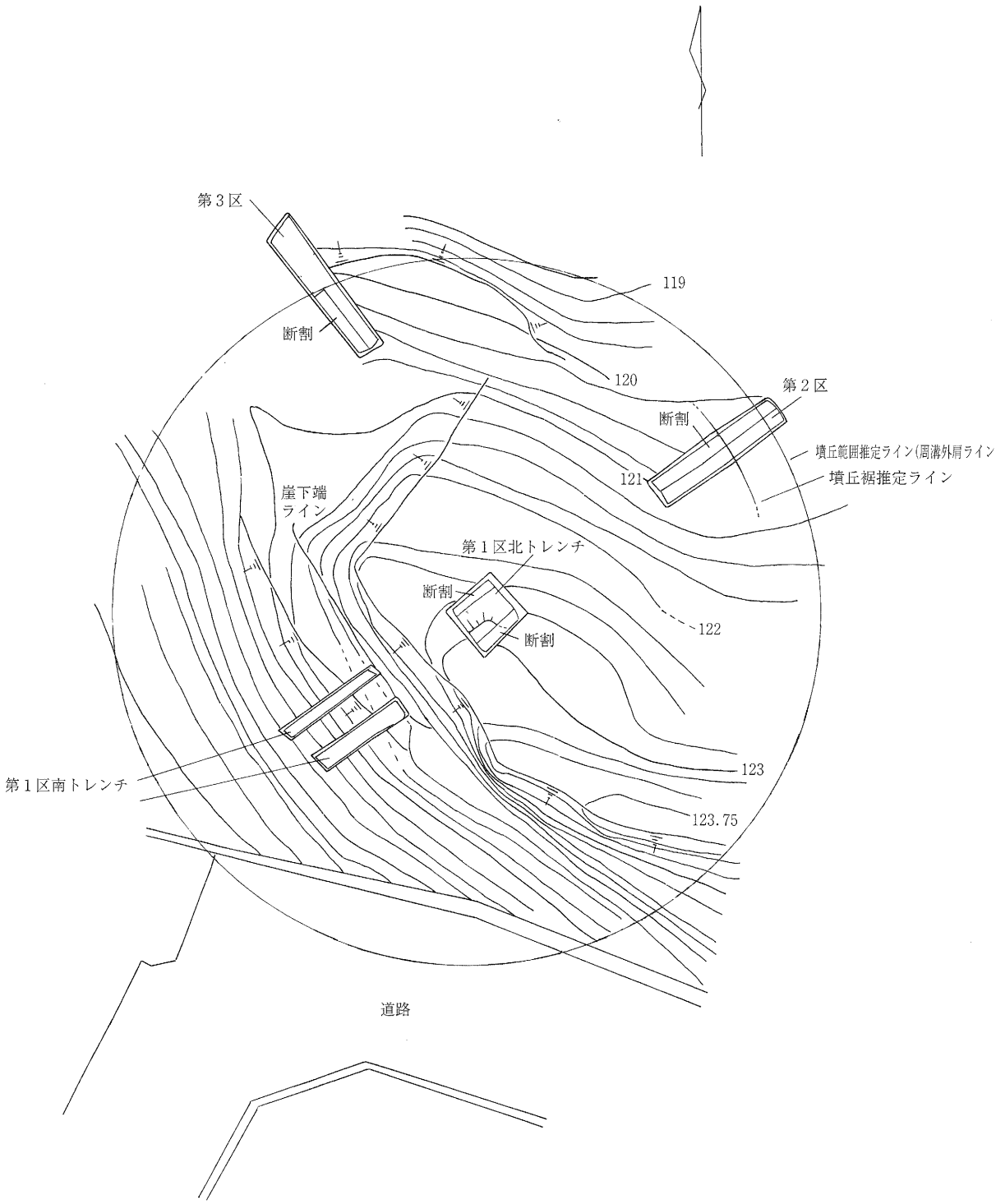
小結　妙見寺境内４号墳は周濠状痕跡と墳丘裾とみられる落ちやさらには全体の地形から、直径23m前後の円墳になるとみられる。埋葬主体については今回の調査では判然としなかった。さらに南よりに横穴式石室が存在するか、木棺直葬などの施設であったのかもしれない。いずれにせよ、出土遺物から５世紀後半から６世紀代にかけての古墳とみられる。

〔Ｃ区〕調査地の北側尾根に位置する妙見寺境内２号墳の南側にみられる古墳状隆起部分である。北西斜面部分に幅１ｍ、長さ５ｍの調査区(第１区)を、南西斜面部分に幅２ｍ、長さ３ｍの調査区(第２区)を設定して調査を行った。が、両調査区とも花崗岩岩盤質の地山を確認するに留まり、古墳の痕跡



流入土・墳丘盛土・石室敷土・裏込め土
1－1 明茶灰色小礫混砂質土層
1－2 同上 粘性大
1－3 同上 さらに粘性大
2 腐食土層
3－1 黄灰色礫混粘性砂質土層
3－2 同上 粘性大
3－3 同上 さらに粘性大
4－1 淡黄灰茶色礫混粘砂層
4－2 同上 粘性大
4－3 同上 さらに粘性大
4－4 同上 石室破壊時の石材片多く含む(土師器片)
4－5 同上 4－3より粘性大
4－6 同上 やや灰色味を帯びる
5 淡灰黄色小礫混粘性砂質土(炭混・須恵器片)
現代畑の耕作土
流入土
石室破壊時掘り込み埋土
6－1 黄灰色礫混粘砂層
6－2 同上 粘性大
6－3 同上 やや灰色味を帯びる
7 黄灰色礫混粘質土層(～径20cm礫)
8－1 淡灰黄色礫混粘質土
8－2 同上 礫多い やや灰色味を帯びる
8－3 同上 粘性大
9 黄灰白色礫混粘性砂質土層
10 灰黄色粘質土層
地山層
① 淡灰黄色礫粘砂層
② 暗黄灰色砂混粘質土層
③ 明灰白黄砂質土層(岩盤風化状)
④ 明黄灰白色砂質土層(岩盤風化したもの)
⑤ 暗黄灰色粘砂層
墳丘盛土層
石室破壊時掘り込み埋土
床面構成層
側壁裏込め土

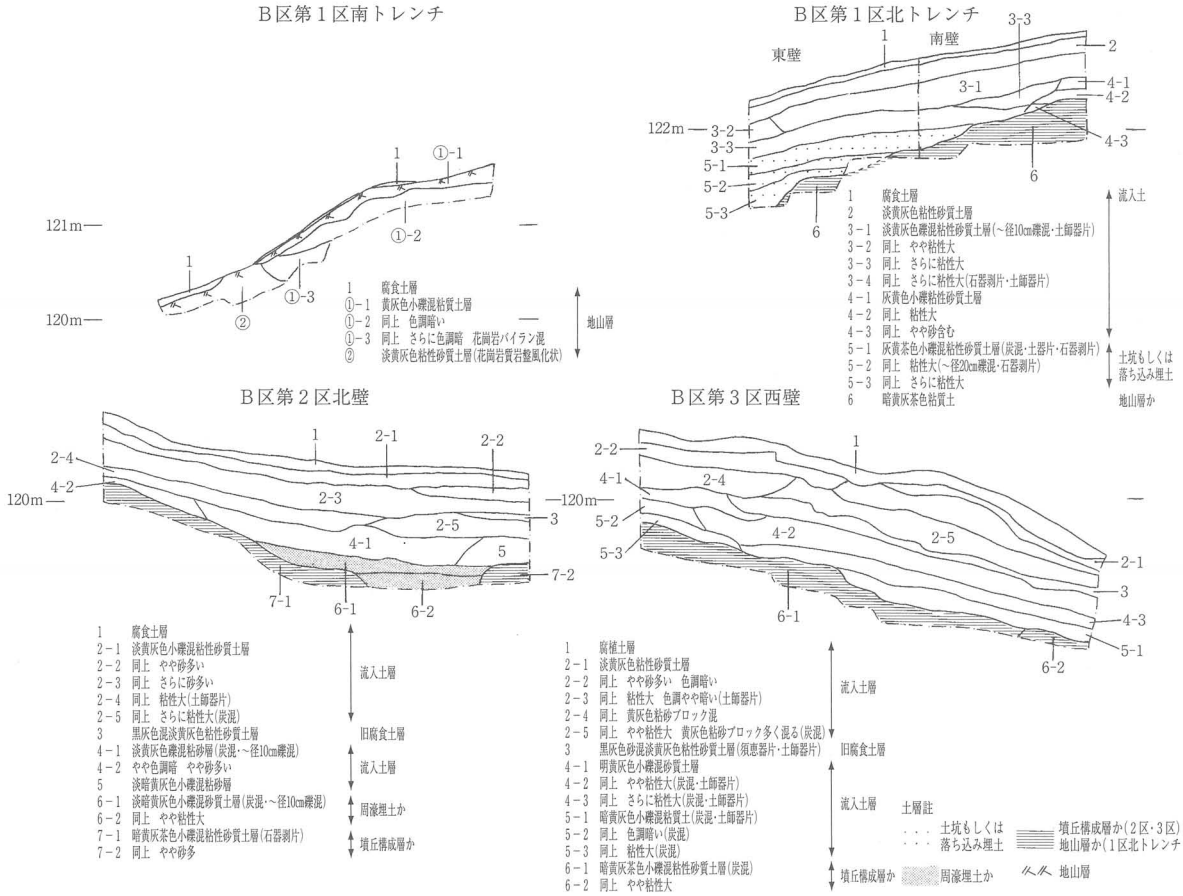
第58図　A区土層断面図(S＝1/80)



第59図　妙見寺境内４号墳墳丘測量図（Ｓ＝1/200）

を確認することはできなかった。

7．まとめ：今回の調査では古墳状隆起のみられた3箇所について、遺構確認調査を行った。この結果、このうちの2箇所について古墳であることを確認し、妙見寺境内3号墳、同4号墳とした。このことから本調査地では、平成4年度の遺構確認調査で確認した妙見寺境内1号墳、同2号墳と合わせて4基の古墳が存在することになる。妙見寺境内1号墳・同2号墳は6世紀後半頃の時期に位置付けられるものであり、本調査地には6世紀代の古墳が尾根上に近接して築造されていることとなる。また周辺にも既知の古墳が確認されており、高安古墳群の支群の一つとして捉えられる。近年、高安古墳群は減少の一途を辿っているが、妙見寺境内1～4号墳は尾根上に連続して造られた支群が比較的良好な状態で遺存している。また、妙見寺境内4号墳の下層で確認した弥生時代頃の時期の遺構も注意される。貴重な遺跡として、保存を前提とした対応が必要である。　（吉田野乃）



第60図　B区土層断面図（S＝1/80）

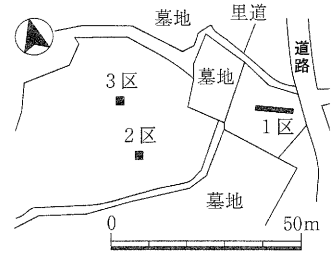
23　高安古墳群(1999―586)の調査

1．調査名：墓地建設に伴う遺構確認調査
2．調査地：八尾市大字垣内400番地他13筆
3．調査期間：平成14年８月26日～８月29日
4．調査面積：18m²
5．調査方法：建物建設予定地に１×10mのトレンチ(１区)を設定し、現地表下１～２mを調査した。墓地造成部分の２か所(南を２区・北を３区)に２m四方のトレンチを設定し、現地表下1.3～1.6mまでを調査した。
6．調査概要：１区　既設道路の西側、東から西に尾根状に伸びる高まり(T.P.＋102.6～105.1m)にあたる。0.3～1.7mまでが現代の盛土であった。

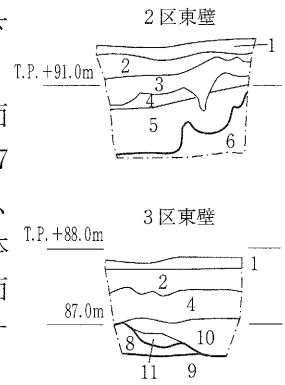
２区　１区から西南西約40m地点、南から北へ下がる緩斜面(T.P.＋91～92m)に位置する。現状は竹やぶで、最終面まで竹・木の根が及んでいる。最下の６層は北西下がりとなっている。

３区　１区から西北西約40m地点の平坦面(T.P.＋89m前後)に位置する。８層上面(T.P.＋87～87.3m)が北東へ落ち込むのを確認しているが、当初ベースと考えた８層もブロック層のため、全体が落ち込み内部の可能性が高い。最下の９層上面(T.P.＋86.6m)は平坦であるが、２区６層に対応するものと考える。

7．まとめ：１区の高まりは、付近の造成時の盛土であった。　(成海)



第61図　調査地設定図
(S＝1/2000)

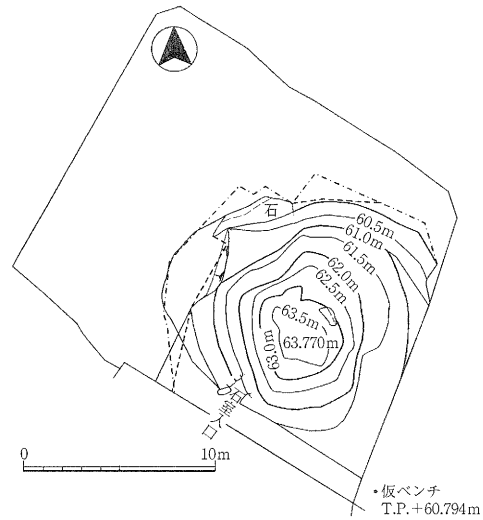


1　10YR4/4褐　砂質シルト(表土)
2　10YR5/6黄褐　中礫混砂質シルト
3　10YR4/6褐～10YR6/2灰黄褐～砂質シルトに10YR6/1褐灰～10YR6/2灰黄褐　粘土質シルトのブロック
4　10YR5/6黄褐色　中礫混砂質シルト
5　10YR5/2灰黄褐粗粒砂に7.5YR5/8橙　砂質シルト～極細粒砂に粘土・粘土質シルト・礫
6　5Y5/1灰　粗粒砂
7　10YR5/6黄褐　極細粒砂～大礫
8　10YR5/6黄褐　極細粒砂に10YR5/1褐灰　粘土質シルトのブロック
9　10YR7/4にぶい黄褐　極細粒砂
10　10YR5/8黄褐　粗粒砂～巨礫
11　10YR5/6黄褐大礫混極細粒砂に10YR4/6褐　粘土質シルトのブロック

第62図　断面図(S＝1/100)

24　高安古墳群(2002―236)の調査

1．調査名：個人住宅建設に伴う発掘調査
2．調査地：八尾市大字大窪1175番１
3．調査期間：平成14年12月19日～12月20日
4．調査面積：21m²
5．調査方法：俊徳丸鏡塚の発掘調査と墳丘保存のための事前測量。
6．調査概要：総池の南西角の道路側壁にあるＫＢＭ５(Ｔ.Ｐ.＋43.747m)より仮レベルを移動する。俊徳丸鏡塚の南東角にＴ.Ｐ.＋60.794mの仮ベンチマークのポイントを置き、俊徳丸鏡塚の墳丘を50cm単位で等高線及び墳丘輪郭の平板測量を行った。
7．まとめ：俊徳丸鏡塚の墳丘は頂上高T.P.＋63.77m、墳丘の南東裾部が60.70m、北西裾部が59.0mを測り、約3.5m前後の高さがあった。　(高萩)



第63図　俊徳丸鏡塚古墳実測図(S＝1/400)

25　東郷遺跡(2002―238)の調査

1．**調査名**：共同住宅建設に伴う遺構確認調査

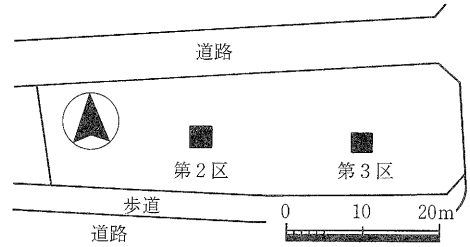
2．**調査地**：八尾市桜ヶ丘1丁目97、98、99、100－1

3．**調査期間**：平成14年9月10日

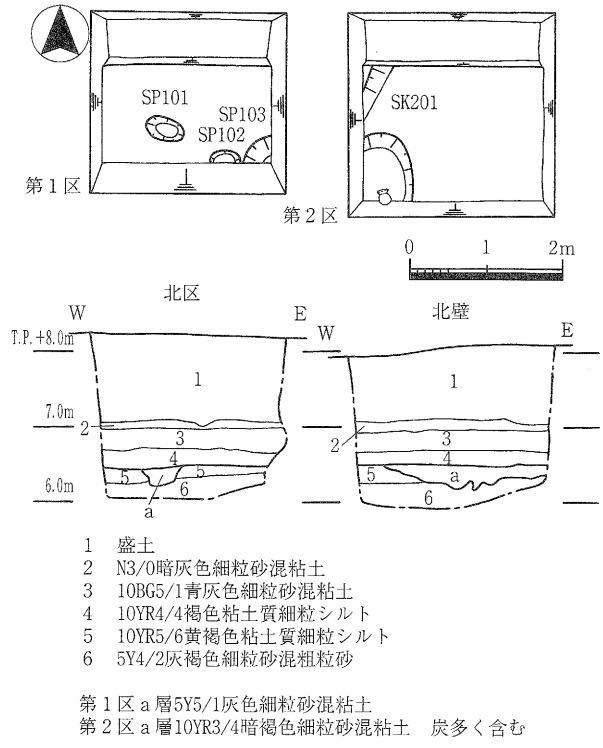
4．**調査面積**：13.53m²

5．**調査方法**：建物基礎部分に2.4×2.6mの調査区(第1区)と2.7×2.7mの調査区(第2区)を設定し、現地表下2.2m前後まで機械と人力で掘削し、調査を行った。今回の調査では、八尾市作成1/2500の地図に記載している値(調査地の北東側道路上T.P.＋7.8m)を使用した。

6．**調査概要**：【第1区】現地表面はT.P.＋8.2m前後で、以下6層の地層を確認した。1層は盛土で、厚み約1.2mを測る。2層は旧耕作土の暗灰色細粒砂混粘土、3層は中世の水田と思われる細粒砂混粘土である。4層は古墳時代前期(布留式期)の遺物が出土する粘土質細粒シルトである。5層の粘土質細粒シルト層上面では遺構を検出した(小穴3個ＳＰ101～ＳＰ103)。6層は細粒砂混粗粒砂で、流水堆積と思われる。



第64図　調査区設定図(Ｓ＝1/1000)



1　盛土
2　N3/0暗灰色細粒砂混粘土
3　10BG5/1青灰色細粒砂混粘土
4　10YR4/4褐色粘土質細粒シルト
5　10YR5/6黄褐色粘土質細粒シルト
6　5Y4/2灰褐色細粒砂混粗粒砂

第1区a層5Y5/1灰色細粒砂混粘土
第2区a層10YR3/4暗褐色細粒砂混粘土　炭多く含む

第65図　第1区・第2区平断面図(Ｓ＝1/100)

ＳＰ101～103

ＳＰ101は調査区のほぼ中央で検出した。平面形状は東西方向に長い楕円形で、長径0.5m、短径0.3mを測る。断面形状はＵ字形で、深さ約0.2mを測る。埋土は単一の灰色細粒砂混粘土である。土師器の破片が少量出土した。

ＳＰ102は遺構の南側が調査区外に至るため平面形状および断面形状は不明である。埋土は単一の灰色細粒砂混粘土である。土師器の破片が少量出土した。

ＳＰ103は遺構の南東側が調査区外に至るため平面形状および断面形状は不明である。埋土は単一の灰色細粒砂混粘土である。土師器の破片が少量出土した。

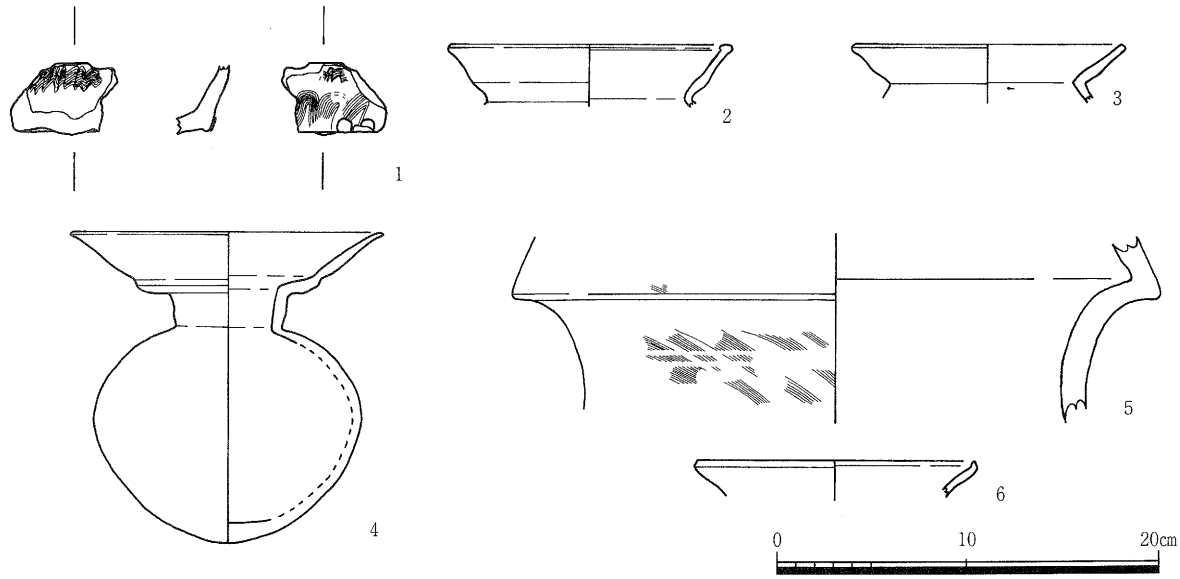
【第2区】現地表面はT.P.＋8.1m前後で、以下6層の地層を確認した。堆積の状況は第1区とほぼ同じであった。5層上面で土坑1基(ＳＫ201)を検出した。

ＳＫ201

ＳＫ201は調査区のほぼ全域で検出した。土坑の肩は西側で検出し、北東－南西方向に伸びていることを確認した。遺構の北、南、東側は調査区外にいたるため、平面形状および断面形状は不明である。検出した東西幅は約2.5m、南北は2.4mで、深さは約0.3mを測る。埋土は暗褐色細粒砂混粘土で炭を多く含み、また粘土のブロックが混じっていた。埋土内からは古墳時代前期の土器の破片が出土した。遺構の床では数箇所のくぼみを確認した。特に南西側で確認したくぼみは炭化物を多く含んでいた。このくぼみの底からは、口縁の一部が欠損した二重口縁壺が、口縁を北西に向け横に倒れた状態で1個出土した。

出土遺物

【第1区】4層からは土師器･須恵器･瓦器の破片がコンテナ箱約1/4箱程度出土し、またＳＰ101～ＳＰ103からは土師器の破片が数点程度出土している。出土した遺物のうち図化し掲載したものは2点である。1・2は4層から出土した。1は二重口縁壺で、ゆるやかに外反した後さらに外側へ外反しひらく口縁部である。内面には波状文を施す。外面には波状文を上下2段に施し、下端の波状文の上に2個1



第66図　出土遺物実測図（S＝1/4）

対？の円形浮文の貼り付けている。内面の波状文の施文は直線的で、鋭く尖って折り返し描いているが、外面は曲線で、ゆるやかに弧を描いて折り返している。2は古墳時代前期（布留式期）の甕の口縁部である。端部は肥厚しやや丸みのある面をもつ。

【第2区】4層からは土師器・須恵器・瓦器の破片が出土し、SK201からは、古墳時代前期の土師器の破片が多く出土した。この内図化し掲載したものは4点である。

3は4層内から出土した古墳時代前期（庄内式期）の甕である。

4～6はSK201から出土した古墳時代前期の土器で、4は二重口縁壺、5は大型の二重口縁壺、6は甕である。4は土器の表面がほとんど磨耗しているため調整は不明瞭である。しかし、口縁部には横方向のミガキが施されていたと思われる。体部の外面にも施している調整はほとんど残っていなかった。しかし、本来はミガキを丁寧に施していたものと思われる。体部内面は、ハケでナデており、体部上位から頸部にかけては指ナデによる指圧痕が残っている。5は大型の二重口縁壺の口縁で、頸部外面には左上がりのハケを施す。6は古墳時代前期（庄内式期）の甕である。外反する口縁部で、端部はつまみ上げ面をもつ。

7．まとめ：今回の調査では、古墳時代前期の遺構を検出した。特に、第2区で検出した土坑内からは完形近くまで復元可能な土器が出土していることから、この時期の集落がこの地にあったことが判明した。また、平安時代から鎌倉時代の遺物も少量ではあるが出土したことから、同時代の遺構がある可能性も考えられる。（西村）

参考文献

・原田昌則　1987「Ⅲ　東郷遺跡（第20次調査）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要　昭和61年度』財団法人八尾市文化財調査研究会報告13　財団法人八尾市文化財調査研究会

・高萩千秋　1991『東郷遺跡―第23次・第24次発掘調査報告―』財団法人八尾市文化財調査研究会報告29　財団法人八尾市文化財調査研究会

・高萩千秋　1998「XⅣ　東郷遺跡（第52次調査）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告60』財団法人八尾市文化財調査研究会

26　東郷遺跡(2002－176)の調査

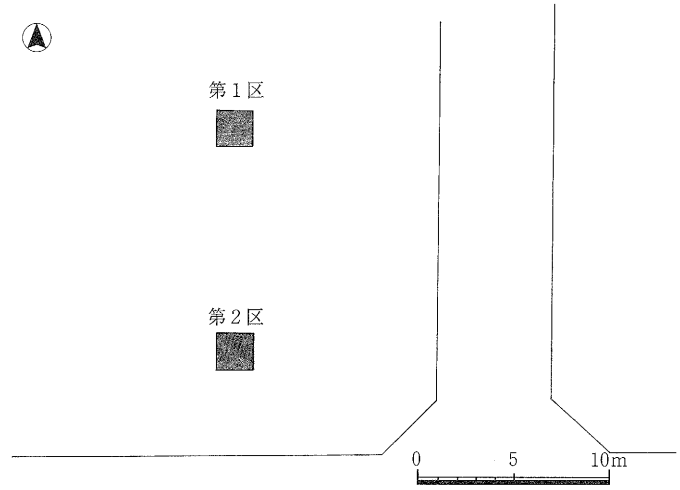
1．調査名：教会建設に伴う遺構確認調査

2．調査地：八尾市桜ヶ丘1丁目31番3

3．調査期間：平成14年９月24日

4．調査面積：８㎡

5．調査方法：八尾市教育委員会より指示された部分(規模約2.0×2.0m、面積約4.0㎡)２箇所について、工事により破壊される現地表下1.7m前後までを調査した。なお、調査では北側の調査区を第１区、南側の調査区を第２区と呼称した。レベル高については、八尾市作成1/2500地図に記載されているレベル高値(調査地の南西方向に位置するＴ字路のセンター：T.P.＋7.8m)を使用した。



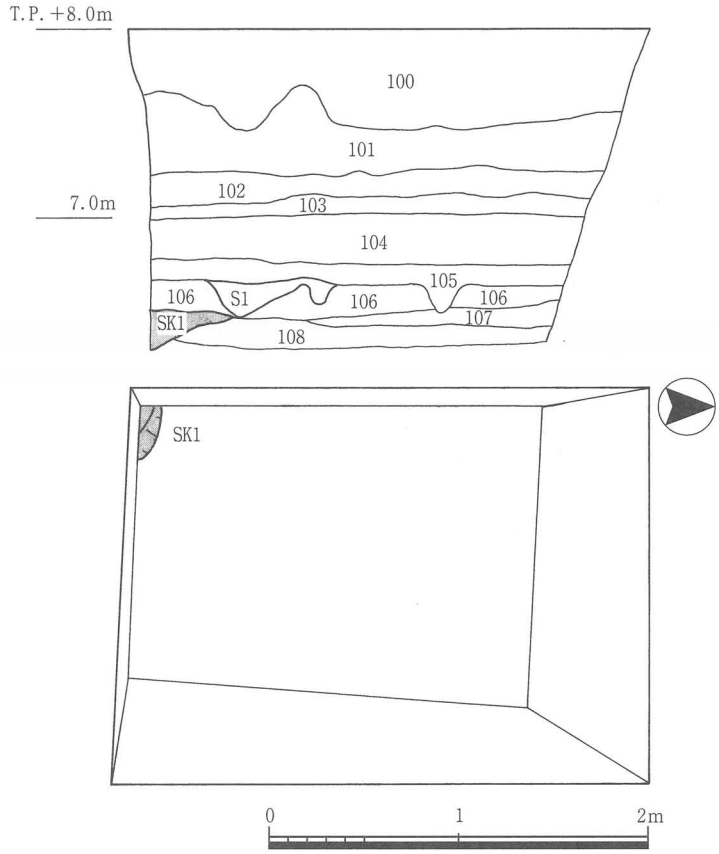
第67図　調査区位置図(Ｓ＝1/400)

6．調査概要：第１区　現地表(T.P.＋8.000m)下0.4m前後までは、客土・盛土(100層)である。以下現地表下1.7mまでの1.3m間で８枚(101～108層)の地層を確認した。101層は灰色を呈した極粗粒砂～細礫が混在するシルト～中粒砂である。102層はオリーブ色の極粗粒砂～細礫混シルト。丸瓦の細片が混在していた。103層は灰色粘土質シルト。オリーブ灰色粘土質シルトのブロック(５～８㎝大)が混在する。104層は灰色細礫混粘土質シルト～シルト。土師器細片を含む地層である。101層～104層は、攪拌を受けた淘汰不良の汚れた地層であるため、水田耕作土の可能性が高いといえる。105層は灰色の極粗粒砂～細礫混粘土質シルト。106層は灰色を呈した極粗粒砂～細礫混粘土質シルトである。上面において遺構Ｓ１が構築されるようだ。107層はオリーブ灰色シルト質粘土。管状の酸化Ｍｎが沈着している。108層は灰色のシルト質粘土。雲状の酸化Ｍｎを極めて多く含む。上面はフラットである。本層上面でＳＫ１を検出した。

第２区　現地表(T.P.＋7.980m前後)下0.4m前後までは、客土・盛土(200層)である。以下現地表下1.8mまでの1.4m間で８枚(201～208層)の地層を確認した。201層は灰色シルト質粘土と黄灰色シルト～細粒砂で形成されたブロック層である。202層は灰色中礫混シルト質粘土～シルト。203層は灰色粘土質シルト。オリーブ灰色粘土質シルトのブロックが混在する。204層はオリーブ黒色粘土質シルト。木片が散在する。205層はオリーブ灰色細礫混粘土質シルト～シルト。201層～205層までは、攪拌を受けた地層で、水田耕作土の可能性が高い。このうち205層については、畦畔の可能性も否定できない。206層は灰色細粒砂～中粒砂混粘土質シルトである。土師器や須恵器の細片が混在する。207層は灰色のシルト質粘土。上面はフラットである。雲状の酸化Ｍｎを極めて多く含む。本層上面でＳＤ１を検出した。

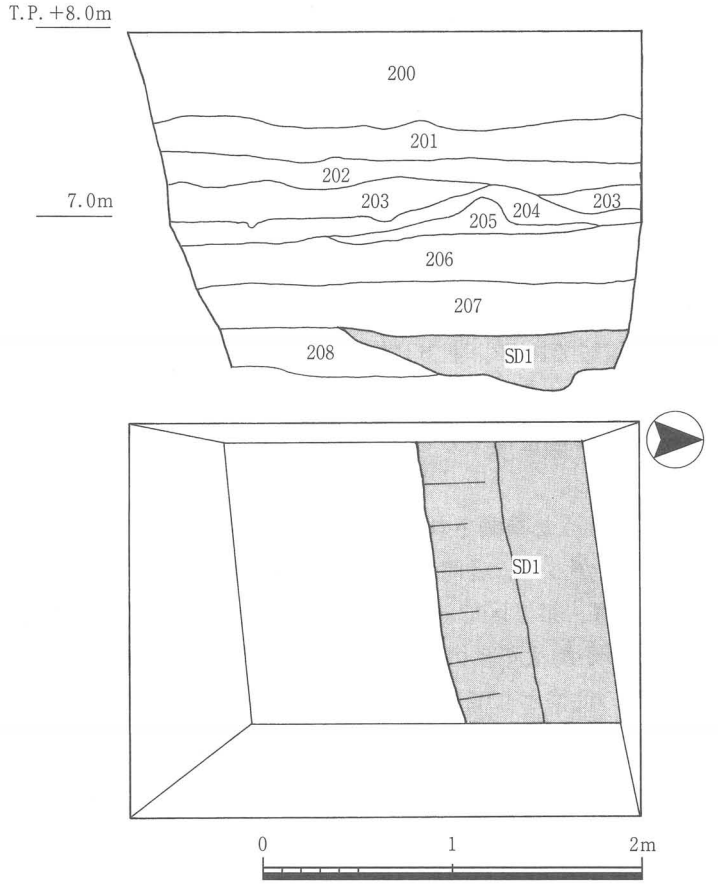
検出遺構　ＳＫ１は、第１区の南西隅で検出した。全容は不明。埋土は暗オリーブ灰色シルト質粘土のブロックで、遺構内や埋土に遺物は含まれていなかった。ＳＤ１は第２区のほぼ中央付近で検出した。東西方向に直線的に伸びる南肩を検出したが、遺構が調査区外にさらに広がるため全容は不明。埋土は、灰色シルト～細粒砂(灰色粘土質シルトのブロックが混在)で形成されていた。遺物の出土はなし。

7．まとめ：今回の調査地周辺では、数次に亘る調査が行われてきた。この内、南東部に位置する第47次調査地や東隣する第48次調査地では、T.P.＋5.8～6.8m前後で古墳時代前期～平安時代初頭までの遺構を検出している。したがって、本調査地でも、同様のレベル値において、同時期の遺構が存在する可能性が考えられたわけであるが、今回の調査成果は、それを裏付けたものといえる。ただし、調査面積が小さいこともあり、遺構の正確を決定付けることができなかったことは残念であった。　(樋口)



100層　客土・盛土
101層　7.5Y5/1灰色極粗粒砂～細礫混シルト～中粒砂
102層　5Y5/2灰オリーブ色極粗粒砂～細礫混シルト(ガラス片を含む)
103層　10Y4/1灰色粘土質シルト(10Y5/2オリーブ灰色粘土質汁とのブロックが混在)
104層　10Y4/1灰色細礫混粘土質シルト～シルト
105層　7.5Y4/1灰色極粗粒砂～細礫混粘土質シルト
106層　5Y4/1灰色極粗粒砂～細礫混粘土質シルト
107層　2.5GY5/1オリーブ灰色シルト質粘土
108層　10Y5/1灰色シルト質粘土
Ｓ１　5GY4/1暗オリーブ灰色シルト質粘土
ＳＫ１　5GY4/1暗オリーブ灰色シルト質粘土

第68図　第２区平断面図(Ｓ＝1/40)



200層　客土・盛土
201層　10Y4/1灰色シルト質粘土(2.5Y5/1黄灰色シルト～細粒砂とブロックを形成)
202層　7.5Y4/1灰色中礫混シルト質粘土～シルト
203層　10Y4/1灰色粘土質シルト(10Y5/2オリーブ灰色粘土質汁とのブロックが混在)
204層　10Y3/1オリーブ黒色粘土質シルト
205層　10Y5/2オリーブ灰色細礫混粘土質シルト～シルト
206層　10Y6/1灰色細粒砂～中粒砂混粘土質シルト
207層　10Y5/1灰色シルト質粘土
208層　5Y6/2灰オリーブ色粗粒砂～極粗粒砂(5Y4/1灰色粘土質シルトのブロックが混在)
ＳＤ１　5Y5/1灰色シルト～細粒砂(10Y4/1灰色粘土質シルトのブロックを含む)

第69図　第２区平断面図(Ｓ＝1/40)

27　中田遺跡(2002－67)の調査

1．調査名：分譲住宅建設に伴う遺構確認調査

2．調査地：八尾市八尾木北１丁目94番１、94番２、95番、96番

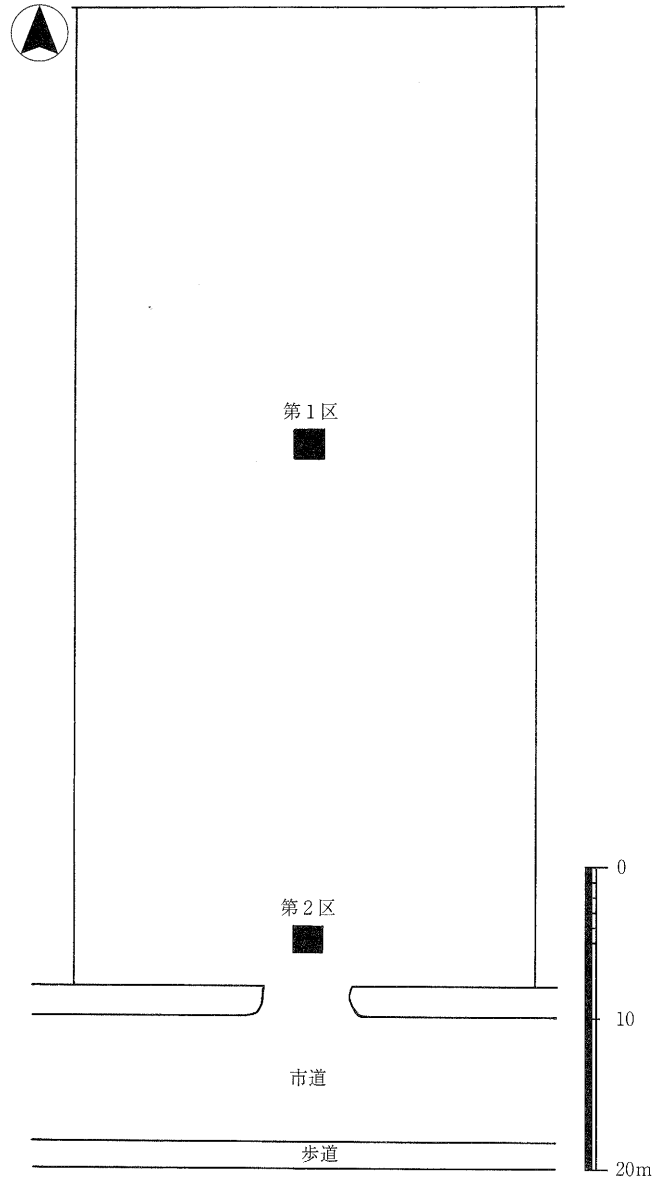
3．調査期間：平成14年５月29日

4．調査面積：８㎡

5．調査方法：人孔部分(規模約2.0×2.0m、面積4.0㎡)２箇所について、現地表下1.9m前後までを調査した。なお調査では、北側の調査区を第１区、南側の調査区を第２区と呼称した。レベル高については、八尾市作成1/2500地図に記載されているレベル高値(調査地の南側を東西にはしる市道上：T.P.＋10.0m)を使用した。

6．調査概要：第１区　現地表下1.0m前後までは客土・盛土(100層)である。以下現地表下1.9mまでの0.9m間で、７層(101層～107層)もの地層を確認した。100層は旧耕土に相当する。105層は流水堆積層である。下方に向かうにつれて細粒化の傾向にある砂層である。106層は粘性に富む地層で、湿地帯のような静水域に形成された地層であろう。107層は細礫が混在する非常に汚れた地層である。上面において遺構の存在を確認したが、見つからなかった。遺構内埋土あるいは土壌化層の可能性が考えられる。遺構の検出はなし。

第２区　現地表下0.9m前後までは客土・盛土(200層)である。以下現地表下1.9mまでの1.0m間で、６層もの地層を確認した。201層は旧耕土に相当する。202・203層は土師器細片を極少量含む地層である。この内203層は、地層がやや汚れていることから、整地層などの可能性も否定できない。204層はシルト～極細粒砂優勢の流水堆積層である。下方に向かうにつれて細粒化の傾向にある。205層は粘性の強い湿地性の堆積層である。206層は非常に汚れた地層である。遺物などの混入は認められないが、本層上面において、遺構が存在する可能性は十分考えられる。また、本層そのものが遺構内埋土の可能性も否定できない。遺構の検出はなし。



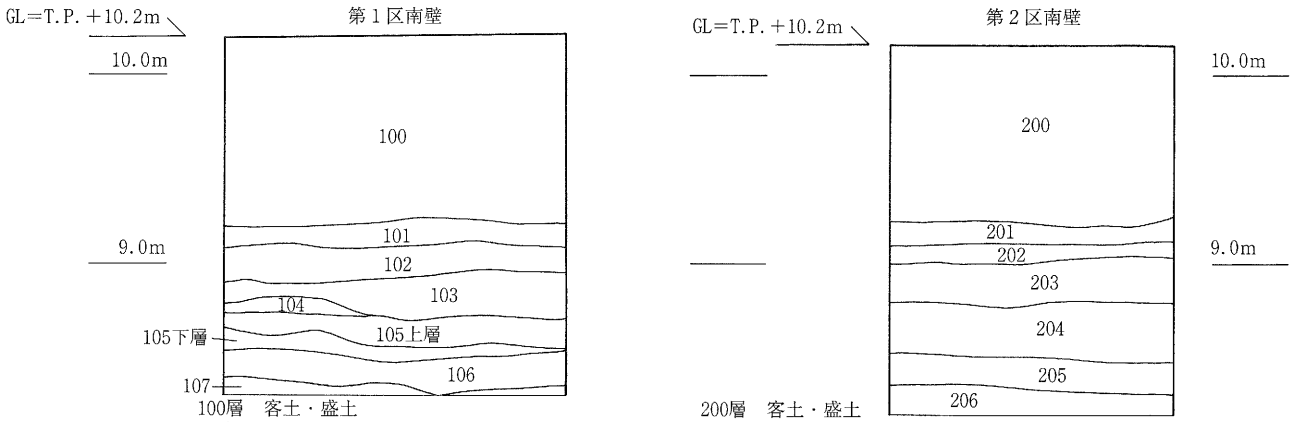
第70図　調査区位置図(Ｓ＝1/500)

7．まとめ：今回の調査では、遺構の検出や、遺構に伴うと推測される遺物の出土は認められなかった。また、地層に含まれる遺物の量も希薄であった。したがって、各時代を通して居住域などの遺構面が存在する可能性は極めて低いといえる。注目すべき点は、第１区で確認された107層と、第２区に認められた206層である。両地層ともに土壌化の影響のためか淘汰不良の層相を呈しており、両地層上面が生活面であった可能性は極めて高い。その場合、遺構の性格としては、先述したように遺物量が希薄なことから、水田などの生産域に伴う遺構が存在する可能性が考えられる。今後の調査に期待したい。

(樋口)

参考文献

・吉田野乃　1995「5. 中田遺跡(94－311)の調査」『八尾市内遺跡平成６年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市文化財調査報告32　平成６年度公共事業　八尾市教育委員会



100層　客土・盛土
101層　7.5Y3/1オリーブ黒色細粒砂～中粒砂混粘土質シルト
102層　7.5GY6/1緑灰色細礫～中礫混シルト～中粒砂
103層　2.5Y6/2灰黄色細礫混粘土質シルト(酸化Mn斑や雲状の酸化Mnを含む)
104層　2.5Y5/1黄灰色極粗粒砂～細礫混粘土質シルト～シルト(酸化Mn斑の沈着が著しい)
105層　上層：10YR6/3にぶい黄褐色細粒砂～粗粒砂(雲状の酸化Mnの沈着が激しい)
下層：7.5YR5/4にぶい褐色細礫～中礫混シルト～極細粒砂(雲状の酸化Mnの沈着が激しい)
106層　2.5Y4/1黄灰色極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土
107層　2.5Y4/1黄灰色細粒砂～中粒砂混粘土質シルト

200層　客土・盛土
201層　7.5Y3/1オリーブ黒色細粒砂～中粒砂混粘土質
202層　7.5GY6/1緑灰色細粒砂～中粒砂
203層　5Y5/2灰オリーブ色シルト～中粒砂混粘土質シルト(雲状の酸化Mnを含む)
204層　上層：7.5YR5/2灰褐色細粒砂～極粗粒砂(酸化Mnの沈着が激しい)
下層：10YR5/6黄褐色シルト～極細粒砂(酸化Mnの沈着が極めて激しい)
205層　2.5Y4/1黄灰色シルト質粘土
206層　2.5Y4/1黄灰色細粒砂～中粒砂混粘土質シルト

第71図　第１区・第２区地層断面図(Ｓ＝1/40)

28　花岡山遺跡(2002－198)の調査

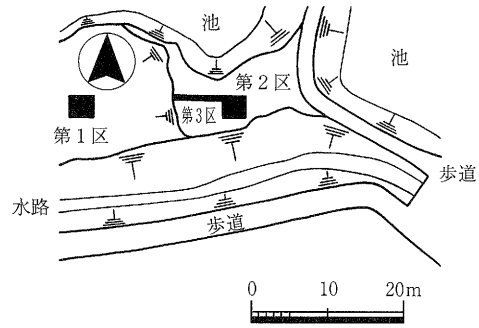
１．調査名：大学キャンパス再整備(大学校舎建築工事)に伴う遺構確認調査

２．調査地：八尾市楽音寺６丁目１番地他

３．調査期間：平成14年９月２日～９月３日

４．調査面積：21.6m²

５．調査方法：建物基礎部分に３×３ｍの調査区を２箇所、６×0.6ｍの調査区を１箇所設定し、現地表下2.0ｍ前後まで機械と人力で掘削し、調査を行った。今回の調査では、八尾市作成1/2500の地図に記載している値(調査地の北側道路上T.P.＋47.3ｍ)を使用した。

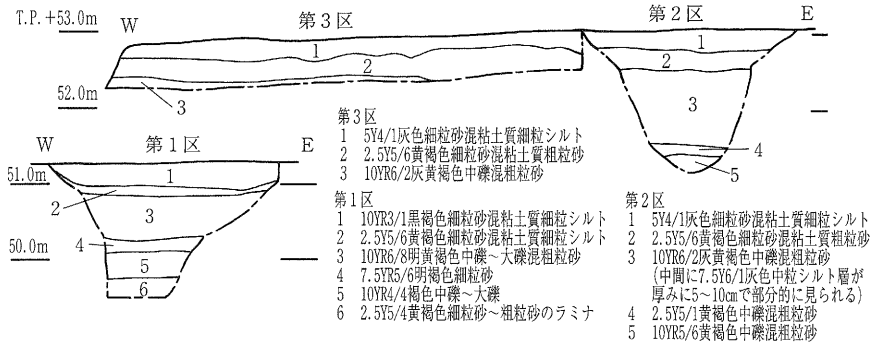


第72図　調査区設定図(Ｓ＝1/1000)

６．調査概要：【第１区】の現地表面はT.P.＋51.3ｍを測り、以下６層の地層を確認した。【第２区】の現地表面はT.P.＋53.1ｍを測り、以下５層の地層を確認した。【第３区】の現地表面は東側がT.P.＋53.1ｍ、西側がT.P.＋52.8ｍを測り以下３層の地層を確認した。各調査区ともに遺構の検出および遺物の出土はなかった。

７．まとめ：各地層からは出土遺物がなかった為、時代の特定は困難であった。しかし、各地区で確認した２層は、周辺の調査結果と対比させると、中世～近世頃の地層と思われる。

(西村)



第73図　第１区～第３区断面図(Ｓ＝1/100)

29　水越遺跡(2002―79)の調査

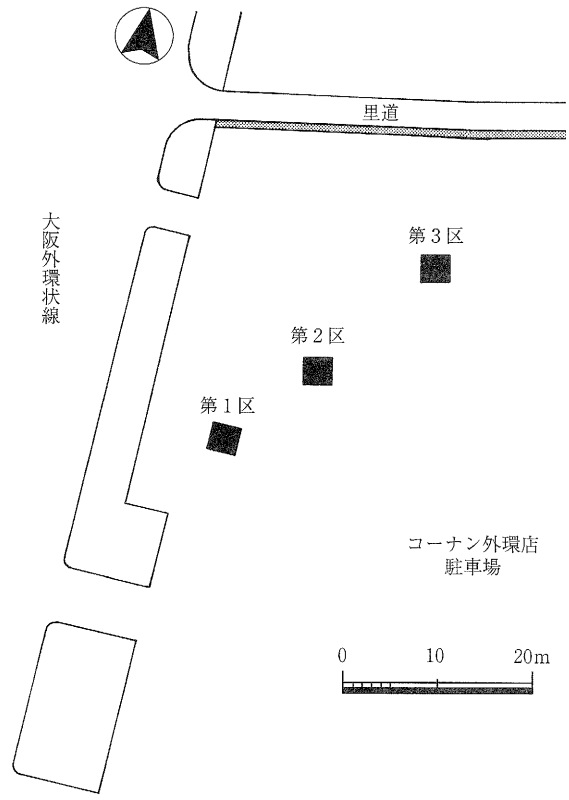
1．調査地：農家栽培用温室建設に伴う遺構確認調査

2．調査地：八尾市服部川１丁目92番地他９筆

3．調査期間：平成14年６月４日

4．調査面積：約27m²

5．調査方法：人孔部分(規模約3.0×3.0m、面積約9.0m²)３箇所について、現地表下3.0m前後までを調査した。調査では、各土坑を西から順に第１区～第３区と呼称した。レベル高については、八尾市作成1/2500地図に記載されているレベル高値(調査地の西側を南北に走る大阪外環状線上：T.P.＋11.0m)を使用した。



第74図　調査区位置図(Ｓ＝1/800)

6．調査概要：第１区　現地表下1.7m前後までは客土・盛土層である。以下現地表下3.0m前後までの1.3m間で８層(101～108層)もの地層を確認した。101層はグライ化が著しい砂層である。102層は酸化Ｍｎの沈着が目立つシルト～極細粒砂。土師器の細片を極少量包含する。中世頃に形成された地層であろう。103層は上面が土壌化している可能性が高い地層で、上面から切り込まれた遺構らしきラインも確認できた。本層上面において、遺構が検出される可能性が非常に高いと思われる。104・105層は無遺物層。106層以下は水成層である。この内106層については、シート状に薄く堆積する砂礫層で、溢流堆積物である。付近にこの砂礫を供給した河川の存在を彷彿させる。

第２区　現地表下1.8m前後までは客土・盛土層である。以下現地表下3.0m前後までの1.0m間で８層(201～208層)もの地層を確認した。201層は旧耕土に相当する土壌化層である。203・204層はグライ化の顕著な地層である。205層はブロックで形成されている。本層そのものが遺構内埋土になる可能性も考えられる。206層以下は水成層で、下方に向かうにつれて粗粒化の傾向を見せる。

第３区　現地表下2.0m前後までは客土・盛土層である。以下現地表下3.0m前後までの1.0m間で7層(301～307層)もの地層を確認した。301層は旧耕土に相当する土壌化層である。302層はグライ化の顕著な地層である。303層はシート状に薄く堆積する砂礫層である。付近の河川から流れ込んできた、溢流堆積物であろう。305層は、５～８㎝大のブロックで形成された非常に汚れた地層である。遺構内埋土そのものの可能性も否定できない。306・307層は水成層である。下方に向かうにつれて粗粒化の傾向が強くなる。なお、306層からは須恵器細片が、307層から土師器竈の炊口の細片が出土した。

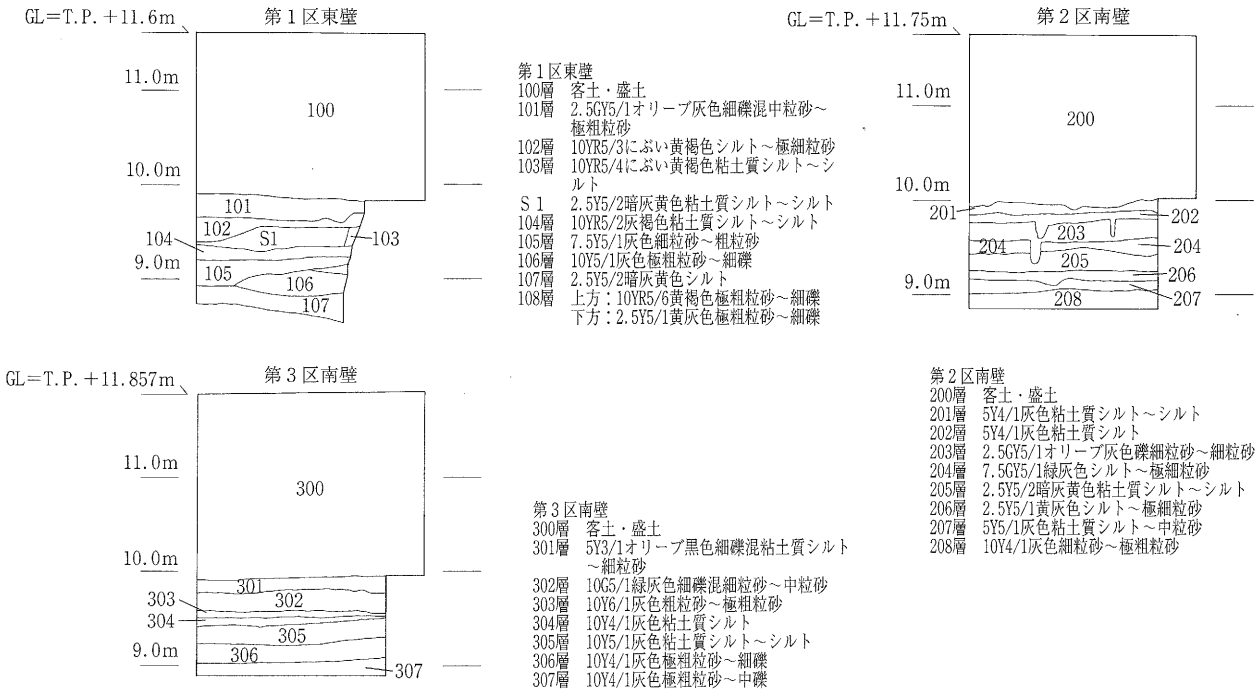
7．まとめ：今回の調査地周辺では、東側約20m、及び南東側約100mの地点で、比較的大規模な調査が実施されている。調査の結果、弥生時代後期の竪穴住居をはじめ、古墳時代前期の墓域などが検出され、それぞれの時代の集落が展開することが明らかにされた。しかしながら、各時代の集落の西端については確定しておらず、その点に考慮しながら調査を進めていった。結果は、上記の通りである。明確な遺構の検出や、遺構に伴うと推測される遺物の出土は認められない。また、第３区の307層内から出土した土師器竈の細片の存在から、この深さであっても依然として弥生～古墳時代の地層に到達していない可能性も高い。したがって、先述の問題点については解決されていない。今後の調査に期待したい。

(樋口)

参考文献

・坪田真一　1994「10．郡川遺跡第３次調査（ＫＲ94－３）」『財団法人八尾市文化財調査研究会事業報告』（財）八尾市文化財調査研究会

・成海佳子・坪田真一　1995「27．水越遺跡第５次調査（ＭＫ95－５）」『財団法人八尾市文化財調査研究会事業報告』（財）八尾市文化財調査研究会



第75図　第１区東壁・第２区南壁・第３区南壁地層断面図（Ｓ＝1/80）

30　水越遺跡（2002－82）の調査

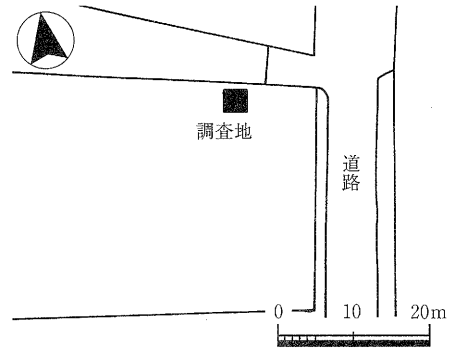
１．調査名：店舗建設工事に伴う遺構確認調査

２．調査地：八尾市水越１丁目122番・123番

３．調査期間：平成14年６月６日

４．調査面積：９㎡

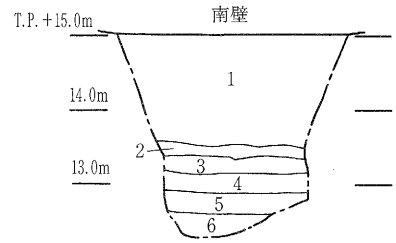
５．調査方法：浄化槽部分に３×３ｍの調査区を設定し、現地表下約2.7ｍまで機械と人力で掘削し、調査を行った。今回の調査では、八尾市作成1/2500の地図に記載している値（調査地の東側歩道上T.P.＋14.83ｍ）を使用した。



第76図　調査区設定図（Ｓ＝1/1000）

６．調査概要：現地表面はT.P.＋15.0ｍ前後で、以下６層の地層を確認した。６層は粘性の強い細砂で、東側に広がる生駒山地西麓部から流されて堆積した土砂と推測される。

７．まとめ：今回の調査では、遺物の出土がなかったため各層の時期は判明していない。周辺の調査からおそらく３層～６層は近世以前に相当すると思われる。（西村）



1　盛土
2　5B2/1　青灰色細砂混粘土
3　10YR3/3　暗褐色礫混粘土
4　7.5YR4/6　褐色細砂混粘土
5　10YR4/6　褐色シルト混粘土
6　10YR3/2　黒褐色粗砂混細砂（粘性強い）

第77図　断面図（Ｓ＝1/100）

参考文献

・高萩千秋　1989「Ｉ水越遺跡（第1次調査）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』（財）八尾市文化財調査研究会報告23　財団法人八尾市文化財調査研究会

・西村公助　1997「Ｖ水越遺跡第２次」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告57』財団法人八尾市文化財調査研究会

・高萩千秋・青木勘時　1997「Ⅵ　水越遺跡第３次」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告57』財団法人八尾市文化財調査研究会

31　八尾南遺跡(2001－358)の調査

1．調査名：分譲住宅建設に伴う遺構確認調査

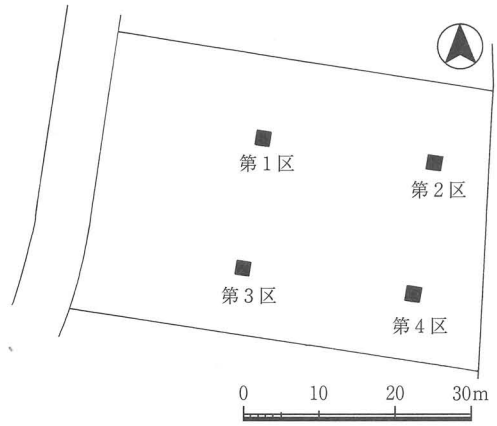
2．調査地：八尾市若林町２丁目５番

3．調査期間：平成14年５月27日

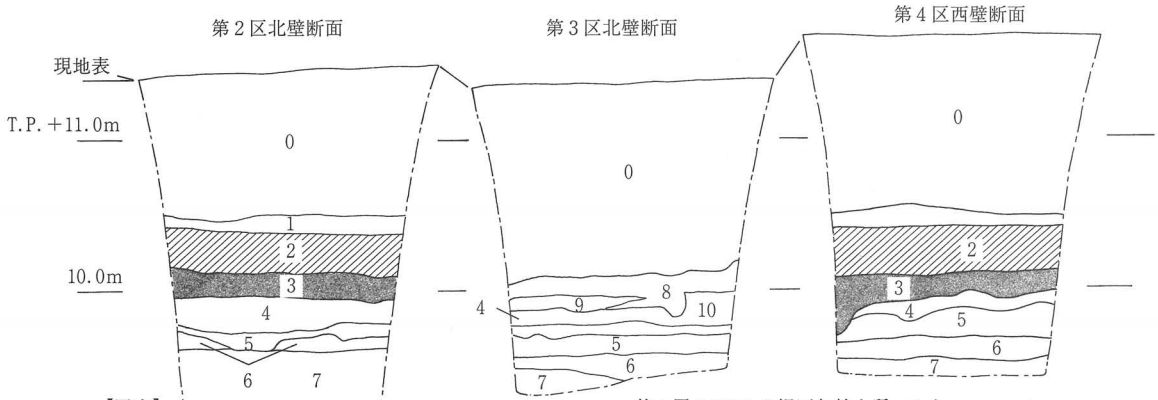
4．調査面積：16m²

5．調査方法：分譲住宅建設に先立ち、予定地内に２m四方の調査区を４箇所設定し、現地表(T.P.＋11.7～11.4m)下約３mまで重機と人力を併用して調査を行った。

6．調査概要：検出遺構　第１区は現地表から最終深度まで、旧工場の建物基礎によって撹乱されていた。第２区と第４区では、T.P.＋10.4～10.2m付近で古墳時代中期に比定される須恵器(蓋杯)の破片が少量出土した。さらに両地区ではその下層にあたるT.P.＋10.2～9.8m付近で弥生時代後期～古墳時代初頭に比定される土器片が少量出土した。第３区については、既述の第２区・第４区の弥生時代後期～古墳時代中期に対応するレベルにおいて、シルトと砂層からなる水成層が堆積していたが、遺物は出土しなかった。



第78図　調査区位置図(Ｓ＝1/100)

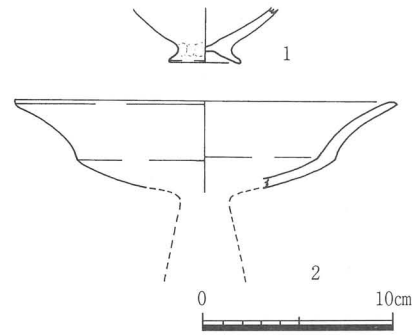


【層序】
第０層：盛土および旧工場建物基礎による撹乱
第１層：N3/0暗灰色シルト(近・現代の耕作土層)
第２層：7.5YR7/4にぶい橙色シルト
(古墳時代中期頃の須恵器片を含む)
第３層：7.5YR3/2黒褐色砂礫混じりシルト
(弥生時代後期末～古墳時代初頭の土器片を含む)
第４層：10YR5/6黄褐色粘土質シルト
第５層：10YR6/1褐灰色粘土質シルト
第６層：N4/0灰色粘土質シルト
第７層：7.5YR6/2灰褐色粘土質シルト
第８層：10YR6/2灰黄褐色砂質シルト
第９層：7.5YR6/3にぶい褐色シルト
第10層：7.5Y7/1明褐灰色砂礫混じりシルト

第79図　第２区～第４区　壁断面図(Ｓ＝1/50)

出土遺物　出土遺物の中で図化できたものは、第４区の第３層からの小型鉢(１)と高杯(２)の２点である。１は底部のみ残存で、体部は椀形を有するものと思われる。底部は底径3.6cmを測る「ハ」の字形に開く高台で、色調は橙色を呈する。２は杯部の破片であるが、口縁の外反度と長さが特徴的である。口径は推定で20.0cmを測るものと思われる。色調は浅黄橙色を呈する。いずれも器面の磨滅が著しいが、形態から見て弥生時代後期末頃(河内Ⅵ－１様式)に比定されるものである。

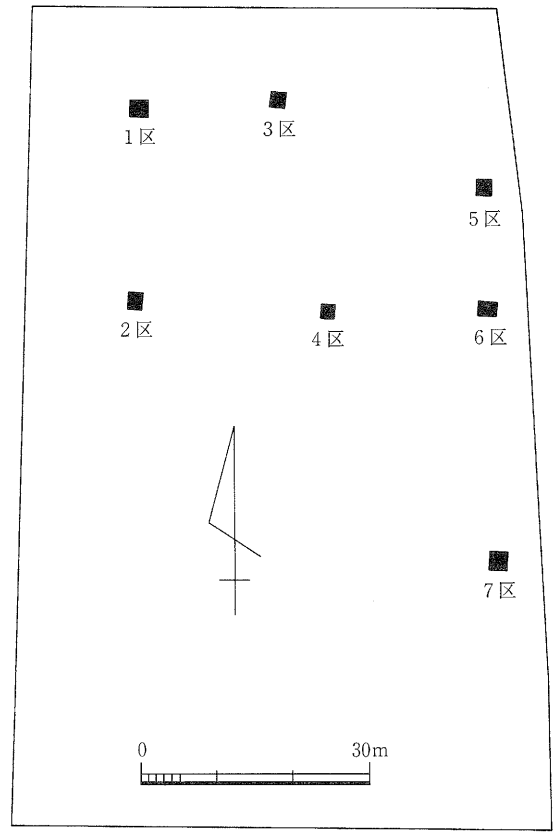
7．まとめ：当地点から南へ約50m地点では、平成７年度に当研究会において調査(ＹＳ94－21)が行われており弥生時代後期末を主とする遺構・遺物が検出されている。それは層位・レベル的および出土遺物の年代観から、今回の遺構確認調査の第２区・第３区にほぼ対応するものであり、当該期の遺構を検出するまでには至らなかったが、当地まで生活面が広がっていることを示唆するものである。



(岡田)　第80図　第４区一第３層出土遺物実測図(Ｓ＝1/4)

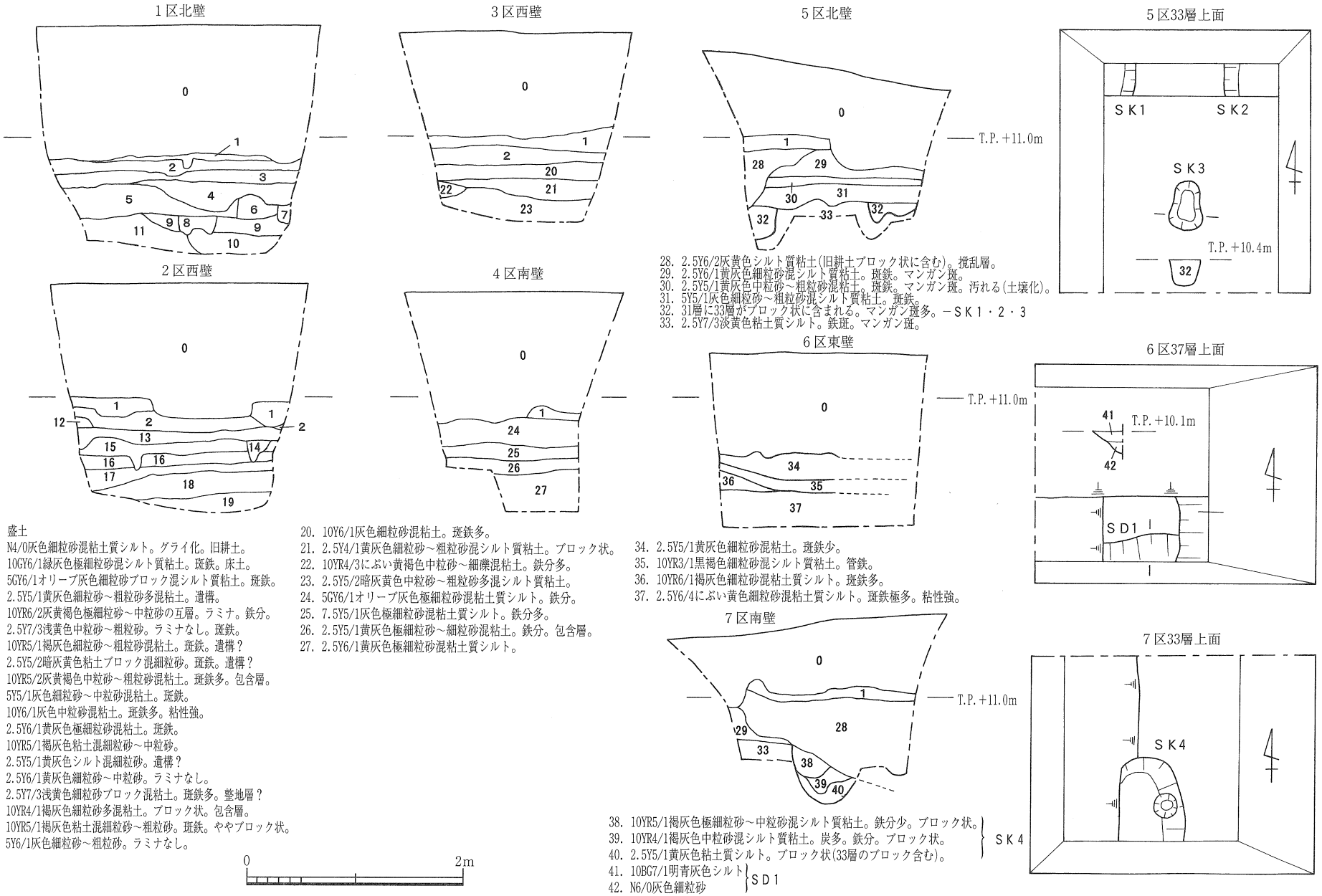
32　八尾南遺跡(2001－491)の調査

1．調査名：分譲住宅建設に伴う遺構確認調査
2．調査地：八尾市若林町２丁目10番、12番、13番、15番
3．調査期間：平成14年７月９・11日
4．調査面積：28m²
5．調査方法：人孔部分に約２×２ｍの調査区を７箇所(計28m²)設定し、工事掘削深度(GL－1.2～2.0m)まで調査した。調査区の名称は北西から１区～７区とし、各調査区とも機械と人力を併用して調査を行った。
6．調査概要：〈１区〉　約T.P.＋10.6mの４層、約T.P.＋10.3mの９層は遺物包含層で、共に西から東に下がる堆積である。遺構埋土の可能性があり、あるいは調査区東側に流路・溝等の存在が考えられる。北壁では４層下面・９層上面で遺構状の落ちが認められる。４・９層からは弥生時代後期の土器が少量出土している。



第81図　調査区位置図(Ｓ＝1/1000)

〈２区〉　約T.P.＋10.7mの13層、約T.P.＋10.4mの17層が遺物包含層である。13層からは時期不明の土器が少量出土した。17層は弥生時代後期～庄内式期の土器を非常に密に含んでおり土器集積の状況を呈していた。西壁では13層下面で遺構状の落ちが認められる。16層の細粒砂ブロック混じり粘土層は、当調査区でのみ見られた層で、整地層の可能性がある。17層出土土器は弥生時代後期中葉を主とし、庄内式土器が少量含まれる。弥生土器(２－蓋、３－長頸壺、４－高杯、５～９－甕)を図化した。２は弥生時代に通有に認められる形態の蓋で、口径14.0cm・器高6.8cm・つまみ径3.3cmを測る。３は口径13.7cm・頸部高12.4cmを測る。４は同一個体と思われる口縁部を図上で接合したもので、復元口径28.8cm・器高18.6cm・脚部径16.2cmを測る。円孔は５個に復元できる。色調は淡灰褐色、断面暗灰色である。甕はいずれも口縁端部を上外方に長くつまみ上げるものである。外面調整はタタキ・ハケ・タタキ後ハケがある。７は約2/3が残存しており、口径16.2cm・器高24.4cmを測る。６・７が角閃石を含み褐色を呈する生駒西麓産の胎土である。
〈３区〉　約T.P.＋10.6mの21層が遺物包含層で、弥生時代後期～庄内式期の土器を非常に密に含んでいる。北に下がる堆積で、落ち込み状の遺構である可能性がある。21層出土の壺１点(１)を図化した。１は口縁部を断面三角形に大きく肥厚させるもので、外面は棒状浮文・刻み目により加飾される。色調は淡橙色である。庄内式期のものと考えられる。
〈４区〉　約T.P.＋10.5mの26層が遺物包含層で、弥生時代後期～庄内式期の土器を少量含んでいる。平面・断面で遺構は認められなかった。
〈５区〉　約T.P.＋10.6mの30層、約T.P.＋10.5mの31層が遺物包含層である。33層上面で土坑３基(ＳＫ１～３)を検出した。ＳＫ１・２は北側溝内で確認したもので形状等の全容は不明である。深さはＳＫ１が約30cm、ＳＫ２が約18cmを測る。ＳＫ３は南北45cm・東西31cmを測る平面不定形な土坑で、断面逆台形を呈し、深さは25cmを測る。埋土はいずれもベース層をブロック状に含むシルト質粘土である。遺物は出土していない。30層からは５～６世紀の須恵器杯が１点出土した。31層は弥生時代後期～庄内式期の土器を密に含んでおり、他にサヌカイト製石小刀(11)が１点出土している。11は最大長7.5cm・



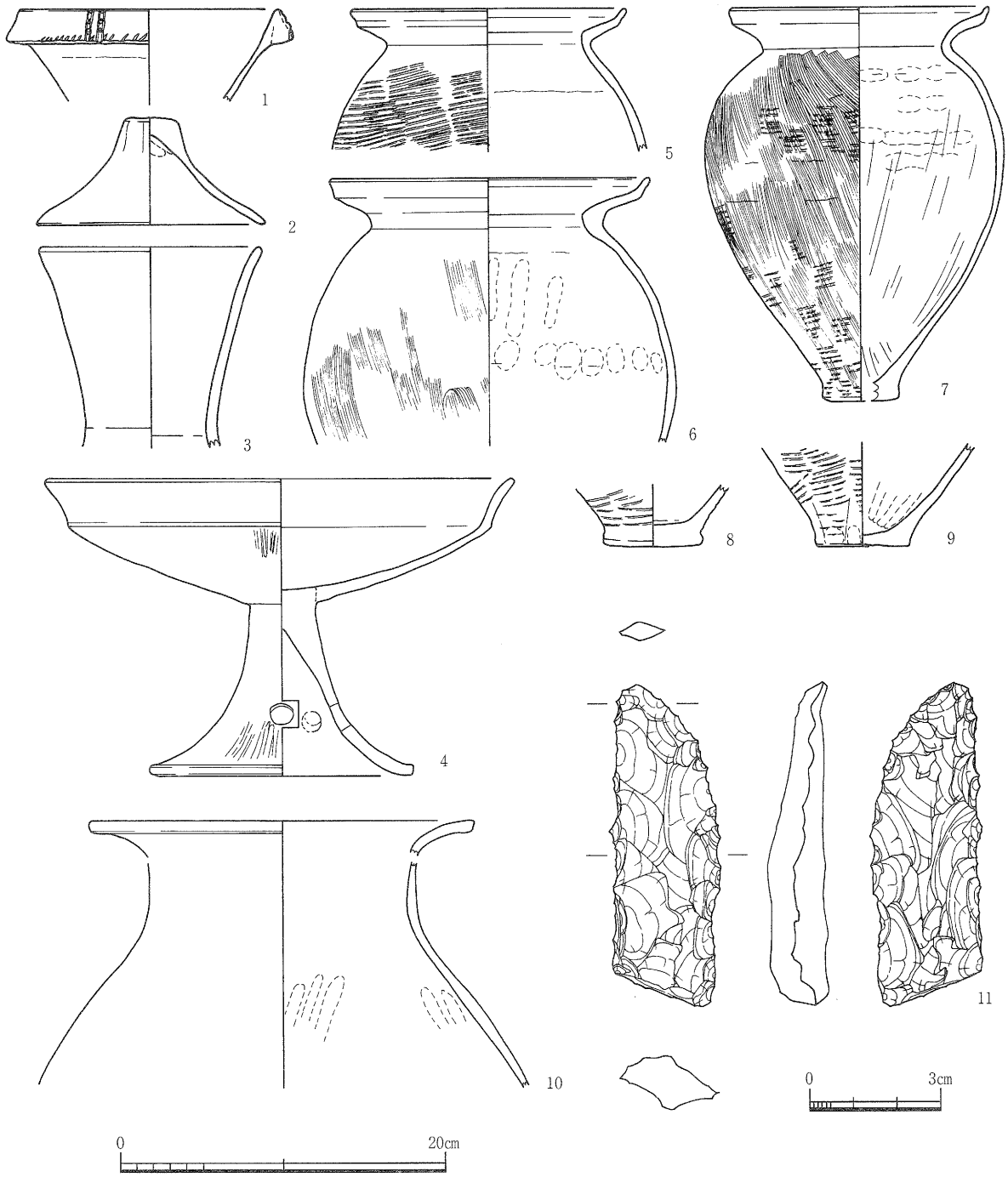
0. 盛土
1. N4/0灰色細粒砂混粘土質シルト。グライ化。旧耕土。
2. 10GY6/1緑灰色極細粒砂混シルト質粘土。斑鉄。床土。
3. 5GY6/1オリーブ灰色細粒砂ブロック混シルト質粘土。斑鉄。
4. 2.5Y5/1黄灰色細粒砂～粗粒砂多混粘土。遺構。
5. 10YR6/2灰黄褐色極細粒砂～中粒砂の互層。ラミナ。鉄分。
6. 2.5Y7/3浅黄色中粒砂～粗粒砂。ラミナなし。斑鉄。
7. 10YR5/1褐灰色細粒砂～粗粒砂混粘土。斑鉄。遺構？
8. 2.5Y5/2暗灰黄色粘土ブロック混細粒砂。斑鉄。遺構？
9. 10YR5/2灰黄褐色中粒砂～粗粒砂混粘土。斑鉄多。包含層。
10. 5Y5/1灰色細粒砂～中粒砂混粘土。斑鉄。
11. 10Y6/1灰色中粒砂混粘土。斑鉄多。粘性強。
12. 2.5Y6/1黄灰色極細粒砂混粘土。斑鉄。
13. 10YR5/1褐灰色粘土混細粒砂～中粒砂。
14. 2.5Y5/1黄灰色シルト混細粒砂。遺構？
15. 2.5Y6/1黄灰色細粒砂～中粒砂。ラミナなし。
16. 2.5Y7/3浅黄色細粒砂ブロック混粘土。斑鉄多。整地層？
17. 10YR4/1褐灰色細粒砂多混粘土。ブロック状。包含層。
18. 10YR5/1褐灰色粘土混細粒砂～粗粒砂。斑鉄。ややブロック状。
19. 5Y6/1灰色細粒砂～粗粒砂。ラミナなし。
20. 10Y6/1灰色細粒砂混粘土。斑鉄多。
21. 2.5Y4/1黄灰色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土。ブロック状。
22. 10YR4/3にぶい黄褐色中粒砂～細礫混粘土。鉄分多。
23. 2.5Y5/2暗灰黄色中粒砂～粗粒砂多混シルト質粘土。
24. 5GY6/1オリーブ灰色極細粒砂混粘土質シルト。鉄分。
25. 7.5Y5/1灰色極細粒砂混粘土質シルト。鉄分多。
26. 2.5Y5/1黄灰色極細粒砂～細粒砂混粘土。鉄分。包含層。
27. 2.5Y6/1黄灰色極細粒砂混粘土質シルト。
28. 2.5Y6/2灰黄色シルト質粘土(旧耕土ブロック状に含む)。撹乱層。
29. 2.5Y6/1黄灰色細粒砂混シルト質粘土。斑鉄。マンガン斑。
30. 2.5Y5/1黄灰色中粒砂～粗粒砂混粘土。斑鉄。マンガン斑。汚れる(土壌化)。
31. 5Y5/1灰色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土。斑鉄。
32. 31層に33層がブロック状に含まれる。マンガン斑多。－SK1・2・3
33. 2.5Y7/3淡黄色粘土質シルト。鉄斑。マンガン斑。
34. 2.5Y5/1黄灰色細粒砂混粘土。斑鉄少。
35. 10YR3/1黒褐色細粒砂混シルト質粘土。管鉄。
36. 10YR6/1褐灰色細粒砂混粘土質シルト。斑鉄多。
37. 2.5Y6/4にぶい黄色細粒砂混粘土質シルト。斑鉄極多。粘性強。
38. 10YR5/1褐灰色極細粒砂～中粒砂混シルト質粘土。鉄分少。ブロック状。
39. 10YR4/1褐灰色中粒砂混シルト質粘土。炭多。鉄分。ブロック状。
40. 2.5Y5/1黄灰色粘土質シルト。ブロック状(33層のブロック含む)。
} SK4
41. 10BG7/1明青灰色シルト
42. N6/0灰色細粒砂
} SD1

第82図　断面・平面図(S＝1/50)

最大幅2.6cm・最大厚1.4cmを測る。両面とも両側辺からの調整剥離が施され、中心に稜が生じ断面形状は菱形を呈する。

〈６区〉　約T.P.＋10.6mの35層が遺物包含層で、時期不明の土器が少量出土した。34・35層は南東に下がる堆積状況で、落ち込み状の遺構の可能性がある。調査区南端の37層上面では東西方向の流路、あるいは溝状の遺構（ＳＤ１）の北肩を検出した。ＳＤ１は検出部分で長さ70cm・幅25cm・深さ20cmを測る。埋土は２層からなる流水堆積層である。遺物は出土していない。

〈７区〉　約T.P.＋10.9mの35層が遺物包含層で、時期不明の土器が少量出土した。調査区南部、約T.P.＋10.6mの33層上面で土坑１基（ＳＫ４）を検出した。南は調査区外に続き、西は28層により削平さ



第83図　出土遺物（Ｓ＝土器：1/4、石器：2/3）

れている。検出部分からは平面楕円形を呈すると思われ、規模は南北78cm以上・東西60cm以上・深さ58cmを測る。底部では直径約22cmを測る円形のピット状の落ちがみられる。埋土は３層からなり、全体にブロック状を呈するもので、下層にはベース層のブロックが含まれる。また中層には炭が多く含まれている。遺物は弥生時代中期頃に比定される広口壺(10)の他、時期不明の土器が少量出土している。10は復元口径23.6cmを測る。胎土中に１～10mmの極粗粒砂～中礫を多量に含んでいる。色調は外面赤褐色、内面淡褐色。

７．まとめ：調査地全域で弥生時代後期～庄内式期の遺物包含層が確認され、平面・断面で遺構も検出された。特に２区の17層、３区の21層は土器を多量に含んでいる。南側で実施した第21次調査では、集落を区画するような大規模な溝等、当該期の遺構・遺物が多く検出されており、この集落域の北側への広がりが確認された。なお７区ＳＫ４は弥生時代中期の遺構である可能性があり注意を要する。レベル的には弥生時代後期～庄内式期とほぼ同じといえる。第21次調査では中期の遺構は検出されていないが、後期の溝から少量の中期の土器が出土していることからも、周辺に中期の集落域が存在する可能性がある。

(坪田)

註

註１　坪田真一　1998「Ⅵ　八尾南遺跡(第21次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告61』財団法人八尾市文化財調査研究会

33　弓削遺跡(2002－66)の調査

１．調査名：分譲住宅建設に伴う遺構確認調査

２．調査地：八尾市志紀町南３丁目120番,172番,217番,218番

３．調査期間：平成14年５月30日

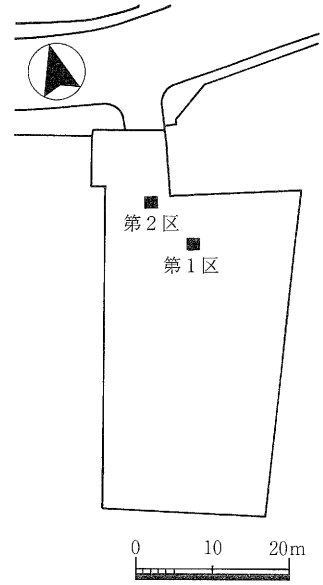
４．調査面積：８㎡

５．調査方法：今回の調査は人孔部分の２箇所で、現地表下約1.7mまで機械と人力で掘削した。今回の調査では、八尾市作成1/2500の地図に記載している標高値(調査地の北西側道路上T.P.＋13.1m)を使用した。

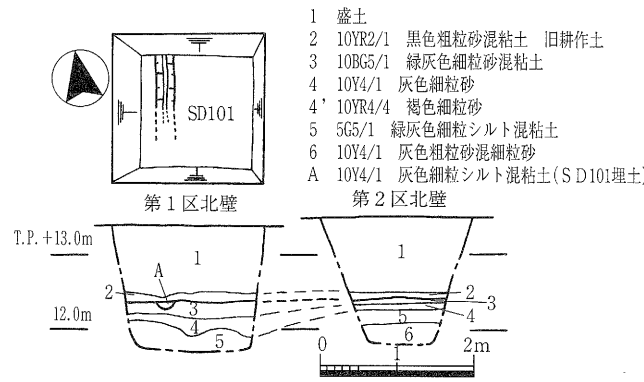
６．調査概要：【第１区】現地表の標高はT.P.＋13.4mで、以下５層の地層を確認した。３層～５層は砂層や粘土層である。３層の上面で溝(ＳＤ101)を検出した。４層の砂層内からは土師器の体部の破片が２点出土した。この土器は、表面は磨耗しており詳しい時期は不明であるがおそらく古墳時代以降のものと思われる。【第２区】現地表の標高はT.P.＋13.5mで、以下６層の地層を確認したが、遺構の検出および遺物の出土はなかった。

７．まとめ：第１区で検出したＳＤ101は、遺物の出土がなかったため時期は不明であるが、旧耕作土直下で検出したことから、近世の遺構と推定される。また、両調査区で確認した３層～５層は、西隣の既往調査との対比からおそらく古墳時代以降に相当する地層と思われる。

(西村)



第84図　調査区設定図(Ｓ＝1/1000)



第85図　１区・２区平断面図(Ｓ＝1/100)

34　弓削遺跡(2002―23)の調査

1．**調査名**：共同住宅建設に伴う遺構確認調査

2．**調査地**：八尾市志紀町南３丁目180番，181番

3．**調査期間**：平成14年８月19日

4．**調査面積**：48m²

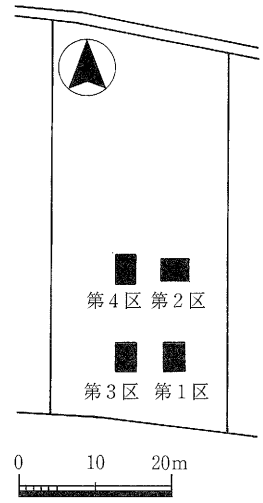
5．**調査方法**：建物基礎部分４箇所(１箇所の規模３×４ｍ)の調査を行った。調査区は南東側を第１区、北東側を第２区、南西側を第３区、北西側を第４区とする。今回の調査では、八尾市作成1/2500の地図に記載している標高値(調査地の北側道路上T.P.＋13.1m)を使用した。調査地の現地表面の標高はT.P.＋12.8mである。

6．**調査概要**：【第１区】現地表下約2.5mまでに7層の地層を確認した。１層は盛土で、２層は旧耕作土である。４層は粗粒砂～細粒砂で流水堆積層である。６層は黒色に近い暗青灰色の粘土で、植物遺体を含んでおり、弥生土器および古式土師器などの遺物が多く出土した。

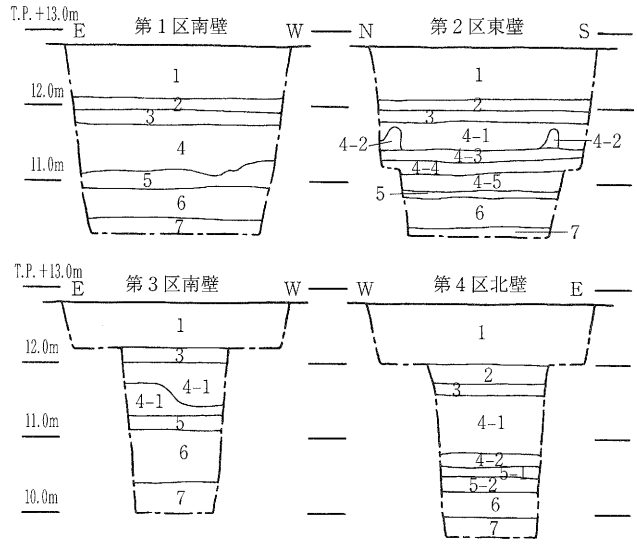
【第２区】現地表下約2.5mまでに７層の地層を確認した。１層は盛土で、２層は旧耕作土である。４層は５枚に分けられる。４－５～４－３層が堆積した後、シルトを掻きあつめ、部分的に盛り上げた後、４－１層が堆積している状況が断面で確認できた。シルトの盛り上げについては、平面的な広がりが確認できていないため、遺構であるかないかの判断はできなかった。しかし、なにかの要因で意識的に盛り上げたものであると思われる。６層は第１区と同様の遺物が出土している。

【第３区】現地表下約2.8mまでに7層の堆積を確認した。１層は盛土で、２層は旧耕作土である。４層は流水堆積層で、上下２枚に分けられる下層が粘土質のシルトで、上層が粗粒砂である。６層からは第１区・第２区と同様の遺物が出土している。

【第４区】現地表下約3.1mまでに7層の堆積を確認した。１層は盛土、２層は旧耕作土である。４層は流水堆積層である。上下２枚に分けられ下層が細粒砂で、上層が粗粒砂である。６層からは第１区～第３区と同様の遺物が出土している。



第86図　調査区設定図
(Ｓ＝1/1000)



第１区
1　盛土
2　N2/0黒色細粒砂混粘土　旧耕作土
3　10YR4/6褐色細粒砂混粘土
4　7.5YR5/6明褐色粗粒砂、細粒砂、粗粒シルトのラミナ
5　10BG5/1青灰色細粒シルト質粘土
6　5B3/1暗青灰色細粒シルト混粘土
7　5B5/1青灰色細粒シルト混粘土

第２区
4－1　10YR4/4褐色粗粒砂
4－2　7.5YR6/2灰褐色粘土質粗粒シルト
4－3　7.5Y4/1灰色細粒シルト
4－4　5B5/1青灰色粘土質細粒シルト
4－5　7.5YR5/2灰褐色粗粒砂、細粒砂、粗粒シルトのラミナ

第３区
4－1　10YR4/4褐色細粒砂
4－2　10BG5/1青灰色粘土質粗粒シルト

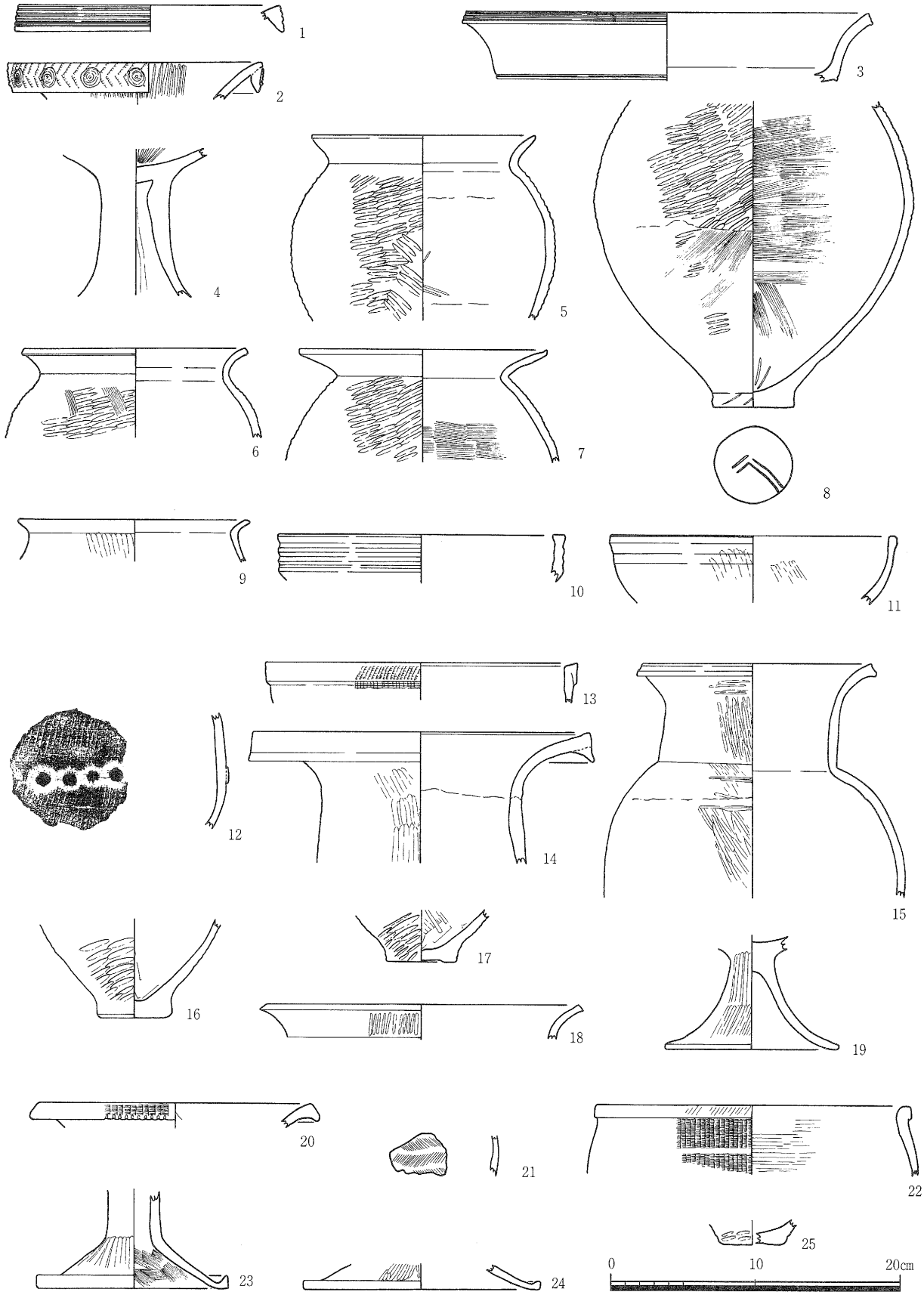
第４区
4－1　10YR4/4褐色粗粒砂
4－2　5B5/1青灰色細粒砂
5－1　10BG5/1青灰色細粒シルト質粘土
5－2　5Y4/1灰色粗粒砂混粘土

第87図　第１区～第４区断面図(Ｓ＝1/100)

出土遺物　第１区～第４区の６層内からは弥生土器、須恵器および石器が出土した。出土した遺物は、その大半が土器である。この内図化し掲載したものは25点で、調査区毎に記す。

【第１区】１～３は弥生時代後期の壺である。１は口縁外面に凹線を施している。２は口縁部外面に櫛描列点文施し、円形竹管を押捺した浮文を等間隔に貼り付けている。３は二重口縁壺と思われ、端部は凹線状に窪んでいる。４は弥生時代後期の高杯の杯部～脚部で、脚部は中空である。５～８は弥生時代後期の甕で、５の体部外面中位から下位には左上がりのタタキと右上がりのタタキを施しす。６の口縁部は丸みある面をもつ。体部外面は右上がりのタタキの後、ハケを施す。７は「く」の字に折れ曲がり外反する口縁部で、端部は上げ面をもつ。体部外面には右上がりのタタキを施し、内面は横方向のハケを

施す。８の体部外面下位から中位には右上がりのタタキを施した後ハケやナデによりタタキが消される部分がある。中位には粘土接合痕があり、右上がりのタタキを上位まで施す。内面は下位に縦方向、中位から上位に横方向のハケを施す。底部内外面にヘラ状工具の痕跡があり、底面にはヘラ記号を施す。



第88図　出土遺物実測図（Ｓ＝1/4）

【第２区】９は弥生時代中期の甕、10は弥生時代中期の高杯、11は弥生時代中期の鉢である。９の体部外面は縦方向のミガキを施す。10の口縁部外面には凹線文を施す。11は椀形の鉢と思われ、口縁部外面には凹線状の窪みが確認できる。

【第３区】12は弥生時代中期の壺、13は弥生時代中期の鉢である。12は体部であり、外面には簾状文を施した後に円形浮文を貼り付ける。この土器は、本来壺として機能したものと考えられるが、何らかの要因で破損し、その破片を円板状に打ち欠いて土製品にした可能性が考えられる。13は口縁端部外面に列点文を施す。外面には簾状文を施す。14・15は弥生時代後期の壺、16・17は弥生時代後期の甕、18・19は弥生時代後期の高杯である。14は外反する口縁部で端部は垂下し面をもち、外面には縦方向のミガキを施す。15は球形の体部から直立する頸部を経て外反する口縁部へいたる。口縁端部は面を持ち、凹線状の窪みが確認できる。体部外面は左上がりの斜め方向のミガキを施し、上位はハケのち横方向のミガキを施し、粘土接合の痕跡が残る。頸部には縦方向、口縁部には横方向のミガキを施す。16・17は外面タタキを施す。18は外反する口縁部で、端部に面をもつ。外面には縦方向のミガキを平行に施す。19の裾はハの字にゆるやかにひらく。外面に縦方向のミガキを施す。

【第４区】20・21は弥生時代中期の壺、22は弥生時代中期の鉢、23・24は弥生時代中期の高杯である。25は弥生時代後期の甕である。20は外反する口縁部で端部は垂下し面をもつ。口縁端面には櫛描簾状文を施すし、垂下した端部にはキザミ目を施す。21の外面には、ヘラと思われる工具で、綾杉状に刻む文様を施している。22は体部外面に櫛描簾状文、口縁部外面に列点文を施す。内面は横方向のミガキを施す。23は筒状の脚柱部から屈曲し「ハ」の字にひらく裾部へ至る。端部は上方へつまみ上げ、外側に面をもつ。裾部外面にミガキ、内面にハケを施す。24は「ハ」の字にひらく裾部で、端部は上方へつまみ上げ、外側に面をもつ。裾部外面にミガキを施す。25は突出する平底で、外面に右上がりのタタキを施す。

７．まとめ：各調査区ともにT.P.＋11.6～12.0m付近で約0.7～0.9mの厚さの砂層（４－１～４－５層）を検出した。この砂層は、流水堆積で、おそらく古墳時代に堆積したと考えられる。さらにその下のT.P.＋10.3～11.1m付近では、厚さ約0.35～0.7mの弥生時代中期～後期の土器や石器および土師器や須恵器を含んでいる地層（６層）を確認した。６層から出土した遺物の中には完形近くまで復元が可能なものも含まれていたことから、おそらく遺構が存在していた可能性が高いと考えられる。

なお、各調査区ともに４層から湧水が多くあり、壁面が崩れるおそれがある危険な状況であったため、平面的な調査はできなかった。したがって６層については重機で掘削し遺物を採取した。　（西村）

参考文献

・西村公助　1985「８．弓削遺跡（第１次調査）」『昭和59年度事業概要報告』財団法人八尾市文化財調査研究会報告７　財団法人八尾市文化財調査研究会

・北野　重　1993『本郷遺跡　1991･1992年度』柏原市教育委員会

・藤井淳弘　1999.3「13．弓削遺跡（98－380）の調査」『八尾市内遺跡平成10年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告40　平成10年度国庫補助事業　八尾市教育委員会

・滝　斎　1999.3「弓削遺跡（97－444）の調査」『八尾市内遺跡平成10年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市文化財調査報告41　平成10年度公共事業　八尾市教育委員会

・滝　斎　2000.3『弓削遺跡発掘調査報告書』八尾市文化財紀要10　八尾市教育委員会文化財課

・森本めぐみ　2001「ⅩⅢ　弓削遺跡　第2次調査（YGE99－２）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告67』　財団法人八尾市文化財調査研究会

・藤井淳弘　2001.3「14．弓削遺跡（1999－429）の調査」『八尾市内遺跡平成12年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告44　平成12年度国庫補助事業　八尾市教育委員会

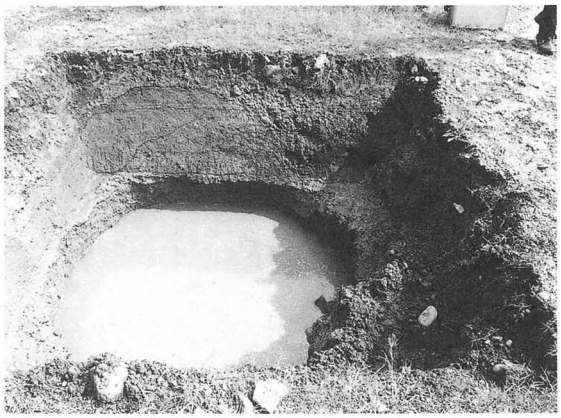
・滝　斎　2001.3「15．弓削遺跡（1999－524）の調査」『八尾市内遺跡平成12年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告44　平成12年度国庫補助事業　八尾市教育委員会

・高萩千秋　2002「Ⅱ弓削遺跡　第3次調査（YGE2000－３）」『八尾市立埋蔵文化財調査センター報告３　平成13年度』財団法人八尾市文化財調査研究会

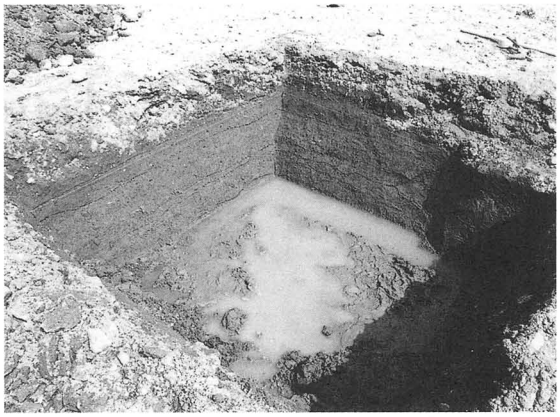
図版1　植松遺跡（2002—35）の調査・植松遺跡（2002—259）の調査・老原遺跡（2002—252）の調査

植松2002-35　調査地周辺（北から）

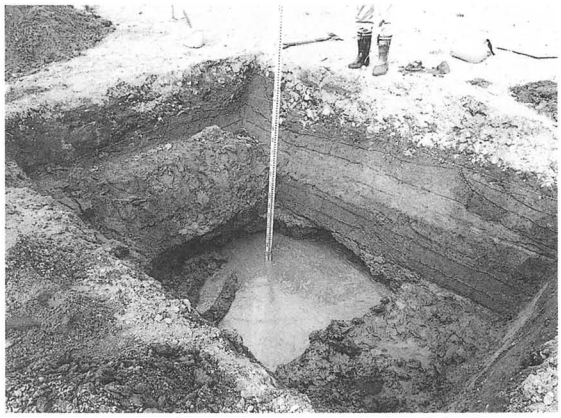
植松2002-35　全景（南から）



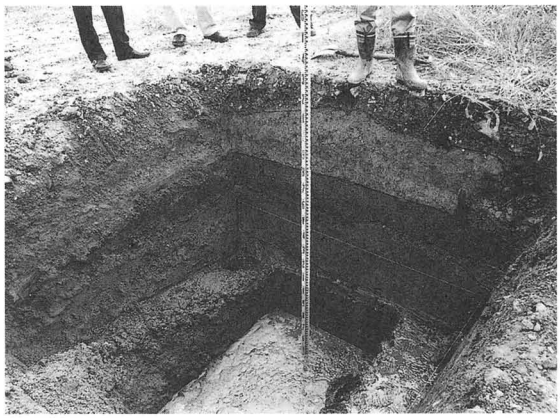
植松2002-259　1区（西から）



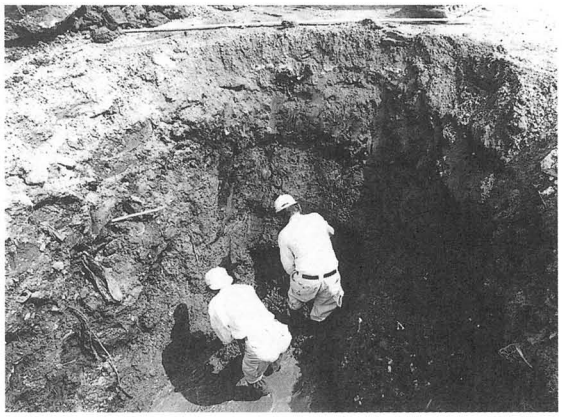
植松2002-259　3区（南西から）



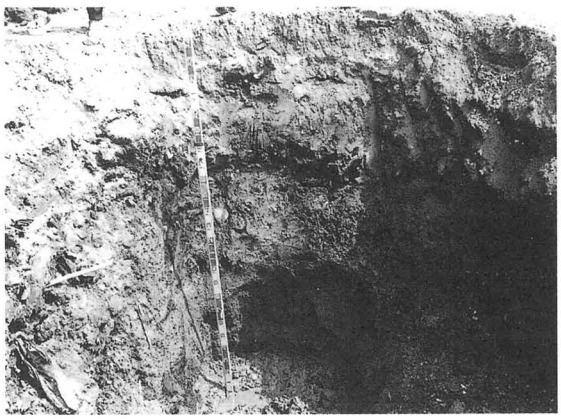
植松2002-259　4区（南東から）



植松2002-259　5区（北東から）



老原2002-252　調査風景（西から）



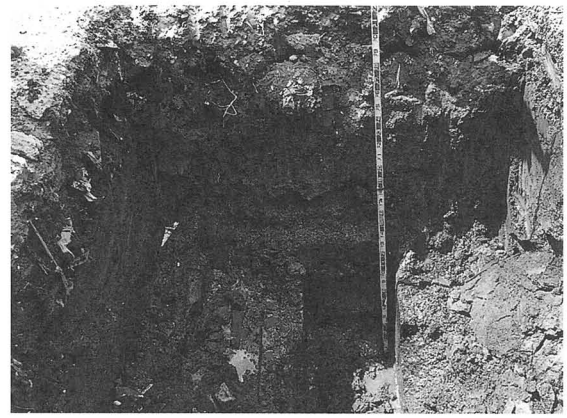
老原2002-252　東壁（西から）

図版2　太田遺跡（2001—510）の調査・太田川遺跡（2001—451）の調査・太田川遺跡（2002—281）の調査・恩智遺跡（2001—352）の調査

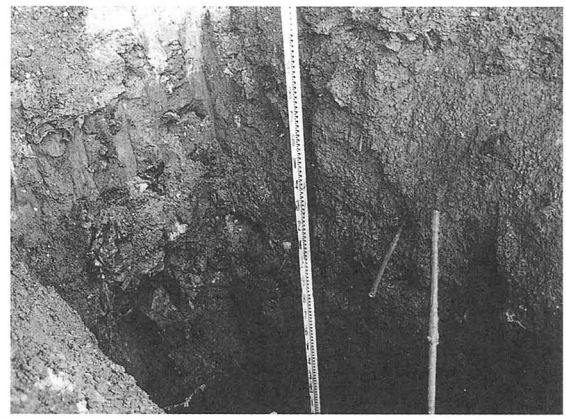
太田2001-510　調査地周辺（北から）

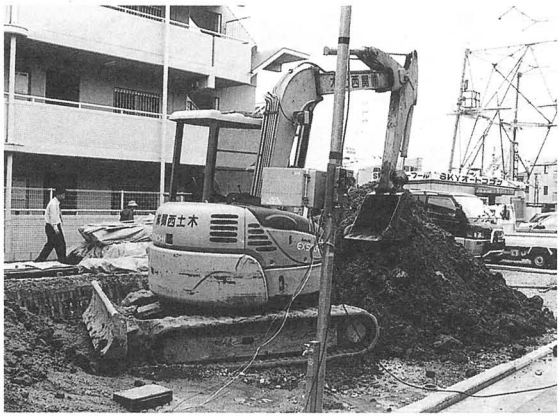
太田2001-510　第1区北壁（南から）

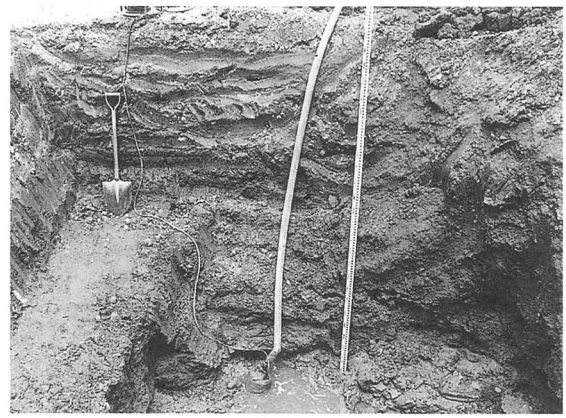
太田川2001-451　調査地周辺（北西から）


太田川2001-451　全景（北から）

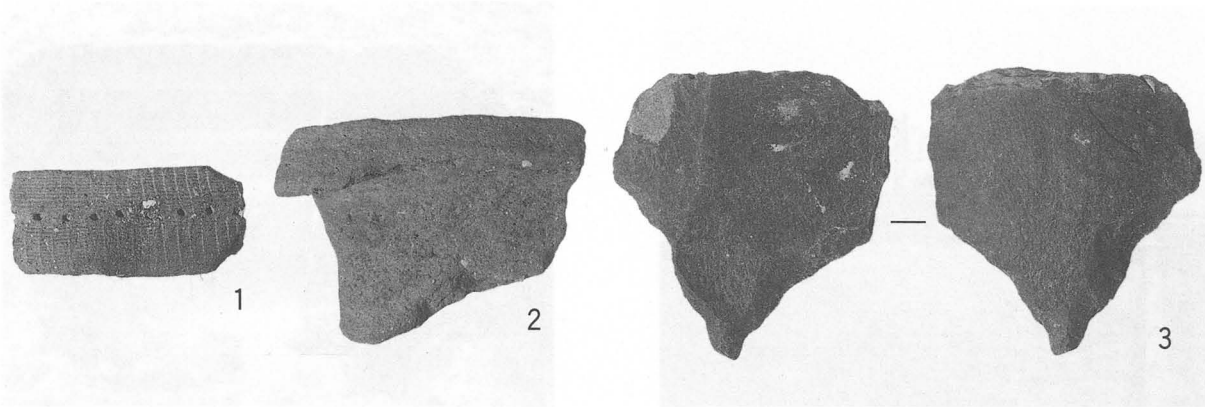
太田川2002-281　調査地周辺（南東から）


太田川2002-281　第2区西壁（北東から）


恩智2001-352　調査地周辺（南東から）

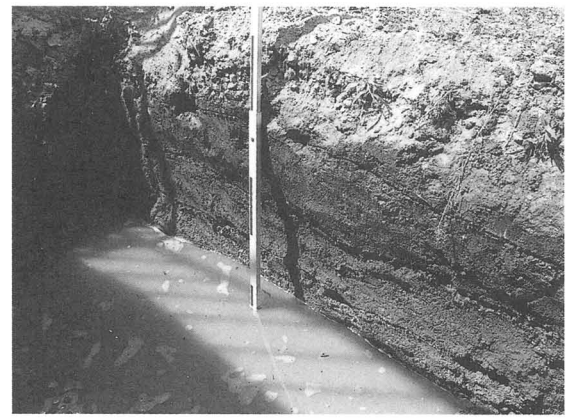

恩智2001-352　調査区北壁断面

図版3　恩智遺跡（2001—352）の調査・恩智遺跡（2002—181）の調査・恩智遺跡（2002—224）の調査・楽音寺遺跡（2002—293）の調査



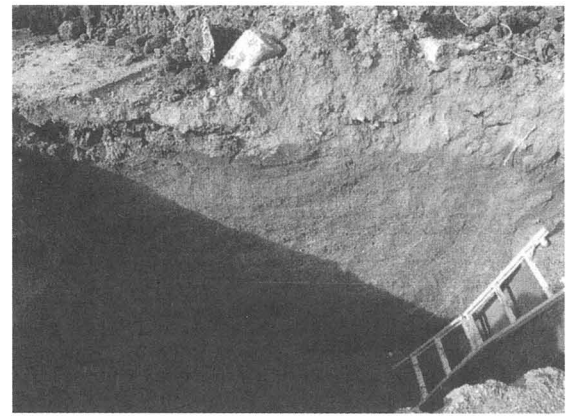
恩智2001-352　出土遺物

恩智2002-181　調査地周辺（南東から）



恩智2002-181　西壁（北東から）

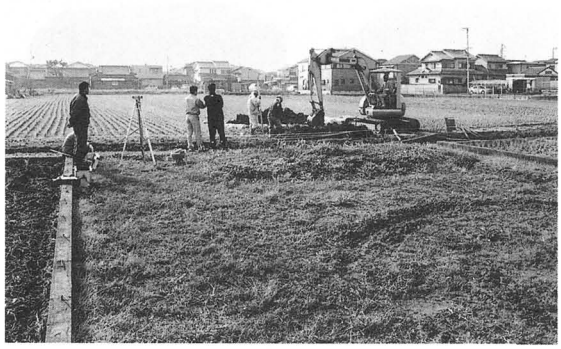
恩智2002-224　調査地周辺（南東から）



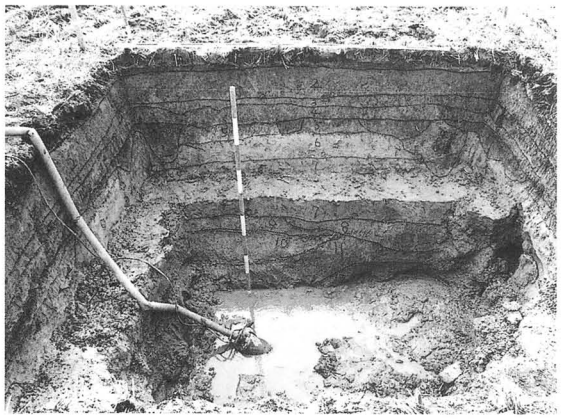
恩智2002-224　西壁面

楽音寺2002-293　調査地周辺（西から）

楽音寺2002-293　全景（南から）

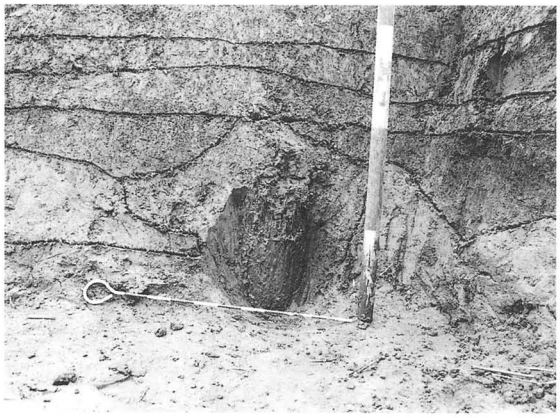


木の本2002-364　調査地周辺（北から）



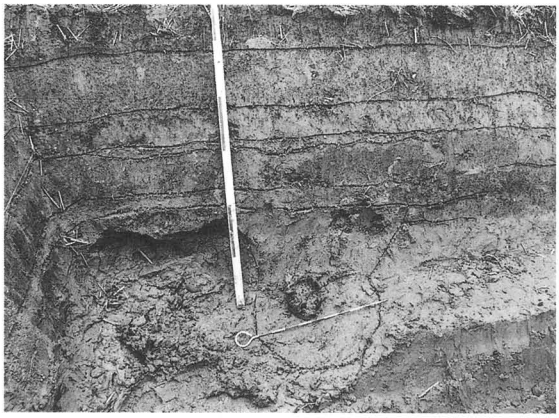
木の本2002-364　第5区（北から）

木の本2002-364　第5区柱根検出状況（北東から）



木の本2002-364　第5区柱根検出状況（北東から）

木の本2002-364　第6区全景（北から）

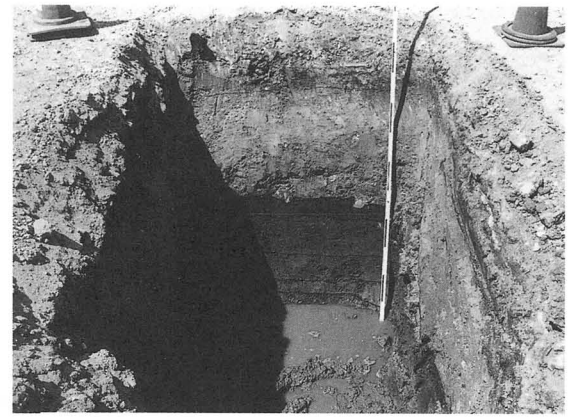


木の本2002-364　西壁および柱根検出状況（東から）

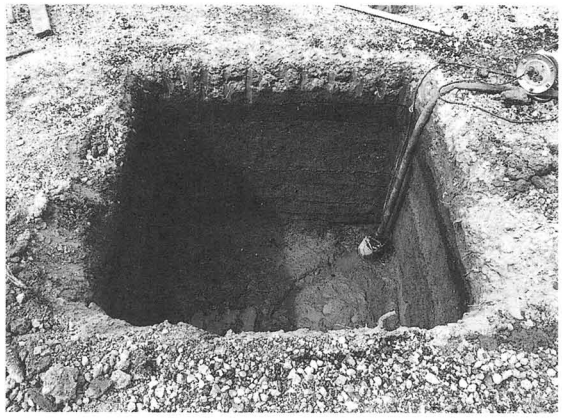
木の本2002-364　出土遺物

図版5　久宝寺遺跡（2002—145）の調査・久宝寺遺跡（2002—199）の調査・久宝寺遺跡（2002—285）の調査・郡川遺跡（2002—65）の調査

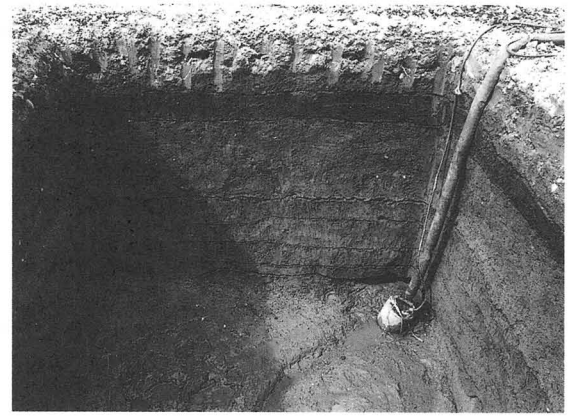
久宝寺2002-145　調査地全景（西から）



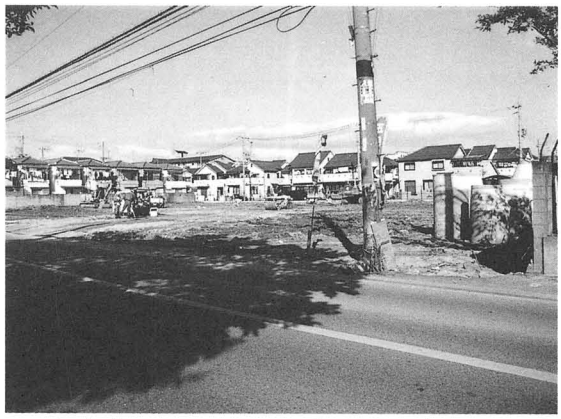
久宝寺2002-145　第1区西壁



久宝寺2002-199　全景（東から）



久宝寺2002-199　西壁



久宝寺2002-285　調査地周辺（南東から）

久宝寺2002-285　第1区西壁（東から）

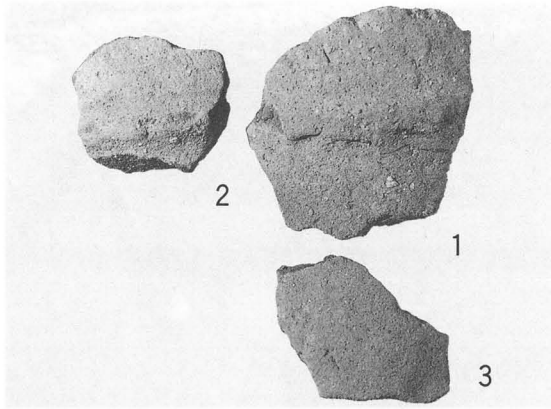
郡川2002-65　1区西壁

郡川2002-65　3区北壁

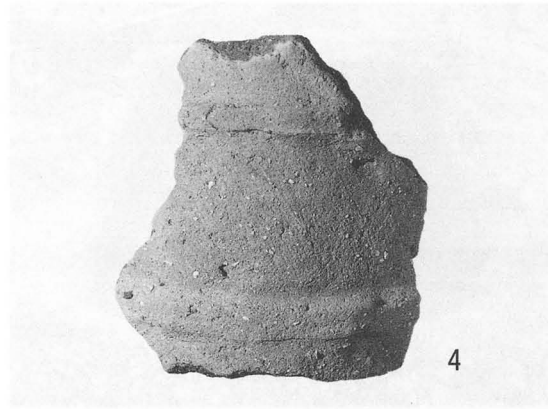
図版6　郡川東塚古墳（2002—153）の調査・小阪合遺跡（2002—294）・成法寺遺跡（2002—266）の調査

郡川東塚古墳2002-153　調査区周辺（西から）

郡川東塚古墳2002-153　埴輪片検出状況（南から）

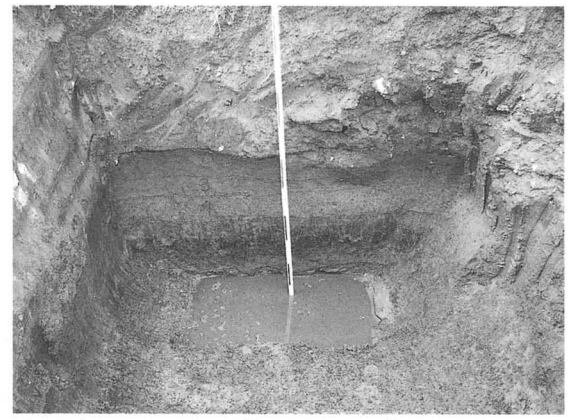


郡川東塚古墳2002-153　出土遺物



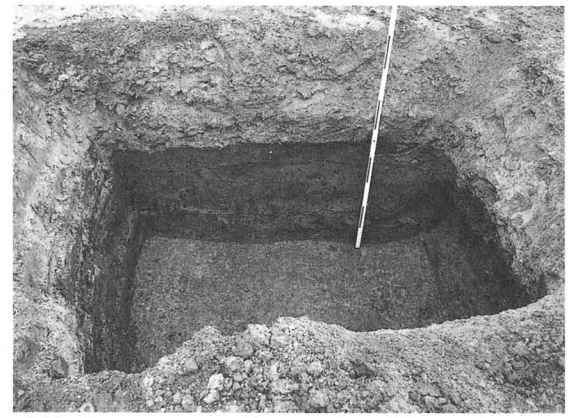
郡川東塚古墳2002-153　出土遺物

小阪合2002-294　調査地周辺（南から）



小阪合2002-294　第１区西壁（東から）

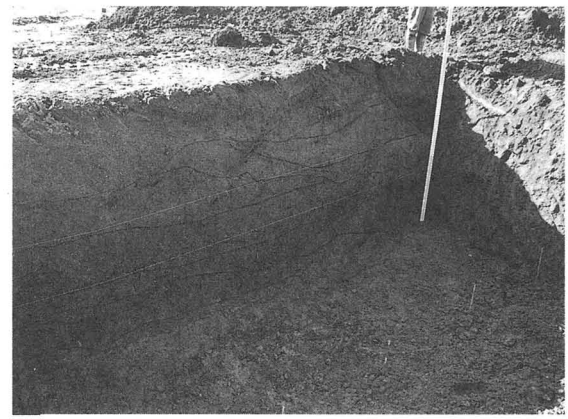
成法寺2002-266　調査地周辺（西から）



成法寺2002-266　第１区全景（南から）

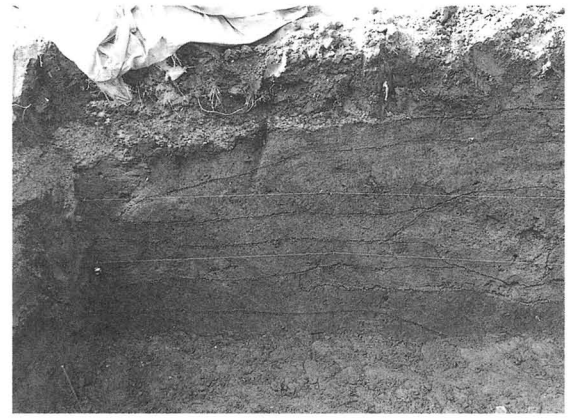
図版7　神宮寺遺跡（2001―64）の調査

神宮寺2001-64　調査地周辺（南東から）

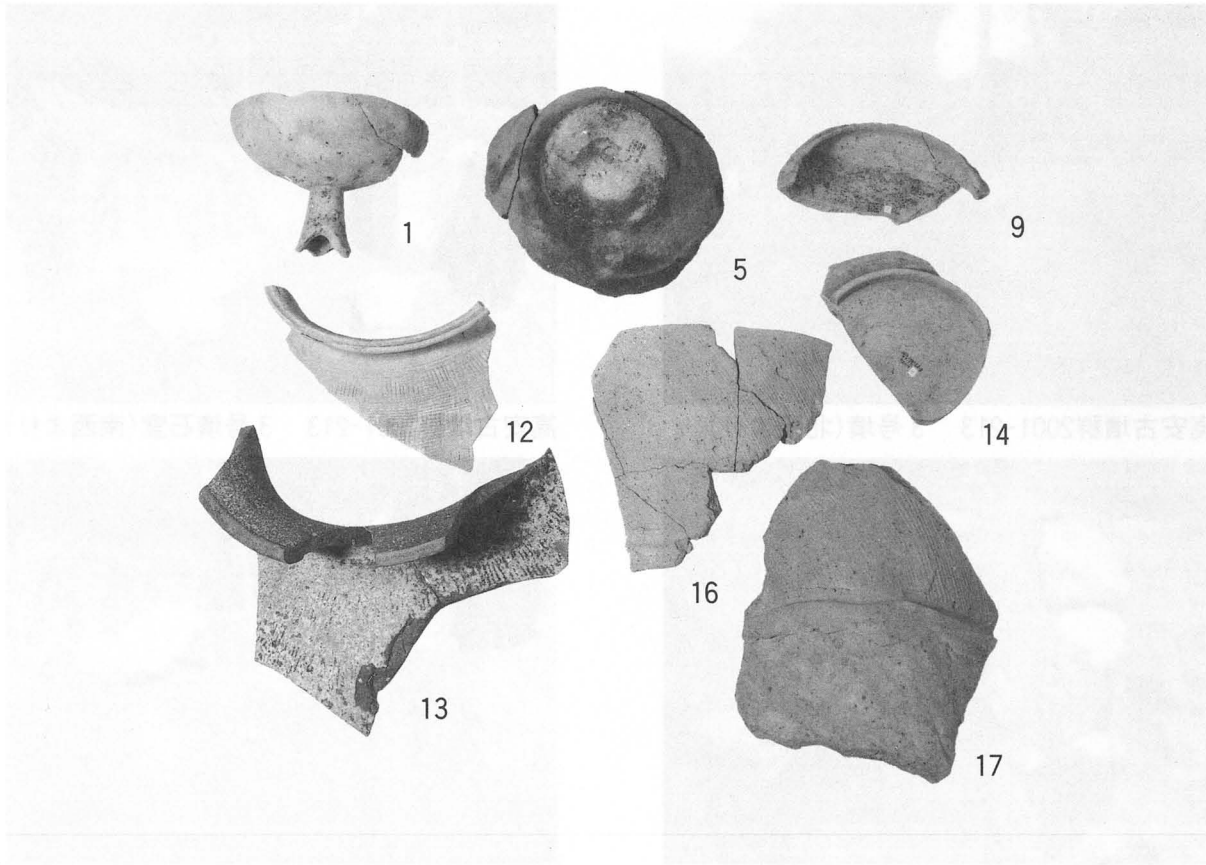


神宮寺2001-64　第１区南壁断面

神宮寺2001-64　第２区北壁断面

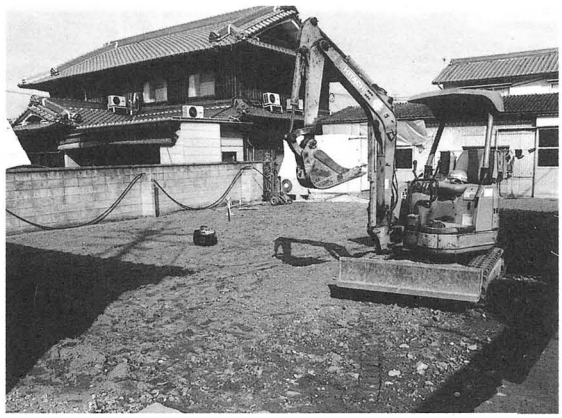


神宮寺2001-64　第３区西壁断面



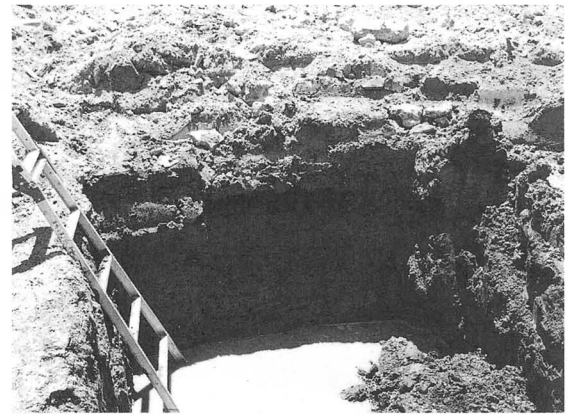
神宮寺2001-64　出土遺物

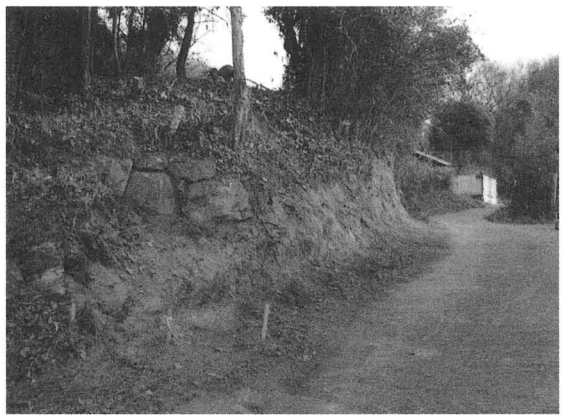
図版8　神宮寺遺跡（2002—280）の調査・太子堂遺跡（2002—204）の調査・高安古墳群（2001—213）の調査


神宮寺2002-280　調査地周辺（南東から）

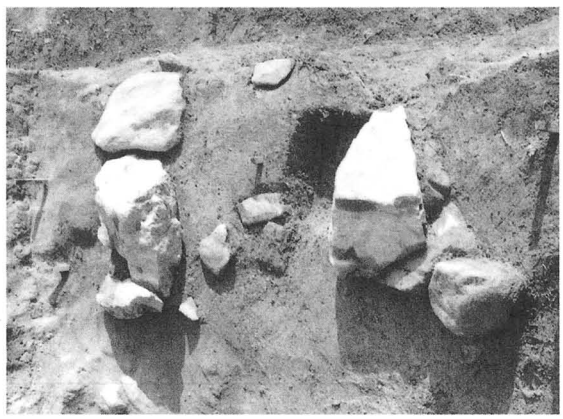
神宮寺2002-280　第1区北壁（南から）

太子堂2002-204　1区北壁


太子堂2002-204　2区南壁

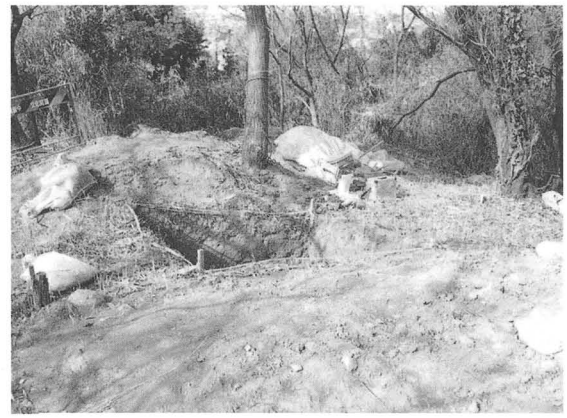

高安古墳群2001-213　3号墳（北西より）

高安古墳群2001-213　3号墳石室（南西より）


高安古墳群2001-213　3号墳（北東より）

高安古墳群2001-213　3号墳石室基礎地業土層

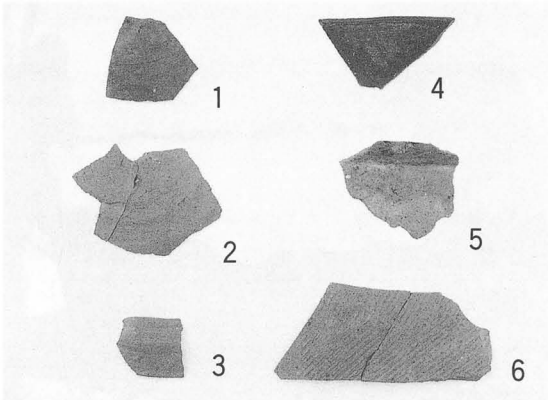
高安古墳群2001-213　３号墳第２区



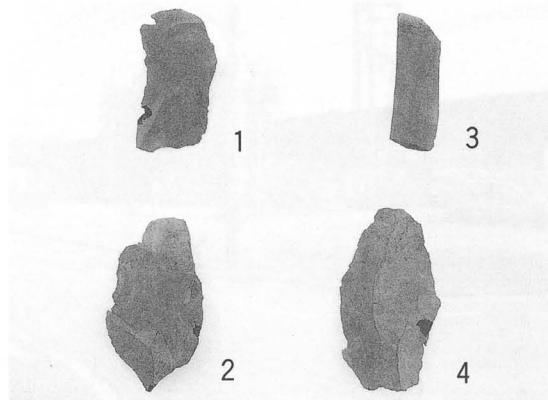
高安古墳群2001-213　４号墳第１区北トレンチ

高安古墳群2001-213　４号墳（南西より）

高安古墳群2001-213　４号墳第１区トレンチ



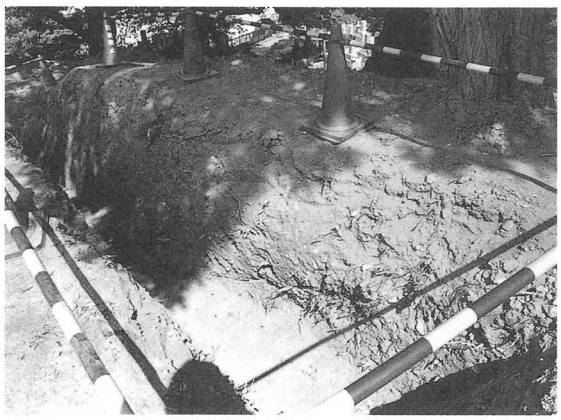
高安古墳群2001-213　Ａ区・Ｂ区出土土器



高安古墳群2001-213　Ｂ区出土石器剥片

図版10　高安古墳群（1999—586）の調査・高安古墳群（2002—236）の調査・東郷遺跡（2002—238）の調査

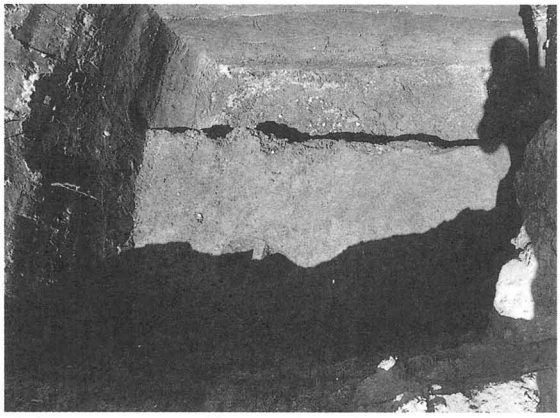
高安古墳群1999-586　1区調査前の状況（北東から）


高安古墳群1999-586　1区（南東から）

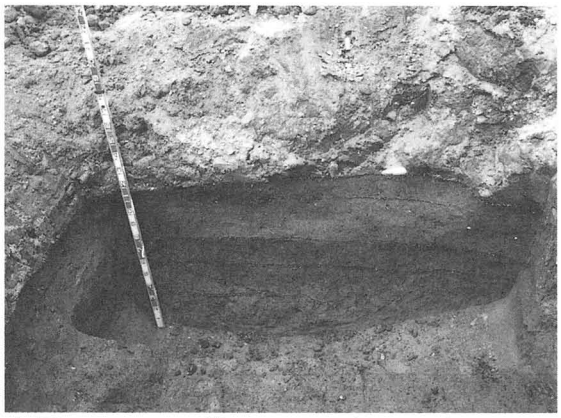
高安古墳群2002-236

高安古墳群2002-236

東郷2002-238　調査地周辺（北東から）

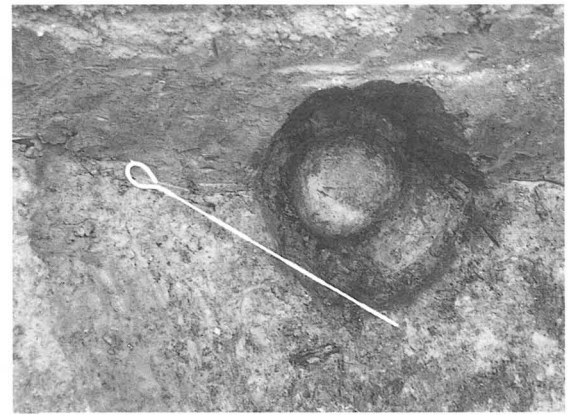

東郷2002-238　第1区全景（南から）

東郷2002-238　第2区全景（東から）


東郷2002-238　第2区北壁（南から）

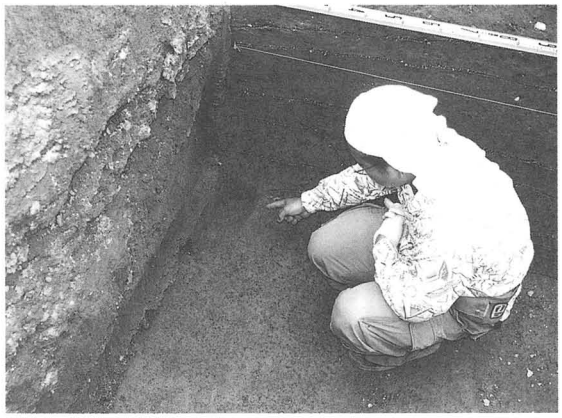
図版11　東郷遺跡（2002—238）の調査・東郷遺跡（2002—176）の調査・中田遺跡（2002—67）の調査

東郷2002-238　第２区検出状況（西から）

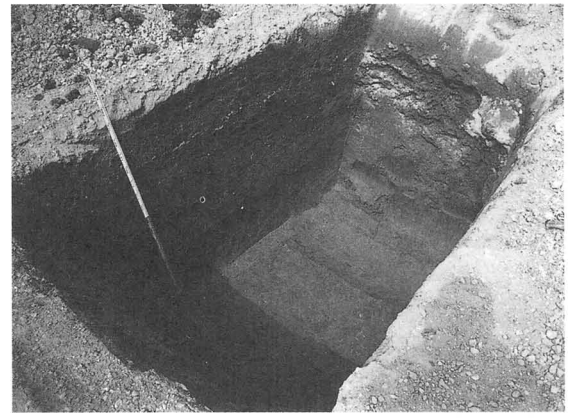


東郷2002-238　第２区土坑内遺物出土状況（北から）

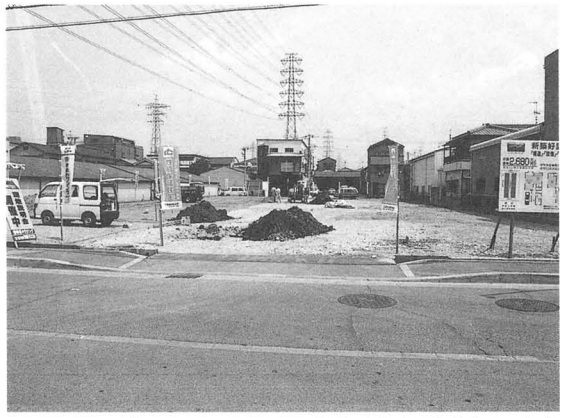
東郷2002-238　出土遺物



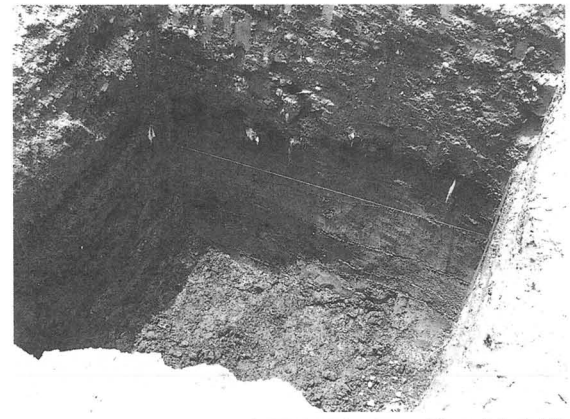
東郷2002-176　第１区ＳＫ１検出状況（東から）



東郷2002-176　第１区ＳＤ１検出状況（南東から）



中田2002-67　調査地全景（南から）



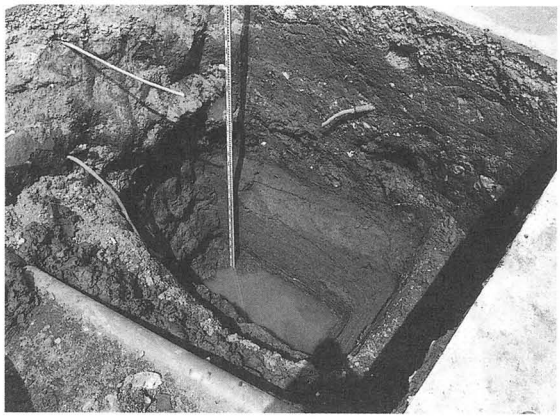
中田2002-67　第１区南壁

図版12　花岡山遺跡（2002—198）の調査・水越遺跡（2002—79）の調査・水越遺跡（2002—82）の調査・八尾南遺跡（2001—358）の調査

花岡山2002-198　調査地断面（北東から）

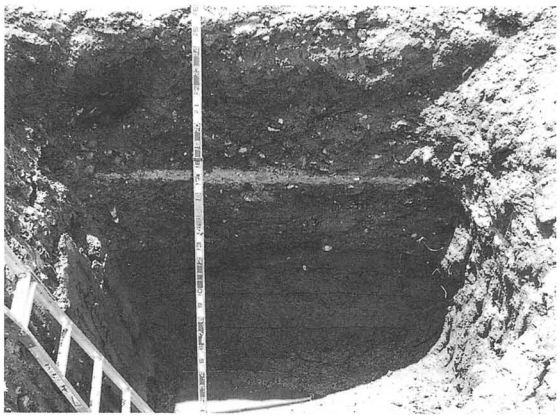
花岡山2002-198　第２区全景（北から）

水越2002-79　調査地周辺検出状況（北西から）

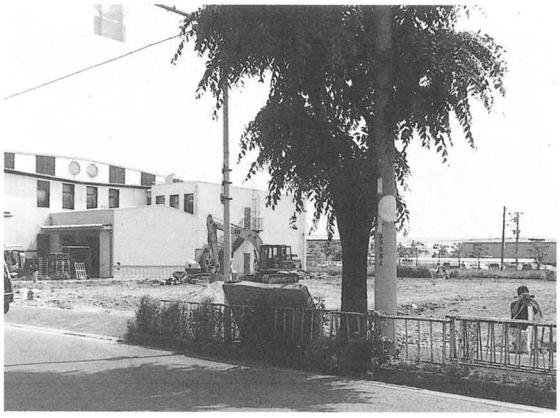


水越2002-79　第１区東壁

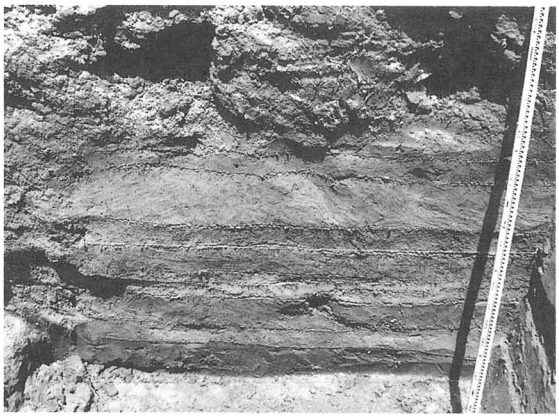
水越2002-82　調査地周辺（南東から）



水越2002-82　南壁（北から）

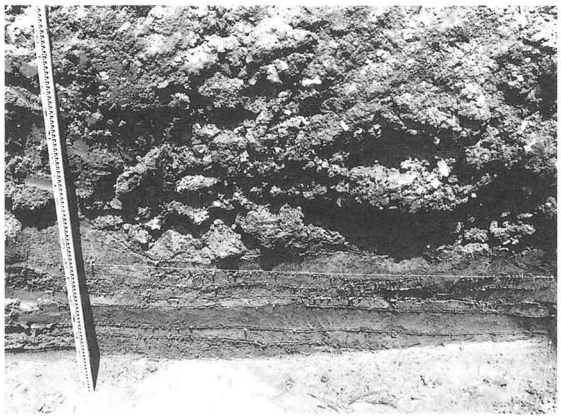


八尾南2001-358　調査地周辺（南西から）



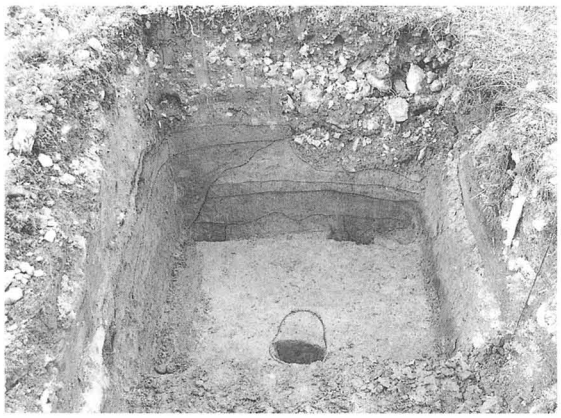
八尾南2001-358　第１区北壁断面

図版13　八尾南遺跡（2001—358）の調査・八尾南遺跡（2001—491）の調査・弓削遺跡（2002—66）の調査・弓削遺跡（2002—23）の調査



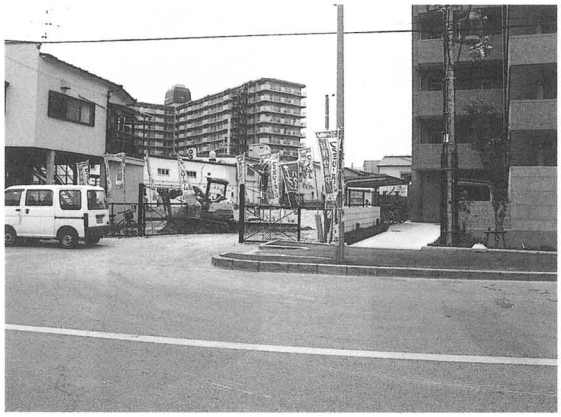
八尾南2001-358　北壁断面

八尾南2001-358　第４区西壁断面

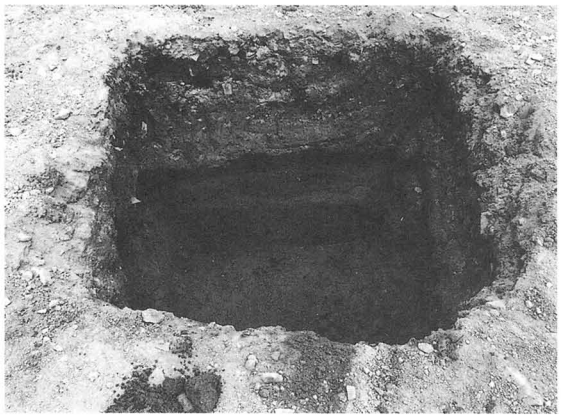


八尾南2001-491　５区全景（南から）

八尾南2001-491　７区全景（北から）



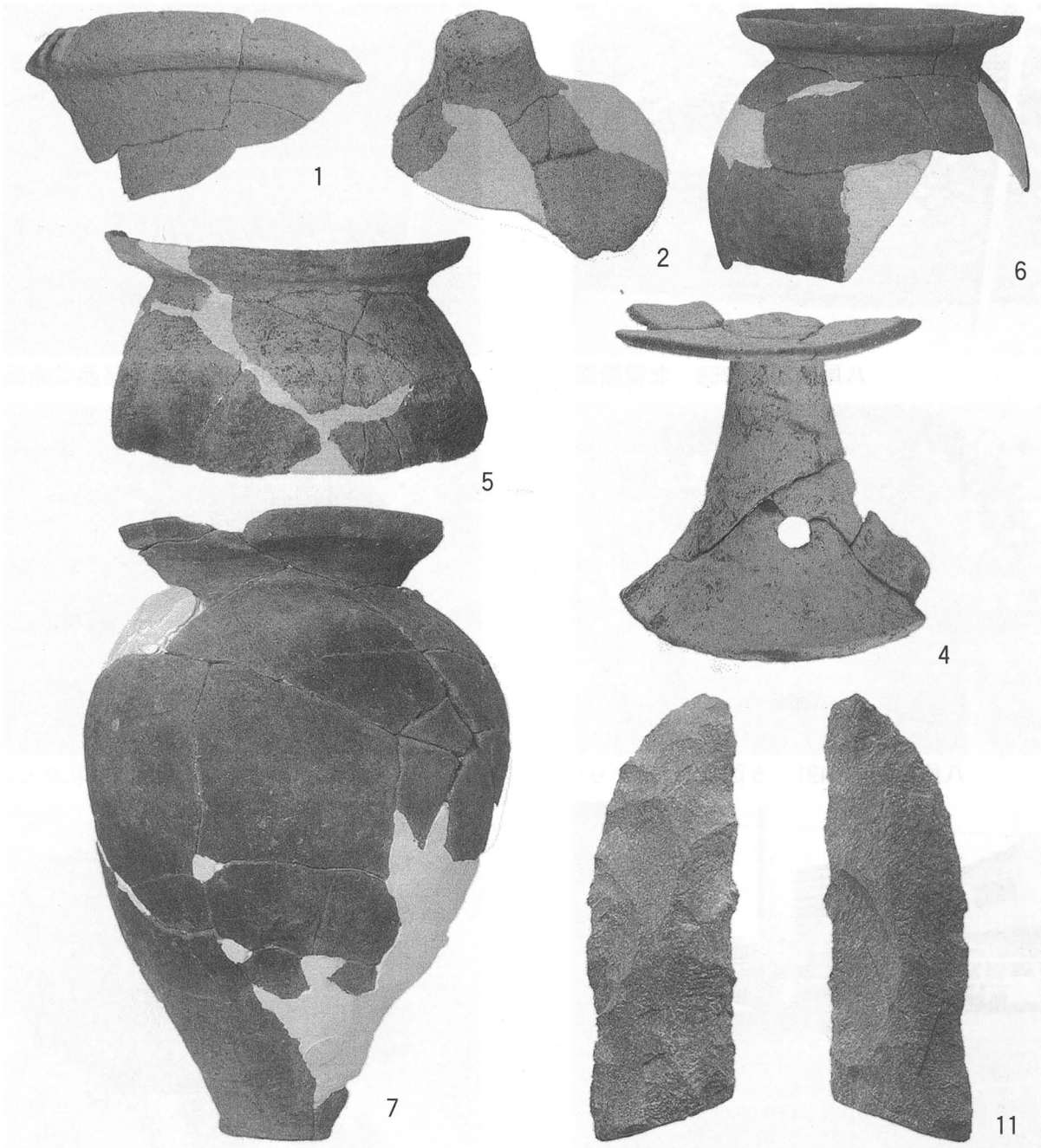
弓削2002-66　調査地周辺（北西から）



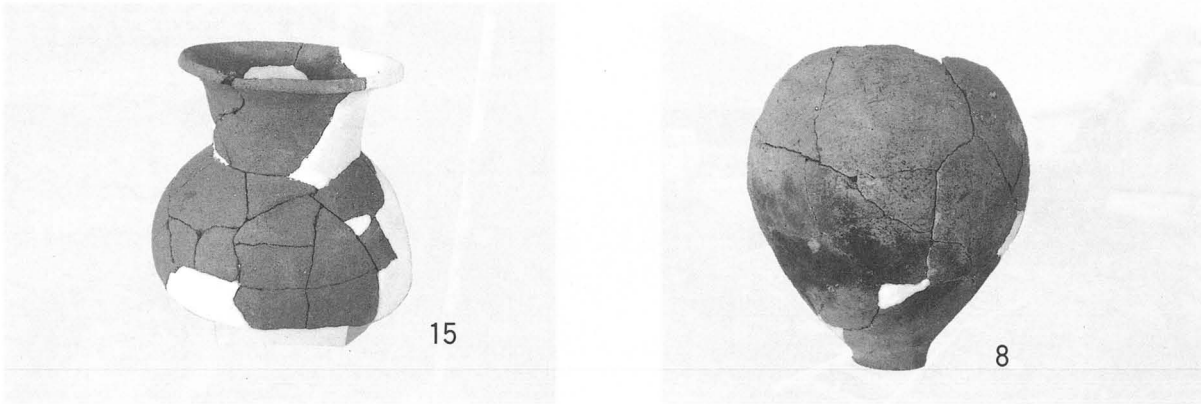
弓削2002-66　第１区全景（南から）

弓削2002-23　調査地周辺（南東から）

弓削2002-23　第１区南壁（北から）



八尾南2001-491　出土遺物



弓削2002-23　出土遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	やおしないいせきへいせい14ねんどはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	八尾市内遺跡平成14年度発掘調査報告書
副 書 名	平成14年度国庫補助事業
巻　　次	
シリーズ名	八尾市文化財調査報告
シリーズ番号	４８
編著者名	岡田清一　高萩千秋　坪田真一　成海佳子　西村公助　樋口　薫　藤井淳弘　吉田野乃
編集機関	八尾市教育委員会
所 在 地	〒581－0003　大阪府八尾市本町１丁目１番１号　☎０７２９－２４－８５５５
発行年月日	西暦２００３年３月31日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北線 °′″	東径 °′″	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
植松遺跡	八尾市永畑町２丁目47番２	27212	63	343632	1353554	20020718	21.6	分譲住宅建設に伴う遺構確認調査
植松遺跡	八尾市植松町８丁目20番、24番、27番及び35番	27212	63	343636	1353537	20021004	42	店舗（パチンコ店）建設に伴う遺構確認調査
老原遺跡	八尾市老原１丁目13番、15番及び16番、17番、19番、20番、22番、23番、24番１の各一部	27212	38	343622	1353627	20021003	9	店舗建設に伴う遺構確認調査
太田遺跡	八尾市太田３丁目148－1、154、154－2	27212	68	343522	1353530	20020522	21.38	分譲住宅建設に伴う遺構確認調査
太田川遺跡	八尾市水越１丁目76-2,76-3	27212	55	343755	1353818	20020822	9	共同住宅建設に伴う遺構確認調査
太田川遺跡	八尾市水越１丁目89,90	27212	55	343753	1353814	20021217	18	倉庫（産業廃棄物積替え作業場）建設に伴う遺構確認調査
恩智遺跡	八尾市恩智北町２丁目6－1の一部	27212	30	343636	1353758	20020523	9	長屋住宅建設に伴う遺構確認調査
恩智遺跡	八尾市恩智北町４丁目631－７	27212	30	343623	1353813	20020805	2	分譲住宅建設に伴う遺構確認調査
恩智遺跡	八尾市恩智北町４丁目290番・289番の各一部	27212	30	343632	1353809	20021212	5	個人住宅建設に伴う発掘調査
楽音寺遺跡	八尾市楽音寺３丁目33	27212	53	343822	1353826	20021031	9	病院建設に伴う遺構確認調査
木の本遺跡	八尾市木の本２丁目20、43、45	27212	35	343552	1353519	20021204～1213	54	遺跡範囲確認(土地区画整理)に伴う遺構確認調査
久宝寺遺跡	八尾市渋川町１丁目53－1、53－2、53－5	27212	23	343715	1353540	20020905	12	分譲住宅建設に伴う遺構確認調査
久宝寺遺跡	八尾市渋川町１丁目37番の一部、38番の一部	27212	23	343713	1353547	20020925	4	分譲住宅建設に伴う遺構確認調査
久宝寺遺跡	八尾市久宝寺４丁目111番、112番、113番の各一部	27212	23	343720	1353533	20021105	24	分譲住宅建設に伴う遺構確認調査
郡川遺跡	八尾市郡川２丁目33番１	27212	60	343716	1353822	20021127	27	特別養護老人ホーム建設に伴う遺構確認調査
郡川東塚古墳	八尾市郡川３丁目56－２	27212	14	343711	1353818	20020801	1.1	個人住宅建設に伴う発掘調査
小阪合遺跡	八尾市青山町４丁目163、165－2、166	27212	40	343706	1353654	20021029	14.09	社会福祉施設建設に伴う遺構確認調査
成法寺遺跡	八尾市南本町１丁目108番１・108番３・109番・110番・111番・114番・115番	27212	73	343716	1353620	20021008	9	分譲住宅建設に伴う遺構確認調査
神宮寺遺跡	八尾市神宮寺５丁目171、172	27212	49	343553	1353809	20021009	46	共同住宅建設に伴う小規模発掘調査
神宮寺遺跡	八尾市神宮寺５丁目130番、131番	27212	49	343554	1353811	20021111	7.9	個人住宅建設に伴う発掘調査
太子堂遺跡	八尾市南太子堂６丁目87－39～44	27212	62	343633	1353513	20020813	8	分譲住宅建設に伴う遺構確認調査
高安古墳群	八尾市黒谷５丁目地内	27212	12	343649	1353846	20020109～0226	50	墓地造成に伴う遺構確認調査
高安古墳群	八尾市大字垣内400番地他13筆	27212	12	343633	1353829	20020826～29	18	墓地建設に伴う遺構確認調査
高安古墳群	八尾市大字大窪1175番１	27212	12	343722	1353853	20021219・20	21	個人住宅建設に伴う発掘調査
東郷遺跡	八尾市桜ヶ丘１丁目97、98、99、100-1	27212	37	343732	1353638	20020910	13.53	共同住宅建設に伴う遺構確認調査
東郷遺跡	八尾市桜ヶ丘１丁目31番３	27212	37	343736	1353637	20020924	8	教会建設に伴う遺構確認調査
中田遺跡	八尾市八尾木北１丁目94番１、94番２、95番、96番	27212	28	343642	1353653	20020529	8	分譲住宅建設に伴う遺構確認調査
花岡山遺跡	八尾市楽音寺６丁目１番地他	27212	77	343817	1353852	20020902·03	21.6	大学キャンパス再整備（大学校舎建築工事）に伴う遺構確認調査
水越遺跡	八尾市服部川１丁目92番地他９筆	27212	42	343720	1353807	20020604	27	農家栽培用温室建設に伴う遺構確認調査
水越遺跡	八尾市水越１丁目122番・123番	27212	42	343751	1353820	20020606	9	店舗建設に伴う遺構確認調査
八尾南遺跡	八尾市若林町２丁目５番	27212	67	343532	1353516	20020527	16	分譲住宅建設に伴う遺構確認調査
八尾南遺跡	八尾市若林町２丁目10番、12番、13番、15番	27212	67	343529	1353517	20020709·11	28	分譲住宅建設に伴う遺構確認調査
弓削遺跡	八尾市志紀町南３丁目120番、172番、217番、218番	27212	71	343531	1353711	20020530	8	分譲住宅建設に伴う遺構確認調査
弓削遺跡	八尾市志紀町南３丁目180番、181番	27212	71	343531	1353705	20020819	48	共同住宅建設に伴う遺構確認調査

	所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
1	植松遺跡	集落	平安時代　鎌倉時代	溝	瓦器	
2	植松遺跡	集落	時期不明	溝	土師器　陶磁器　瓦	
3	老原遺跡	集落	奈良時代	—	土師器	
4	太田遺跡	集落	弥生時代　古墳時代	土坑	弥生土器　土師器	
5	太田川遺跡	集落	弥生時代	遺物包含層	弥生土器	
6	太田川遺跡	集落	時期不明	—	—	
7	恩智遺跡	集落	時期不明	自然河川	弥生土器	
8	恩智遺跡	集落	時期不明	—	—	
9	恩智遺跡	集落	時期不明	—	—	
10	楽音寺遺跡	集落	縄文時代　平安時代	落ち込み	弥生土器　須恵器	
11	木の本遺跡	集落	平安時代	柱穴　土坑	黒色土器　土師器　瓦	
12	久宝寺遺跡	集落	時期不明	—	—	
13	久宝寺遺跡	集落	時期不明	—	—	
14	久宝寺遺跡	集落	古墳時代	土坑	弥生土器　土師器　須恵器	
15	郡川遺跡	集落	時期不明	—	—	
16	郡川東塚古墳	古墳	古墳時代	横穴式石室基礎石	埴輪	
17	小阪合遺跡	集落	古墳時代	溝	土師器、須恵器	
18	成法寺遺跡	集落	弥生時代　平安時代 鎌倉時代	遺物包含層	弥生土器　土師器　黒色土器 瓦器　瓦	
19	神宮寺遺跡	集落	弥生時代　古墳時代 奈良時代	遺物包含層	弥生土器　埴輪　須恵器 土師器	付近に古墳あるいは埴輪窯の存在が示唆される。
20	神宮寺遺跡	集落	時期不明	—	—	
21	太子堂遺跡	集落	平安時代	自然河川	瓦器	
22	高安古墳群	古墳	古墳時代	古墳	土師器　須恵器　石器	
23	高安古墳群	古墳	時期不明	土坑	—	
24	高安古墳群	古墳	古墳時代	—	—	古墳測量調査
25	東郷遺跡	集落	古墳時代	土坑	古式土師器	
26	東郷遺跡	集落	時期不明	土坑　溝	—	
27	中田遺跡	集落	時期不明	—	—	
28	花岡山遺跡	集落	時期不明	—	—	
29	水越遺跡	集落	時期不明	—	—	
30	水越遺跡	集落	時期不明	—	—	
31	八尾南遺跡	集落	古墳時代	—	古式土師器	
32	八尾南遺跡	集落	弥生時代	土坑	弥生土器	
33	弓削遺跡	集落	時期不明	溝	土師器	
34	弓削遺跡	集落	弥生時代	遺物包含層	弥生土器　須恵器	

八尾市文化財調査報告48
平成14年度国庫補助事業

八尾市内遺跡平成14年度発掘調査報告書

発　行　日　2003年３月31日
編集・発行　八尾市教育委員会
〒581-0003　八尾市本町１－１－１
TEL(0729)24－８５５５（直通）
印　　刷　(株)近畿印刷センター

＜八尾市刊行物番号H14－80＞